シトゥ『三十頌註』研究：チベット語の文字体系

班青東周・根本裕史

1　序

本研究は、古典チベット語文法学の代表的な論書の一つであるシトゥ『三十頌註』の読解に基づき、チベット語の文字（yi ge）や助詞（tshig phrad）に関するチベット人自身の理解を明らかにするものである。

著者シトゥ・チューキ・チュンネ（Si tu chos kyi ’byung gnas: 1699/1700–1774）は東チベット、カム地方のデルゲ（Sde dge）出身でカルマ・カギュ派に属するシトゥ（si tu < Ch. situ 司徒）八代目化身である。ネパール（Bal yul）を二回、ラサを五回訪問し、ネパール人学者の下でサンスクリット語を学んだ。さらに、ギェルモ・ツァワ・ロン地方（Rgyal mo tsha ba rong、現在の四川省アバ・チベット族チャン族自治州）や雲南（Yun nan）を訪れ言語調査を行なったことが知られている。サンスクリット文法学、サンスクリット辞書学、チベット語文法学、仏教学、医学などに広く精通した学者であり、全 14 秩に及ぶ著作集を残している[1]。

シトゥは 1729 年から 1744 年まで、十五年かけて『三十頌』および『性入法』に対する註釈を完成させた。奥書[2]によると、この註釈が完成したのは 1744 年 2 月下旬である。サンスクリット文法学の知識を用いてチベット語の用法を理論的に正当化しようとしている点は、シトゥ註の大きな特色である[3]。シトゥ註の成立と共に、チベットではタティ・リンチェントンドゥプ（Pra ti rin chen don grub: 17 世紀末から 18 世紀）の見解に従うタティ流（Pra ti’i lugs）と、シトゥの見解に従うシトゥ流（Si tu’i lugs）という二大学派が誕生した。後代の文法学者達の内、例えばダルマバドラ（Dharmabhadra: 1772–1851）とヤンチェン・ドゥプペー・ドルジェ（Dbyangs can grub pa’i rdo rje: 1809–1887）はシトゥ流に属し、ツェテン・シャプドゥン（Tshe tan zhabs drung: 1910–1985）とムゲ・サムテン（Dmu dge bsam gtan: 1914–1993）はタティ流に属する。この二つの文法学派の伝統は現代でも続いている。

シトゥ註の奥書には以下のような題目が掲げられる。

> *Sum cu pa dang rtags kyi ’jug pa’i gzhung gi rgyas ’grel mkhas pa’i mgul rgyan mu tig phreng mdzes*（『三十頌』と『性入法』の理論に対する詳細な詳解：智者の首飾りの連珠）

本書はトンミ・サンボータ（Thon mi sam bho ta）[4]の『三十頌』および『性入法』に対する註釈である。本研究ではこの内『三十頌』に対する註釈部分のみを扱う。連作の初回となる本稿では『三十頌』冒頭の敬礼文に対する註釈と、文字論についての註釈を取り上げる。翻訳研究を提示する前に、理解の助けとするための要語解説を与える。

---

[1] シトゥの生涯は Smith 2001: 91–93 にまとめられている。シトゥの生年（1699/1700）をめぐる問題については Smith 2001: 290, n. 211 を参照。

[2] 班青東周 2021: 124f. を参照。

[3] シトゥは『カータントラ』（*Kātantra*）に対する註釈を著した。また、彼は『アマラ・コーシャ』（*Amarakośa*）のチベット語訳改訂という大事業を行なっている。

[4] トンミ（Thon mi）の名はしばしば「トゥミ」（Thu mi）とも呼称される。シトゥは一貫して「トゥミ」という呼称を用いる。名称とその由来をめぐる諸説については班青東周 2021: 116 を参照。

2　要語解説

སུམ་བཅུ་པ་ sum bcu pa『三十頌』：　シトゥによれば、もともと『三十頌』は八章本（bstan bcos brgyad）を構成する一つの章であった。全八章の内、『三十頌』および『性入法』として伝わる二つの章を除いた他の六章は現存しない。sum bcu pa という題目を「三十の ka 系列文字について説示する論書」という意味に取る解釈もあるが、シトゥは「三十の偈頌からなる論書」という意味で理解する。なお、『三十頌』には、敬礼文（mchod brjod）と著作宣言（rtsom par dam bca' ba）の三詩節も含めれば、合計三十三の詩節が存在するが、それらの三詩節はシトゥによると幻の八章本の全体を束ねるものであるので、『三十頌』本文からは除外される。

ཡི་གེ་ yi ge「音節」「音素」「文字」：　サンスクリットの akṣara「音節」または varṇa「音素」に相当する語。シトゥは yi ge という用語を主に「音節」（/a/, /i/などの母音、/ka/, /kha/などのような子音・母音の結合体）と「文字」（ཀ་や ཁ་など）の二つの意味で用い、まれに「音素」の意味で用いる。シトゥ註を読解する際には、常に yi ge 多義性に注意しなければならない。

ཨཱ་ལི་ ā li「a 系列音」「a 系列記号」：　サンスクリットの āli（「a の列」）に相当する概念。サンスクリットでは十四の母音（a, ā, i, ī, u, ū, r̥, r̥̄, l̥, l̥̄, e, ai, o, au）に、アヌスヴァーラ（aṁ）とヴィサルガ（aḥ）の二つを加えた十六の音が āli である。チベット語の場合には、/i/、/u/、/e/、/o/の四つの母音を āli と呼ぶ。サキャ・パンディタはチベット語の/a/音も含め、合計五つの āli を認めるが、シトゥによればトンミ・サンボータが論じているチベット語の āli は/a/を除いた四つのみである。したがって、シトゥの見解によれば a 系列音に/a/は含まれないことになる。さらに、それらの四つを表記した ི（-i, gi gu「湾曲したもの」）、ུ（-u, zhabs kyu「足枷」）、ེ（-e, 'greng bu「立ち上がったもの」）、ོ（-o, rna ru / na ro「カモシカの角」）の四つの母音記号も āli という名称で呼ばれる。

ཀཱ་ལི་ kā li「ka 系列音」「ka 系列文字」：　サンスクリットの kāli（「ka の列」）に相当する概念。/ka/から/a/までの三十音を kāli と呼ぶ。また、それらの音を表記した ཀ་ から ཨ་ までの三十の基本文字（ming gzhi）を kāli と呼ぶこともある。チベット語の kāli は子音（consonant）を含む要素であるとは限らないことに注意を要する[5]。なぜなら、その三十音の中には འ་ と ཨ་ によって表記される/a/も含まれるからである。

དབྱངས་ dbyangs「母音」「母音記号」：　サンスクリットの svara に相当する概念。母音（vowel）のことを指す。例えば/ka/に含まれる/a/という音素がそれである。四つの āli を表記する ི（-i, gi gu「湾曲したもの」）、ུ（-u, zhabs kyu「足枷」）、ེ（-e, 'greng bu「立ち上がったもの」）、ོ（-o, rna ru「カモシカの角」）という四つの母音記号を dbyangs と呼ぶ場合もある。

སྲོག་ srog「命」：　dbyangs と同義で「母音」を意味する。サンスクリット音声論では、それ自体で発声不可能な/k/などを発声可能にするために、子音/a/が「命」として吹き込まれるといった説明が可能であるが[6]、シトゥはチベット語の文字体系については、そのような子音と母音の結合と

[5]Bacot (1928: 76) は『三十頌』第 4 詩節（Bacot 1928 および稲葉 1986 では第 1 詩節に相当）の āli を voyelles（「母音」）、kāli を consonnes（「子音」）と訳し、稲葉 (1986: 320f.) も同様に āli を「母音」、kāli を「子音」と訳す。Miller (1976: 33ff.) は Bacot 1928 および稲葉 1986 の研究を踏まえ、同詩節の解釈を詳しく検討するが、āli と kāli をそれぞれ「母音」と「子音」とみなせるか否かという点については考慮していないようである。

[6]サンスクリット音素表に含まれる/h/などは単独では発声不可能であるため、発声のために a 音が読まれるべきであるという説明が実際にサンスクリット文典『バーラ・マノーラマー』（*Bālamanoramā*）に見出される（キャット・川村 2022: 178, n. 9）。

いう説明は適切でないと考える。

གསལ་བྱེད་ **gsal byed** 「子音」「子音等表記文字」：　サンスクリットの vyañjana に相当する概念。サンスクリットでは三十三の子音（k, kh, g, gh, ṅ, c, ch, j, jh, ñ, ṭ, ṭh, ḍ, ḍh, ṇ, t, th, d, dh, n, p ph, b, bh, m, y, r, l, v, ś, ṣ, s, h）を指す。シトゥの文法学では/ka/から/a/までの三十音（いずれも母音/a/を伴った形である）と、それらを表記する ཀ་ から ཨ་ までの三十の文字を gsal byed と言う。

མིང་གཞི་ **ming gzhi** 「基本文字」「基字」「基本音素」：　ཀ་から ཨ་までの三十の子音等表記文字（kāli）を ming gzhi とも言う。また、後置字や前置字などの他要素の導入先となる文字を ming gzhi と呼ぶ場合もある（例：བོད་ における བ་、སྒྲུབ་ における ག་ など）。混同を避けるため、本研究では前者を「基本文字」、後者を「基字」と訳し分ける。さらに、『三十頌』の敬礼文（2ab）では ming gzhi が「基本音素」という意味でも用いられる。

རྗེས་འཇུག་ **rjes ’jug** 「後置字（として使用可能な文字）」：　基字の後に置くことのできる ག་ -g、ང་ -ng、ད་ -d、ན་ -n、བ་ -b、མ་ -m、འ་ -’(a)、ར་ -r、ལ་ -l、ས་ -s の十文字。実際に後置字として機能していない場合であっても、後置字として使用可能なこれらの十の文字を rjes ’jug と呼ぶことがある。

སླར་བསྡུ་ **slar bsdu** 「完結助詞」：　終助詞（rdzogs tshig）とも呼ばれる。単語や文の末尾に置かれる助詞である。話者の思考内容の終結を聞き手に理解させる働きを持つ。

རྣམ་དབྱེ་ **rnam dbye** 「格」「格接辞」：　サンスクリットの vibhakti[7]に相当する概念。属格や具格などの格（case）そのものを指す場合もあれば、属格助詞や具格助詞などといった、それらの格を表示する言語的要素を指す場合もある。第一格〈語形のみの提示〉（ngo bo tsam ston pa）から第八格〈呼びかけ〉（’bod pa）まで、合計八つの格が存在する。

3　翻訳研究について

ここに提示する翻訳は、共著者の一人である班青東周の 2021 年広島大学提出学位請求論文「チベット語古典文法書『シトゥ大註』の研究」の付論（pp. 123–320）に提示したシトゥ『三十頌註』翻訳研究を大幅に改稿したものである。本研究では青海民族出版社より刊行された下記の洋装本を底本とする。

> *Karma si tu’i sum rtags ’grel chen mkhas pa’i mgul rgyan mu tig phreng mdzes* (司都文法詳解). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2001.

この他にシトゥ・チューキ・チュンネ著作集（gsung ’bum）に収録されるテクストや、独立のペチャ（dpe cha）[8]が存在するが、いずれも重要な異読情報を与えるものではない。

シトゥ自身が与える科文（sa bcad）に従って段落分けを行なった上、さらに訳者の判断で任意に小段落に分割し、チベット語本文と訳文を提示した。『三十頌』の詩節番号は Graf (2019: 447–452) に従った。

---

[7] パーニニ文法学では、vibhakti という術語は名詞語尾だけではなく、動詞語尾を指す術語としても使用され、さらには第二次接辞（taddhita）に対して同じ術語が適用されることがある（川村 2021: 54, 60, n. 7）。

[8] BDRC（Buddhist Digital Resource Center）のウェブサイトには少なくとも三種の出版地不明・出版年不明のペチャが公開されている（W1NLM1045, MW1KG12674, W2KG210028）。

4　翻訳研究

[0]

[01]

ཤེས་བྱའི་དཀྱིལ་འཁོར་རྣམ་པར་བཀྲ་བ་ནམ་མཁའི་མཐའ་ཡི་མུ་ཁྱུད་ཅན། །
གཅིག་ཅར་འཇལ་བའི་འཁྲུལ་མེད་བློ་མངའ་འཇམ་པའི་དབྱངས་སོགས་དཔའ་[9]རྣམས་ཀྱིས། །
རྟག་ཏུ་བསྙེན་འོས་ཞབས་ཀྱི་ཆུ་སྐྱེས་ལ་ཆགས་འཁོར་ལོའི་རྡུལ་ཕྲན་ཡང་། །
དྲན་པ་ཁོ་ནས་རྨོངས་པའི་འཇིགས་འཕྲོག་ཤཱཀྱའི་གཙོ་བོ་ལ་བཏུད་ནས། །[10]

虚空の果てを周縁とする多様な所知の集合を一挙に認識する[11]
錯誤のない叡智を具備しマンジュシュリー（文殊）などの勇者達でさえも
常に崇拝すべきお方、そのお方の水蓮のようなおみ足に付着した輪の塵を
念想するだけでも無知の恐れを取り除く釈迦族の長（釈尊）に敬礼し

གངས་རིའི་ཁྲོད་ཀྱི་མཁས་པ་རྣམས། །
སྨྲ་བའི་ངག་སྦྱོར་ལ་བརྟེན་ནས། །
དོན་གྱི་མཚན་ཉིད་རབ་གསལ་སླད། །
བརྡ་སྤྲོད་གཞུང་འདི་དགྲོལ་བར་བྱ། །

雪山チベットの学者達が
語られた言葉の結合に依拠して
対象の特質を解明できるようにするべく
この文法理論を〔私は〕註解することにしよう。

[02]

དེའང་འདི་སྐད་ཐོས་ཏེ། བདག་ཅག་གི་སྟོན་པས་འཇམ་དཔལ་རྩ་བའི་རྒྱུད་སོགས་སུ་ཇི་ལྟར་ལུང་བསྟན་པ་བཞིན་ཁ་བ་ཅན་གྱི་ཡུལ་དབུས་སུ་གྱུར་པ་ལྷ་ལྡན་ཉིད་དུ་ལི་ཙྪ་བྱི་རིགས་ལས་ཆོས་སྐྱོང་བའི་རྒྱལ་པོ་ཚར་དུ་དངར་བ་རིམ་པར་བྱོན་པ་ལས་ཉི་མ་ལྟ་བུར་གྲགས་པ་རྣམ་པར་གསལ་བ། རྒྱལ་པོ་ཆེན་པོ་མིའི་ལྷའམ་ཡང་ན་སྐྱེ་བོ་མི་སྲུན་པ་གདུལ་དཀའ་བ་རྣམས་ལུགས་གཉིས་ཀྱི་སྲོལ་བཟང་པོའི་ལམ་དུ་ནན་གྱིས་སྐྲོང་ཞིང་། མཛའ་བ་དང་མི་མཛའ་བ་དང་བར་མ་རྣམས་ལ་ཐུགས་རབ་ཏུ་སྙོམས་པའི་ཕྱོགས་སུ་མ་ལྷུང་བའི་ཕྱིར་ཤིན་ཏུ་དྲང་བའི་བཀའ་ཁྲིམས་བཙན་པོའི་གནས་ལས་མངའ་འོག་པ་རྣམས་འདའ་བའི་སྐབས་མེད་པ་དང་། ཕྱི་དང་ནང་གི་བྱ་བའི་གནས་ཐམས་ཅད་མ་འཆོལ་ཞིང་འཁྲུགས་པ་མེད་པར་དཔྱད་པ་གསུམ་གྱིས་གཏན་ལ་འབེབས་ཤིང་མཛངས་པར་གྲགས་པ་རྣམས་ཀྱིས་ཀྱང་དགོངས་པའི་གཏིང་དཔོག་པ་མེད་

[9] 刊本に དཔའ་ とあるが誤記と思われる。木版本や手書き写本にしたがって དཔལ་ に訂正する。

[10] シトゥは冒頭の四詩脚を自ら次のようなサンスクリットに訳している。ākāśāntapradhikaśabalaṁ [*sic.*] maṇḍala[ṁ] jñeyatāyāḥ [*sic.*] mānābhrāntaiḥ [*sic.*] dhīrair yugapad mañjughoṣādivīraiḥ | cakrāmbhoje sthitam api rajo nityasevārhapāde śākyaśreṣṭhaṁ mūḍhabhayaharaṁ smr̥tyamātreṇa [*sic.*] natvā ||

[11] 所知の全体（shes bya'i dkyil 'khor, *jñyeyamaṇḍala）を一挙に認識する知といえば仏陀の一切相智もしくは智慧法身のことである。SDV D 14b6 (cf. Eckel 1987: 102): mkhyen pa'i skad cig gcig gis ni || shes bya dkyil 'khor kun khyab can || yon tan rin chen tshogs ting 'dzin || bsam gtan bsam mi khyab pa'i rten ||（「全ての所知の集合を一刹那の智慧によって包摂するものであるので〔法身は〕宝のような功徳の集積と思議を超えた三昧と静慮の拠り所である。」）TS k. 3449: ekajñānakṣaṇavyāptaniḥśeṣajñeyamaṇḍalaḥ | surāsuraśiroratnabhūtaḥ siddho 'tra sarvavit ||; TS D 125b6f.: shes bya ma lus pa yi tshogs || shes pa'i skad cig gcig khyab mdzad || lha dang lha min gtsug nor bur || gyur pa'i kun mkhyen 'di grub 'gyur ||（「ここで一切智者は、全ての所知の集合を一刹那の智慧によって包摂する者であるので、諸天と阿修羅の冠の宝石のような存在であることが確立する。」）

པའི་ཕྱིར་སྒམ་པོ་སྟེ་སྲོང་བཙན་སྒམ་པོ་ཞེས་མཚན་སྙན་པར་གྲགས་པ་ཉིད་སྐྱེ་དགུའི་དཔལ་དུ་ཤར་ཏོ། །

さて、以下のように伝え聞く。我らの教主（釈尊）が『聖文殊師利根本タントラ』などで予言しているように、雪国（チベット）の中央地域にあるラデン（Lha ldan）[12]において、リッチャヴィ族から護法の王達が次々に出現した。その内で、太陽のように広く知られる光り輝く大王、人々の王、あるいは、調伏しがたい野蛮な人々を〔政教という〕二つの流儀の素晴らしい伝統の道（lugs gnyis kyi srol bzang po'i lam）に向かうように懸命に指導（srong）し、親しい人も、親しくない人も、中間の人も公平に扱って依怙贔屓しないので、非常に公明正大（btsan）な法律の及ぶ範囲から臣民が逸脱する余地がなく、内外の全ての課題を混乱も誤りもなく三つの考察（dpyad pa gsum）[13]によって解決し、賢者としてよく知られる者達ですらそのお考えの深さを測り知ることができないゆえに深奥（sgam po）なる、ソンツェン・ガンポ（Srong btsan sgam po）という美しい名前で実に広く知られる者が人々の輝きとして現れた。

[03]

དེའི་ཚེ་དེའི་མདུན་ན་འདོན་མཁས་པར་གྲགས་པ་མང་པོའི་དབུས་སུ་མིང་གི་ཡི་གེ་རབ་ཏུ་བརྗིད་པ་ཐུ་མི་སམ་བྷོ་ཏས། ཆོས་ཀྱི་རྒྱལ་པོ་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའི་བཀའ་དང་རང་ཉིད་བྱང་ཆུབ་མཆོག་གི་སྨོན་ལམ་ཁྱད་པར་ཅན་གྱི་མཐུས་འཕགས་པའི་ཡུལ་དུ་བརྒྱལ་ཏེ། པཎྜི་ཏ་ལྷ་རིག་སེང་གེ་དང་། བྲམ་ཟེ་ལི་བི་ཀ་ར་སོགས་བསྟེན་ནས་ཕྱི་ནང་གི་རིག་པ་མང་པོར་སྦྱངས་ཤིང་བསྟན་བཅོས་མང་པོས་མགུལ་བ་བརྒྱན་ནས་སླར་ལོག་པའི་ཚེ། སྐུ་མཁར་མ་རུར་ན་ག་རའི་ཡི་གེར་དཔེ་བྱས་ཏེ་བོད་ཡིག་གི་གཟུགས་བརྩམས་ཏེ་ཡིག་ཕུད་དུ། རྒྱལ་པོར་བྱ་དགའི་ལམ་ལས་དྲངས་པའི་བསྟོད་པས་ཆེད་དུ་བརྗོད་པས་དགེས་ཤིང་། རིམ་པར་བསྟན་བཅོས་འདི་ལ་སོགས་པ་བོད་ཀྱི་བརྡ་ཡང་དག་པར་སྦྱོར་བའི་བསྟན་བཅོས་བརྒྱད་ལ་སོགས་པ་མཛད་པས་སྨག་ལ་སྒྲོན་མེ་བཏེག་པ་བཞིན་དུ་ཤཱཀྱའི་བསྟན་པ་བྱང་ཕྱོགས་སུ་རྒྱས་པའི་ལམ་གྱི་ཐོག་མ་སྣང་བར་གྱུར་ཏོ། །ཞེས་གྲགས་སོ། །

その時、賢者として知られる多くの彼の側近大臣達の中で、とても素晴らしい響きのするお名前を有するトゥミ・サンボータ（Thu mi sam bho ta）[14]が、法王菩薩（ソンツェン・ガンポ）のご命令と自身の無上菩提に向けられた特別な誓願の力によって聖者の国（インド）にたどり着いた。そして、パンディタ・ラリクセンゲ（Lha rig seng ge）や婆羅門リピカーラ（Li bi ka ra）[15]などに親近して内外の多くの学問を習得し、多くの論書を首飾りにして〔チベットに〕戻って来た。その時、クンカルマル〔宮殿〕においてナーガリー（nāgarī）文字を手本にしてチベット文字の形を作った。

[12]『聖文殊師利根本タントラ』に現れるネーパーラ（Nepāla）という土地の名前がチベット語でラデン（Lha ldan）と訳される。ラデンはチベットの都ラサ（Lha sa）の別名でもあり、今の記述でもラサを指していると思われる。MMK 621.12ff.: nepālamaṇḍale khyāte himādreḥ kukṣim āśrite || rājā mānavendras tu licchavīnāṃ kulodbhavaḥ | so 'pi mantrārthasiddhas tu mahābhogī bhaviṣyati ||; MMK D 311a2f.: lha ldan yul zhes bya ba yi || gangs can ri yi nang gnas pa'i || rgyal po mi yi lha zhes pa || li tstsha bī rnams rigs su byung || de yang sngags kyi don bsgrubs te || longs spyod che dang ldan par 'gyur ||（「さらに、雪山の中に位置するかの有名なネーパーラ・マンダラ／神々の住まう土地［ラデン・ユル］において、人々の神である王がリッチャヴィの一族に生まれるであろう。実に彼もまた、真言の意義を成就した者となり、大享受者となるであろう。」）

[13]仏教認識論においては、[1] 直接知覚の内容と矛盾しないかどうか、[2] 推理知の内容と矛盾しないかどうか、[3] 聖典の前後の記述と矛盾しないかどうかという三つの考察（dpyad pa gsum）に耐える言葉が、完全に知覚不可能な対象（shin tu lkog gyur, *atyantaparokṣa）についての知識をもたらす有効な聖典として認められる（Tillemans 1999: 37ff.）。しかし、ここで dpyad pa gsum という表現は単に「正しい考察」という程度の意味で用いられているのであろう。

[14]既に示したように（fn. 4）、トンミ（Thon mi）の名はしばしば「トゥミ」（Thu mi）とも表記される。シトゥは一貫して「トゥミ」という呼称を用いる。

[15]サンスクリットの lipikāra「文字を作る人」に相当する。

そして、最初の文字作品（yig phud）で、技巧的な様式（bya dka’i lam）[16]で表した讃詞[17]によって王を讃えたので、王は喜んだ。さらに、この論書（『三十頌』と『性入法』）をはじめとする、チベット語の言語協約の正しい使用に関する八章本（bstan bcos brgyad）[18]などを順に作成したので、ちょうど闇の中で灯火を掲げると道の始まりが照らされるのと同じように、釈尊の教えが〔インドの〕北方（チベット）に伝わる道の始まりが照らされた。

[04]

དེ་ལས་སུམ་ཅུ་པ་དང་རྟགས་ཀྱི་འཇུག་པ་གཉིས་པོ་ན་དེང་སང་གི་བར་དུ་ཡོད་ཅིང་། མཁས་བླུན་མང་པོས་འགྲེལ་བཤད་ཀྱི་ཁུར་བླངས་པས་དོན་གཞན་དང་གཞན་དུ་འདོན་པའི་གླེགས་བམ་གྱི་ཕྲེང་བར་གྱུར་མོད། འོན་ཏང་རྣམ་དཔྱོད་དང་ལྡན་པ་ཁ་ཅིག་གིས་རིགས་པའི་མདའ་རྣོན་གྱིས་ཕུག་པས་གཞུང་དོན་མང་པོ་ཞིག་དཔྱིས་ཕྱིན་པར་གྱུར་ཅིང་། ཕལ་ཆེར་ནི་བྱང་ཕྱོགས་འདིར་གཙུག་ལག་གཉིས་ཀ་བར་དུ་ཉམས་པའི་དབང་ལས་བཤད་རྒྱུན་དང་བསྟན་བཅོས་ཀྱི་ཡན་ལག་གཞན་མ་ཚང་བའི་ཕྱིར་མི་གསལ་བ་རྣམས་ཁ་ཁྲལ་འཇལ་བ་ཙམ་ལས་དོན་དུ་གནས་པར་མ་མངོན་པས། བདག་ལྟ་བུས་མཐའ་གཅིག་ཏུ་བཤད་པར་སླ་བ་མ་ཡིན་ཀྱང་བློ་གྲོས་ཀྱི་ནོར་དང་ལྡན་པ་གཞན་དག་གིས་ཀྱང་ཆེད་དུ་བསྐུལ་བ་དང་། རང་ཉིད་གཞུང་ཁྱད་པར་དུ་འཕགས་པ་འདི་དག་ལ་འཇུག་པར་འདོད་པའི་སྤྲོ་བ་བརྟས་པས་རྗེས་དཔག་གསུམ་གྱིས་ཇི་ལྟར་དཔོག་པ་དགྲོལ་བར་བྱའོ། །

それらの内、現存するのは『三十頌』と『性入法』のみである。これまでに数多くの学者達や愚者達が講釈の任務を引き受けた結果、〔『三十頌』と『性入法』の〕意味を様々に解釈する一群の論書が生まれた。ところが、ある賢者は論理という鋭い矢で射抜かれたことによって多くの論書の内容を習得したけれども、ほとんどの人達は不明点について必要最小限のことを推し量るのみ（kha khral ’jal ba tsam）であり、真相には達しなかったことが知られている（don du gnas par ma mngon）[19]。その理由は、この北国（チベット）で〔政教に関する〕二つの学問がいずれも中途で衰退したことにより、教導の伝統が断たれ、論書の他の部分の欠落が生じたためであった。それゆえ、私のような者が確固として解明するのは容易ではないが、智慧という宝を持つ他の者達が

[16]次の脚註に示すように、トゥミは各詩脚が単一の母音のみ（/a/のみ、/i/のみなど）で構成される詩を作ったと伝えられている。「母音の限定」と呼ばれるこの技法はダンディンの『詩鏡』第 3 章（KĀ III 83–87）に紹介される。四種以下の母音・子音・調音位置で限定される詩は技巧的であり、作成困難である（duṣkara, bya dka’）が、四種を超えるものは作成し易いとダンディンは言う。KĀ III 83: yaḥ svarasthānavarṇānāṁ niyamo duṣkareṣv asau | iṣṭaś catuḥprabhṛty eṣa darśyate sukaraḥ paraḥ ||; dbyangs dang gnas dang yi ge rnams || nge pa gang ’di bya dka’ la || bzhi la sogs pa rab bstan ’di || gzhan ni bya sla dag tu ’dod ||（「母音、調音位置、子音に関する四種などのこの限定が、作成困難な〔詩〕の中で好まれている。これが以下に例示される。その他は作成が容易である。」）

[17]トゥミはソンツェンガンポを賛嘆する次のような詩を詠んだと言われている。*Rgyal rab gsal ba’i me long* 89.14ff. (cf. 今枝他 2015: 128ff.): zhal ras gsal la rang mdangs gang ba bzang || gdams ngag zab la ma chad tha dad dang || las ngan bag chags thams cad bsal mdzad pa || ’phags pa ma pham yang dag dam pa la || bde gshegs bden nges ye shes te || ting ’dzin zhi nyid rig cing gzigs || nyon mongs tshogs bcom mgon po mchog || dug gsum bdud ’dul kun tu thul || spyan ras gzigs dbang thugs kyi sras || srong btsan sgam por mtshan gsol ba || chos rgyal khyed la phyag ’tshal lo ||（「あなたのお顔は光輝き、生まれながらにして満ち足りて見事な色合いをしている。あなたの教えは深遠であり、途切れずして、しかも多種多様な内容を具える。あなたはあらゆる悪業を潜在余力もろともに断じておられる。あなたは不滅にして最高の真の聖者であり、真理を確定する智慧を具える善逝であり、三昧によって寂静の境地を認識・直観しておられる。あなたは煩悩の集積を破壊した至高の守護者であり、三毒という魔を完全に調伏している。アヴァローキテーシュヴァラ［観世音］の精神を継承するご子息であられる、ソンツェン・ガンポという名の、法を護る王よ、私はあなたに敬礼します。」）

[18]パリ・サンギェによると、トゥミが著した幻の八章本の構成は以下の通りである（*Gab pa mngon phyung* 40.2ff.）。[1] *Yi ge’i rnam ’gyur gyi bzo stangs*, [2] *Ka mad sum cur bsgyur ba*, [3] *Sdeb sbyor sgrig pa’i gzhi ma*, [4] *Thon mi’i mdo rdzi’i sgra mdo*, [5] *Sngags kyi bklags thabs mun pa sel ba’i sgron me*, [6] *Sum cu ba*, [7] *Rtags ’jug*, [8] *Klu dbang mgul rgyan*.

[19]直訳は「真相に立脚するとは知られなかった」。

殊更に請願し、また、自分自身がこの特別に素晴らしい〔文法学の〕学問体系に趣入したいという意欲が湧いてきたので、三種の推理（rjes dpag gsum）[20]によって〔トゥミの文法学を〕どのように理解できるかを明らかにしよう。

[1]

དེ་ལས་ཐོག་མར་སུམ་ཅུ་པའི་གཞུང་འཆད་པ་ལ། བསྟན་བཅོས་རྩོམ་པ་ལ་འཇུག་པའི་ཡན་ལག་དང་། བསྟན་བཅོས་དངོས་སོ། །

その最初に『三十頌』という論書を解説しよう。これに関して〔二点ある〕。[1] 論書の著作に入るための要因、[2] 論書の本体。

[11]

དང་པོ་ལ། མཚན་སྨོས་པ་དང་འགྱུར་ཕྱག་གོ །

第一に関して〔二点ある〕。[11] 題目の提示、[12] 翻訳者による敬礼。

[111]

དང་པོ་ལ་དངོས་དང་། མཚན་དོན་བཤད་པ། དོགས་གནས་དཔྱད་པ་གསུམ་ལས། དང་པོ་ནི།

> རྒྱ་གར་སྐད་དུ། བྱཱ་ཀ་ར་ཎ་མཱུ་ལ་ཏྲིཾ་ཤད་ནཱ་མ།
> བོད་སྐད་དུ། ལུང་སྟོན་པ་རྩ་བ་སུམ་ཅུ་པ་ཞེས་བྱ་བ།

ཞེས་འབྱུང་བ་སྟེ། བྱཱ་ཀ་ར་ཎ་ལུང་སྟོན་པ། མཱུ་ལ་རྩ་བ། ཏྲིཾ་ཤད་སུམ་ཅུ་པ། ནཱ་མ་ཞེས་བྱ་བའོ། །

第一に関して〔三点ある〕。[111] 本文の提示、[112] 題目の意味に関する説明、[113] 疑問点についての考察。第一（本文の提示）は以下の通りである。

> インドの言葉で ***Vyākaraṇatriṁśadnāma***。
> チベット語で ***Lung ston pa rtsa ba sum cu pa zhes bya ba***。

vyākaraṇa とは「文法学」であり、mūla とは「根本」であり、triṁśat とは「三十」であり、nāma とは「…という」である。

[112]

གཉིས་པ་ནི། སྒྲའི་མཚན་ཉིད་ལུང་དུ་སྟོན་ཅིང་ལེའུ་ཕྱི་མ་རྣམས་ཀྱི་བརྟེན་གཞིར་གྱུར་པ་གང་ཞིག་གཞུང་ཚད་ཤློ་ཀ་སུམ་ཅུར་གནས་པས་ན་དེ་སྐད་ཅེས་བྱའོ། །

第二（題目の意味に関する説明）。語の特徴を聖言（lung）として示すもの（ston pa）であり、後続の諸々の章（le’u）[21]の拠り所となるものであり、なおかつ論書の長さが三十シュローカあることから、そのように呼ばれる。

[113]

[20] 実在の力に基づく推理（dngos stobs rjes dpag）、一般的是認に基づく推理（grags pa’i rjes dpag）、信頼できる人の言葉に基づく推理（yid ches rjes dpag）の三種である。

[21] 上述のように（0-3, 0-4）トゥミは八章本（bstan bcos brgyad）を著したと言われており、『三十頌』は現存しない六つの章を含む大論書の中の一つの章である。シトゥはその各章を le’u または skabs と呼ぶ。

[113.1]

གསུམ་པ་ནི། འགའ་ཞིག་འདི་སྐད་དུ། འདི་ལྟར་ལེགས་པར་སྦྱར་བའི་བརྡའི་མིང་བསྟན་པ་ན་རྒྱ་གར་སྐད་དུ་ཞེས་སྨོས་རིགས་པ་མ་ཡིན་ཏེ། དེ་ལྟ་ན་ལེགས་པར་སྦྱར་བ་དང་བྲལ་བའི་རྒྱ་གར་གྱི་སྐད་ཡུལ་འཁོར་ཆེན་པོ་ལ་བརྟེན་པ་རྣམས་སུ་འཁྲུལ་བས་འདི་ལྷའི་སྐད་དུ་རྟོགས་མི་ནུས་པའི་སྐྱོན་འཇུག་གོ །ཞེ་ན།

第三（疑問点についての考察）。ある人は次のように論じる。
（反論：）サンスクリット語の名称を示す時に「インドの言葉で」というのは合理的ではない。もしそのようにするならば、サンスクリット語以外のインドの言語、すなわち、広くインドの諸地方を拠り所とする〔俗語〕と混同されるので、これが神の言葉〔すなわちサンスクリット語〕であるとは理解できなくなるという過失が起こる。

[113.2]

ཞིབ་མོར་དཔྱད་པའི་ལུགས་སུ་དོགས་པ་སྐྱེ་བ་བདེན་མོད། འོན་ཀྱང་ལེགས་པར་སྦྱར་བ་ཉིད་འཕགས་ཡུལ་གྱི་མཁས་པ་རྣམས་ལ་རབ་ཏུ་གསལ་ཞིང་གཞན་དང་གཞན་དུ་དེ་ལྟར་མིན་པས་སྐྱེ་བོ་ཕལ་མོ་ཆེའི་ངོར་གྲགས་པ་ཙམ་གཙོ་བོར་བྱས་པ་དང་། བྱང་ཕྱོགས་འདིར་སངས་རྒྱས་ཀྱི་བསྟན་པ་ཇི་སྙེད་ཅིག་སྣང་བ་ཕལ་ཆེར་འཕགས་པའི་ཡུལ་ནས་འོངས་པ་ཤས་ཆེ་བས་ཡུལ་ཁུངས་སུ་བྱས་ཏེ། མཁན་པོ་ཉིད་དང་ཕྱི་ནས་ལོ་ཙཱ་བ་རྣམས་ཀྱིས་ཀྱང་བརྗོད་པ་ཡིན་ཞིང་། མཁན་པོས་འདིར་ནི་ཡི་གེ་དང་སྡེབ་ཏུ་སྦྱོར་བ་རྣམས་འཕགས་ཡུལ་བ་དཔེར་མཛད་པ་ཉིད་ཀྱི་ཁུངས་སྟོན་པའི་ཆེད་དུའང་ཡིན་པས་སྐྱོན་མེད་དོ། །

（答：）精緻な分析法のもとでこのような疑問が生じるのは実に尤もなことであるが過失はない。[1-1] なぜなら、まさにそれがサンスクリット語であることはインドの学者達にとっては自明であるが、他の人々にとってはそうではないので、一般の人々の視点に立って、何が周知されているかという基準のみ（grags pa tsam）を主に考慮して、まさに親教師（トゥミ・サンボータ）は〔そのように〕表現し、後に翻訳官達も〔そのように〕表現するようになったからである。[1-2] また、ここ北方（チベット）で見られるほとんど全ての仏説は聖地（インド）から伝来したものが大部分であることから、〔インドという〕地名に由来〔する名称を用い〕て、彼らは〔そのように〕表現しているからである。[2] さらに、ここで親教師（トゥミ・サンボータ）は〔『三十頌』や『性入法』で規定される〕文字（yi ge）[22]や〔これらの論書で使用される〕韻律（sdeb tu sbyor ba）[23]が聖地（インド）のものを手本にしていることの根拠を示そうとしているためでもある。

[113.3]

ཡང་རྩ་བ་སུམ་ཅུ་པ་ཞེས་པའི་སྐབས་སུ། ཕལ་ཆེར་གྱིས་ཀཱ་ལི་སུམ་ཅུ་བརྗོད་བྱའི་གཙོ་བོར་སྟོན་པའི་དོན་དུ་བཀྲལ་ཅིང་། འགའ་ཞིག་གིས་ན་ཡམ་དུ་ཤོ་ལོ་ཀ་སུམ་ཅུ་ཙམ་ཞིག་ཡོད་པའི་དོན་དུའང་བཀོད་དེ། ཐ་མ་ལྟར་ན་རྟགས་འཇུག་ལའང་སུམ་ཅུ་པའི་མིང་འཇུག་པར་ཐལ་ཏེ་སུམ་ཅུ་པར་ཀཱ་ལི་སུམ་ཅུའི་ཚིག་ཕྲད་རྣམ་དབྱེ་སོགས་བསྟན་ལ། རྟགས་འཇུག་ཏུ་དེའི་རྟགས་ཀྱི་དབྱེ་བ་སོགས་བསྟན་པས་གཉིས་ཀར་ཀཱ་ལི་སུམ་ཅུའི་བྱ་བ་སྟོན་པར་མཉམ་པའི་ཕྱིར། གཞན་ཡང་བོད་ཀྱི་བརྡ་སྦྱོར་བའི་བསྟན་བཅོས་རྩོམ་ན་ཀཱ་ལི་སུམ་ཅུ་བརྗོད་བྱའི་གཙོ་བོར་མེད་པ་ནི་ཆེས་མི་རིགས་པས་རྩ་བ་བརྒྱད་པོ་ཐམས་ཅད་ཀྱང་མིང་དེས་ཁྱབ་པར་བཞེད་ན་ནི་འདིར་དམིགས་ཀྱིས་གདགས་པ་དོན་མེད་དོ། །

---

[22] シトゥは yi ge（Skt. akṣara）という用語を「音節」（/a/, /i/などの母音、/ka/などの子音・母音の結合体）と「文字」（ཀ་や ཁ་など）の二つの意味で用いる。『三十頌』で主に論じられるのは、文字の結合法と、文字の結合に基づいて形成される助詞の用法である。

[23]『三十頌』の詩節は各七音節の – – | – – | – – – というリズムで構成される詩脚からなる。シトゥはこの韻文形式を「韻律」（sdeb tu sbyor ba）と呼んでいるのであろう。

さらに、「三十頌」という〔題目に関する〕問題について大半の人々は「三十の ka 系列文字（kāli）を主要な主題として説示するもの」という意味で解釈する。また、ある者は無思慮に（na yam du）「三十シュローカを有するもの」という意味であるとも説示する[24]。しかし、もし前者の通りならば、『性入法』にも「三十頌」という名称が適用されることになってしまう。なぜならば、『三十偈』においては三十の ka 系列文字と関係した助詞（tshig phrad）や格（rnam dbye）などが説かれる一方で、『性入法』においてはそれらの〔ka 系列文字の〕性（rtags）の区分などが説かれるので、両方とも三十の ka 系列文字の機能（bya ba）を説示する点で共通するからである。さらにまた、およそ何であれチベット文法学の論書が著作される時には、それが三十の ka 系列文字を主要な主題としないなどということは極めて不合理であるので、八章からなる根本論書（rtsa ba brgyad po）のいずれにもその〔「三十頌」という〕名称があまねく行きわたることを〔その論師は〕お認めになるであろう。だが、もしそうであるとすれば、本書を特別に〔「三十頌」と〕命名するのは無意味であることになる。

[113.4]

ཕྱི་མས་ཕྱོགས་ཙམ་མངོན་པར་སྣང་ཡང་། འདིར་མཆོད་བརྗོད་སོགས་ཐམས་ཅད་བགྲངས་པའི་གཞུང་ཚད་ཤོ་ལོ་ཀ་སུམ་ཅུ་སོ་གསུམ་འབྱུང་བས་སུམ་ཅུ་ཁོ་ནར་མ་འཁྲིག་སྙེ་སུམ་ཅུ་ཙམ་ཞེས་ལམ་སྟོར་བའི་འགྲོན་པོ་ལྟར་ཚམ་ཚོམ་བྱེད་དགོས་པ་མ་ཡིན་ཏེ། མཆོད་བརྗོད་དང་རྩོམ་པར་དམ་བཅའ་བ་ནི། སྐབས་གཞན་གྱི་ཐུན་མོང་བ་ཡིན་པ་རྟགས་འཇུག་ལ་དེ་མེད་པས་གསལ་ཞིང་། སུམ་ཅུ་པ་ནི།

ཡི་གེ་ཨ་ལི་ཀཱ་ལི་གཉིས། །

སོགས་སྐབས་དང་པོ་ཉིད་ཀྱི་ཐུན་མོང་མིན་པའི་བརྗོད་བྱ་ཚིགས་བཅད་སུམ་ཅུ་ཉིད་ཀྱིས་རྫོགས་པས་གྲངས་ངེས་པའི་སྒོ་ནས་བཏགས་པའི་ཕྱིར་རོ། །དེ་ལྟ་བས་ན་སྔོན་ཆད་འགྲེལ་བྱེད་རྣམས་ཀྱི་བློ་གྲོས་སུ་མ་ཆུད་པའི་ལེགས་བཤད་གསར་བ་འདིས་དཔྱོད་ལྡན་རྣམས་བག་ཡངས་སུ་རྩེན་པར་མཛོད་ཅིག །

後者は部分的に正しいと思われるが、本書で敬礼文をはじめとする全てを計算に入れると、論書の分量は三十三シュローカになる[25]ので、三十のみであるというのは正しくない。また、「およそ三十程度ではないか」などと言って、道に迷った客人のように定まらない考え（tsham tshom）を抱くべきではない。というのも、敬礼文と著作宣言が〔『三十頌』以外の七つの〕他の章（skabs）と共有のものであることは『性入法』にこれがないことから明らかであり、また、

「音節は a 系列音（āli）と ka 系列音（kāli）の二つである」[4a]

という文言で始まる第一章（skabs dang po）[26]のみに固有の主題はちょうど三十シュローカで完結するので、数の確定という観点から「三十頌」という名称が付けられているからである。それゆえ、かつての註釈家達が思いも及ばなかったこの新しい妙説[27]によって、どうか知者達は気ままに戯れて頂きたい。

[24]題目の意味に関するこの二説はナムリン・パンチェンの註釈でも言及される。「三十頌」というのは、第一の説によれば論書の主題（brjod bya）に基づく名称であり、第二の説によれば表現手段（rjod byed）の形式に基づく名称である。ただし、第二の説は翻訳官ナムカ・サンポが一つの代替案（rnam grags）として提示したものに過ぎず、ほとんどの註釈者（tī ka mdzad pa phal cher）が前者の説を支持する（*Legs bshad snang byed* 6a4f.）。

[25]冒頭の敬礼文なども含めると本書の分量が三十三詩節になるという点は、ナムリン・パンチェンの註釈の中でも指摘されている（*Legs bshad snang byed* 6b6f.）。

[26]シトゥは現在伝わる『三十頌』を幻の八章本の「第一章」に相当するものとみなしている。

[27]この直前に示されているのがシトゥ自身の見解である。すなわち、敬礼文と著作宣言を除いた詩節数が三十であり、その数が「三十頌」という名称の根拠となっている。

[12]

གཉིས་པ་འགྱུར་ཕྱག་ལ་དངོས་དང་། མཐའ་དཔྱད་དོ། །

第二「翻訳者の敬礼」に関して〔二点ある。〕[121] 本文の提示、[122] 考察。

[121]

དང་པོ་ནི།

ངག་གི་དབང་ཕྱུག་འཇམ་པའི་དབྱངས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

ཞེས་སྨོས་ཏེ་བསྟན་བཅོས་འདི་དཔྱད་པ་གསུམ་གྱིས་རྣམ་པར་དག་པས་རྗེས་འཇུག་རྣམས་ཀྱིས་འཕགས་ཡུལ་ནས་བསྒྱུར་བའི་བསྟན་བཅོས་ཁྱད་པར་འཕགས་པ་རྣམས་དང་མཚུངས་པར་ལྟ་ཞིང་དོན་དུ་གཉེར་རིགས་སོ་ཞེས་འདོམས་པའི་དོན་དུ་ཐུ་མི་ཉིད་ཀྱིས་བསྒྱུར་བའི་མདོ་རྒྱུད་རྣམས་ཀྱི་འགྱུར་ཕྱག་དང་མཐུན་པར་འཕགས་པ་འཇམ་དཔལ་ལ་ཕྱག་མཛད་པའོ། །

第一（本文の提示）。

言葉の自在者マンジュシュリーに敬礼する[28]。

本書は三種の推論に基づいて正当化されたものであるから、学習者達は聖地（インド）から〔伝来して〕翻訳された優れた論書に等しいものとみなして、これを探究するべきである。このことを教示するために、トゥミご自身が翻訳したスートラやタントラにある翻訳者の敬礼文の場合と同様に、彼は聖者マンジュシュリーに対する敬礼をなさっている。

[122.1]

གཉིས་པ་ནི། འདིར་ལ་ལ་ཞིག་གིས་བསྟན་བཅོས་བསྒྱུར་བ་སོགས་ལ་བར་ཆད་མི་འབྱུང་བའི་ཆེད་དུ་ལོ་ཙཱ་བ་རྣམས་ཀྱིས་ཕྱག་མཛད་པ་དང་རྗེས་སུ་མཐུན་པར་ཞེས་སྨྲོལ་མོད། བློ་རྣལ་དུ་གནས་པས་སྨྲས་པ་མ་ཡིན་ཏེ། དེ་ལྟ་ན་བསྟན་བཅོས་འདི་རྩོམ་པ་དེའི་ཚེའམ་དེ་ལས་སྔོན་དུ་དཔེར་བྱ་འོས་པའི་ལོ་ཙཱ་བ་དུ་མ་ཞིག་ཡོད་པར་འདོད་དགོས་ཤིང་།

第二（考察）。これについて、ある人々は「かつて翻訳官達が論書の翻訳などに対する障碍を防ぐために敬礼をなさったので、それに従っているのだ」と解釈する[29]。しかし、これはまともな知性を持つ人が語る論説ではない。もしそうであるならば、この論書が著作された時点で、あるいはそれより以前に、模範とすべき翻訳官が複数いたと認めなければならないことになる。

[122.2]

དེ་འདོད་ན་བོད་ཡིག་སྡེབ་སྦྱོར་དང་བཅས་པའང་ཐུ་མིས་བརྩམས་པ་ལས་གཞན་དུ་ཡོད་པར་ཤུགས་ཀྱིས་ཁས་བླངས་པར་སོང་བས་བོད་ཀྱི་དེབ་ཐེར་རྙིང་མ་རྣམས་དང་། ཁྱེད་རང་གིས་དྲིན་ཆེན་གྱི་བློན་པོ་ཐུ་མི་ང་། སོགས་དྲངས་པའི་རྣམ་གཞག་ཐམས་ཅད་བཤིག་པར་ཐལ་ལོ། །

また、もしそれを認めるならば、チベット文字も、さらにはチベット語の著作物も、トゥミ作成のもの以外に既に存在していたと暗に認めることになってしまう。それゆえ、チベット古代史書

[28]稲葉 (1986: 315) は「言葉の自在者なる妙音に帰命し奉る。」と訳す。

[29]ナムリン・パンチェンがまさにこの見解を述べている。*Legs bshad snang byed* 6b3f.: smra ba'i dbang phyug 'jam pa'i dbyangs la phyag 'tshal lo || zhes sbyar ba ni bstan bcos bsgyur ba sogs la bar chad mi 'byung ba'i ched du lo tsā ba rnams kyis phyag mdzad pa dang rjes su mthun par smra ba ste |（「『言葉の自在者マンジュシュリーに敬礼する』という文言は、かつて翻訳官達が論書の翻訳などに対する障碍を防ぐために敬礼をなさったので、それに従って語られたものである。」）

や、あなた（ナムリン・パンチェン）自身が「恩恵深い大臣である私トゥミは、云々」[30]という文言を引用して確立しようとした事柄が全て破壊されることになってしまう。

[122.3]

རྒྱ་མཚན་འདིས། མཁན་པོས་ཐོག་མར་ཡི་གེ་བརྩམས་པའི་རྗེས་སུ་བརྡ་སྤྲོད་པའི་གཞུང་ལུགས་རྣམས་བརྩམས་པ་དང་། མདོ་ལ་སོགས་པ་བསྒྱུར་ཅིང་སློབ་མར་བཤད་པས་ལོ་ཙཱ་བ་རྣམས་བྱུང་བའི་གོ་རིམ་འདི་བྱང་བར་གྱིས་ཤིག །

以上の理由により、親教師（トゥミ）が最初に文字を作ってその後に文法体系を作ってから、スートラなどを翻訳し、弟子に講説した結果、翻訳官達が出現するようになったというこの順序について良く学んで頂きたい。

[2]

གཉིས་པ་བསྟན་བཅོས་དངོས་ལ། གཞུང་སྤྱིའི་ཡན་ལག་ཏུ་མཆོད་པར་བརྗོད་ཅིང་བཤད་པར་དམ་བཅའ་བ། སྐབས་དོན་དངོས་སུམ་ཅུ་པ་ཉིད་རྒྱས་པར་བསྟན་པའོ། །

第二「論書の本体」について〔二点ある。〕[21] 論書全体（gzhung spyi）[31]の構成要素となる敬礼文と著作誓言、[22] 目下の主題（skabs don dngos）である『三十頌』そのものに関する詳説。

[21]

དང་པོ་ལ་མཆོད་བརྗོད་དང་། བཤད་པར་དམ་བཅའ་བ་གཉིས།

第一（敬礼文と著作宣言）に関して二点ある。[211] 敬礼文、[212] 著作誓言。

[211]

དང་པོ་ལའང་། དཀོན་མཆོག་གསུམ་ལ་སྤྱིར་ཕྱག་འཚལ་བ། ཁྱེ་བྲག་ཏུ་འཇམ་པའི་དབྱངས་ལ་ཕྱག་འཚལ་བ། དགོས་པའི་དབང་གིས་རྟག་ཞི་བ་ལ་ཕྱག་འཚལ་བ། དྲིན་གཟོ་བའི་ཕྱིར་མཁས་པ་སྤྱི་དང་ཁྱེ་བྲག་ལ་ཕྱག་འཚལ་བའོ། །

さらに、第一（敬礼文）に関して〔四点ある〕。[211.1] 三宝に対する一般的な敬礼、[211.2] 特にマンジュシュリーに対する敬礼、[211.3] 必要性を鑑みたサダーシヴァ（rtag zhi ba, *sadāśiva）に対する敬礼、[211.4] 報恩を目的とした学者一般および特定の学者に対する敬礼。

[211.1]

དང་པོ་ལ་དངོས་དང་མཐའ་དཔྱད་གཉིས་ལས།

第一（三宝に対する一般的な敬礼）に関して [211.11] 本文の提示、[211.12] 考察の二点がある。

[211.11]

[211.111]

---

[30] ナムリン・パンチェンはトゥミ自身の作と伝えられる詩（今枝他 2015: 129f.）を引用することで、トゥミの偉大さを立証しようとしている。*Legs bshad snang byed* 4b1f.: mdor na tshig bcad lnga dang rkang pa gcig gis sgo nas slob dpon nyid kyis gsungs pa bzhin te | da drin can gyi blon po thu mi ngas | zhes pas slob dpon nyid kyi gdung dang mtshan smos |（「要するに〔トゥミの偉大さというのは〕五詩節と一詩脚によって軌範師ご自身がお説きになっている通りである。まず『恩恵深い大臣である私トゥミは』という文言によって軌範師ご自身の部族とお名前を述べており…」）

[31]「三十頌」と「性入法」に加えて現存しない六つの章を併せた幻の八章本全体のことである。

དང་པོ་ནི།

གང་ལ་ཡོན་ཏན་མཆོག་མངའ་བའི། །དཀོན་ཆོག་དེ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

ཞེས་པ་སྟེ།

第一（本文の提示）。

最高の美質を有する宝に敬礼する[32]。**[1ab]**

[211.112]

གང་ཞིག་གང་ལ་ནོར་བུ་རིན་པོ་ཆེ་དང་ཆོས་མཚུངས་པའི་ཡོན་ཏན་ཕུན་སུམ་ཚོགས་པ་མངའ་བ་ནི་དཀོན་ཆོག་ཅེས་བྱ་ཞིང་། མཚུངས་ཆོས་ཀྱི་ཡོན་ཏན་ཡང་བསོད་ནམས་མ་བསགས་པ་ལ་སྣང་བ་མིན་པས་འབྱུང་བ་དཀོན་པ་དང་། རང་བཞིན་གྱིས་རྙོག་པའི་ཆོས་ཅན་མ་ཡིན་པས་དྲི་མ་བྲལ་བ་དང་། རང་གཞན་གྱི་དོན་སྒྲུབ་པའི་མཐུ་དང་ལྡན་པ་དང་། འགྲོ་བ་རྣམས་ཀྱི་བསམ་པ་དགེ་བའི་རྒྱུ་ཡིན་པས་འཇིག་རྟེན་གྱི་རྒྱན་དང་། འཇིག་རྟེན་ལས་མཆོག་ཏུ་གྱུར་པ་དང་། རྣམ་པར་འགྱུར་བའི་རང་བཞིན་ཅན་མ་ཡིན་པ་རྣམས་ཏེ།

འབྱུང་བ་དཀོན་ཕྱིར་དྲི་མེད་ཕྱིར། །
མཐུ་ལྡན་ཕྱིར་དང་འཇིག་རྟེན་གྱི། །
རྒྱན་གྱུར་ཕྱིར་དང་མཆོག་ཉིད་ཕྱིར། །
འགྱུར་བ་མེད་ཕྱིར་དཀོན་ཆོག་ཉིད། །

ཅེས་འབྱུང་བས་སོ། །

およそ何であれ宝石（nor bu rin po che）と共通の完全な美質を有するものは「宝」と呼ばれる。そして、その共通の美質とは、[1] 福徳を積集してない人の前には現れないため、その出現が稀であること、[2] 本来的に汚染された性質を持つものではないので、けがれなきものであること、[3] 自他の利益を実現する力を有すること。[4] 衆生の善なる思惟の因であるので、世間の人々の飾りとなること、[5] 世間の中で最高のものであること、[6] 変化という性質を持たないこと〔の六つ〕である。というのも〔『宝性論』に〕

「[1] その出現が稀であるから、[2] けがれなきものであるから、[3] 力を有するから、[4] 世間の人々の飾りとなるから、[5] 最高のものであるから、[6] 変化しないものであるから、それらはまさに宝である。」[33]

と説かれるからである。

[211.113]

དེ་ལ་དབྱེ་ན་སངས་རྒྱས་དང་ཆོས་དང་དགེ་འདུན་ཏེ་དཀོན་ཆོག་རྣམ་པ་གསུམ་ཡིན་ཞིང་། དེའང་སྐྱབས་ཡུལ་དངོས་ཀྱི་དབང་དུ་བྱས་ན་མཐར་ཐུག་གི་སྐྱབས་རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་སྐུ་གསུམ་གྱི་བདག་ཉིད་ཅན་དང་། གནས་སྐབས་ཀྱི་སྐྱབས་འགོག་ལམ་གྱིས་བསྡུས་པའི་ཆོས་དང་། སློབ་པ་འཕགས་པའི་དགེ་འདུན་རྣམས་དང་། དེར་མ་ཟད་གང་ལ་བརྟེན་ནས་

[32]稲葉 (1986: 316) は「〔三宝にして、そこに、〕最勝なる功徳を所有し給えるとき、その〔三〕宝に帰命し奉る」と訳す。

[33]UT I 22 (cf. 高崎 1989: 35): ratnāni durlabhotpādān nirmalatvāt prabhāvataḥ | lokālaṃkārabhūtatvād agratvān nirvikārataḥ ||; T1611, vol. 31, 826c7f.: 眞寶世希有，明淨及勢力，能莊嚴世間，最上不變等.

དཀོན་ཅོག་དངོས་ལ་གསུམ་པ་འཕེལ་ཞིང་མོས་པས་འཇུག་པར་འགྱུར་བའི་རྐྱེན་ཁྱད་པར་དུ་འཕགས་པ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་སྐུ་བརྙན་སོགས་དང་མིང་ཚིག་ཡི་གེའི་ཚོགས་སུ་སྣང་བའི་ལུང་གི་ཆོས་དང་སོ་སོ་སྐྱེ་བོའི་དགེ་འདུན་རྣམས་ལའང་མཁན་པོས་གཞུང་དགོད་པའི་ཐོག་མ་ཉིད་དུ་ལུས་ངག་ཡིད་གསུམ་འདུད་པའི་ཕྱག་མཛད་པ་ཡིན་ནོ། །

それを区分すると、仏、法、僧の三種の宝がある。そして、実質的な帰依対象（skyabs yul dngos）[34]を考慮する時、〔親教師トゥミ・サンボータはまず〕究極的な帰依処、すなわち三身を本性とする正等覚者と、二次的な帰依処、すなわち滅諦と道諦に包摂される法および〔その法を証得する〕有学聖者の僧伽〔に対して敬礼をなさっている〕。さらに、それだけでなく、特別の縁となる仏像・仏画などや、単語・文・音節の集合として〔知に〕顕れる教法や、凡夫の僧伽に対しても、親教師〔トゥミ・サンボータ〕は論書著作の最初に身、語、意の三つで敬意を払う敬礼をなっている。なぜなら、それらに依拠すれば、実質的な宝に対する尊敬の念が増大し、信解によって〔仏法僧に向けて〕前進することができるようになるからである。

[211.114]

དེ་ལྟར་ཐོག་མ་ཁོ་ནར་དཀོན་མཆོག་གསུམ་ལ་བསྟོད་ཕྱག་མཛད་པ་འདིས་དེའི་ཚེ་བོད་ཡུལ་དུ་བོན་ལས་གཞན་པའི་གྲུབ་མཐའ་སྨྲ་བ་ཕལ་ཆེར་ཡོད་པར་མ་འཚལ་ཅིང་།　འཕགས་ཡུལ་དུའང་ཕྱི་ནང་གཉིས་ཀ་ཡོད་པས་རྗེས་འཇུག་གི་སྐྱེ་བོ་རྣམས་རྗེས་སུ་གཟུང་བའི་སླད་དུ་གང་ཞིག་དཀོན་ཅོག་གསུམ་ལ་འདུད་ཅིང་སྐྱབས་སུ་འགྲོ་བར་བྱེད་པའི་ལམ་དེ་ནི་ནོར་བ་མེད་ཅིང་ཡང་དག་པའོ་ཞེས་འདོམས་པའང་ཡིན་ནོ། །

以上のように、まさに最初に三宝に対する称賛と礼拝を〔作者が自ら〕行うことによって、当時のチベットでポン教徒を除けば学説論者はほとんど存在しなかったとはいえ、聖地（インド）には異教徒と仏教徒の二者が共に存在していたので、後に続く人々に恩恵を授けるために、「三宝に対する礼拝と帰依というその道は誤りなく正しいものである」ということを〔トゥミ・サンボータは〕教示しているのでもある。

[211.12]

[211.121]

གཉིས་པ་ནི།　ཁ་ཅིག་གིས།　སྐབས་འདིར་གང་ལ་ཞེས་པའི་ལ་ཡིག་ཡོགས་སུ་བཀར་ནས་ངོས་གཟུང་བའི་དོན་དང་དེ་ལ་ཞེས་པའི་ལ་ཡིག་ཆེད་དུ་བྱ་བའི་དོན་དུ་བཤད་མོད།　སྔ་མ་ནི་གཞུང་འདིའི་ལ་དོན་འཆད་པའི་སྐབས་སུ་དེ་འདྲ་ལ་འཇུག་པར་མ་བཤད་པར་མ་ཟད་དོན་གྱིས་ཀྱང་དེ་འདྲར་འཇུག་མི་སྲིད་པས་མི་འཐད་ཅིང་།　གང་ཞིག་ལ་ཡོན་ཏན་མཆོག་མངའ་བའམ་ལྡན་པ་ཞེས་སྦྱོར་དགོས་པས་རྣམ་དབྱེ་བདུན་པ་གནས་གཞིའི་དོན་ཉིད་དོ། །

第二（考察）。ある者はこの箇所にある གང་ལ་ gang la という表現中の ལ་ la という語を〔གང་ལ་ gang la から〕切り離して〈同定〉（ngos gzung ba）を意味するものとして説明し、de la という表現中の la という語を〈目的〉（ched du bya ba）を意味するものとして説明する。しかし、その前半部分は正しくない。なぜなら、本書の la don に関する説明の箇所で、そのような意味での使用法は説明されないのみならず、意味の上から推し測っても（don gyis kyang）そのような意味で使用されることはあり得ないからである。「あるものに（gang zhig la）最高の美質が存在する、あるいは最高の美質が備わっている時…」と解釈するべきであるので、まさに第七格〈場所〉を意味する。

[211.122]

[34]真の意味で帰依対象となる三宝とは、三身を本性とする正等覚者、滅諦と道諦に包摂される法、有学聖者の僧伽の三者である。これらを直後に言及される仏像、仏画、教法、凡夫の僧伽などから区別して「実質的な帰依対象」と呼んでいる。

ཕྱི་མ་ནི་ལེགས་སྦྱར་ཤེས་སྙོམ་གྱིས་ཞྭ་དཔེ་ལྷམ་ལ་བཀབ་པར་ཟད་དེ། ཅིའི་ཕྱིར། ཀ་ལཱ་པར།

ན་མས། སྭསྟི། སྭཱ་ཧཱ། སྭ་དྷཱ། ཨ་ལཾ། བ་ཥ་ཊ། སྦྱོར་བ་བཞི་བའོ

ཞེས་འབྱུང་བར་ན་མས་ཀྱི་ཡུལ་ལ་སྤྱིར་བཏང་དོན་འཐོབ་ཀྱི་སྒོ་ནས་གཉིས་པ་འཇུག་ཀྱང་གྲགས་པ་དམིགས་བསལ་གྱི་སྒོ་ནས་བཞི་བ་སྦྱོར་བར་མཁས་པ་རྣམས་ཀྱིས་བཞེད་མོད་ཀྱི། དེ་འདྲའི་བྱེ་བྲག་མ་ཕྱེད་པར། ན་མས་ཀྱི་ཡུལ་ལ་བཞི་བ་འཇུག་པར་བཤད་དོ་སྙམ་ནས་ཕྱག་འཚལ་བའི་དོན་ཅན་གྱི་སྒྲའི་ཡུལ་ཐམས་ཅད་ལ་བཞི་བ་འཇུག་པར་བསམ་ཞིང་སྨྲ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

後半部分は「自分はサンスクリット語を知っている」という慢心によるもので、帽子を靴にかぶせたような〔ちぐはぐな説明〕に過ぎない。なぜかと言えば、『カラーパ〔スートラ〕』（*Kalāpasūtra*）の

「namas、svasti、svāhā、svadhā、alam、vaṣaṭと結びつく時、第四格接辞が起こる。」[35]

という〔規則〕における namas「敬礼」の対象〔を表す語〕の後には、一般的な意味理解によれば第二格接辞が起こるはずであるけれども、〔実際には〕例外規則によって第四格接辞が適用されると学者達はお認めになっているのに対し、〔この註釈者は〕そのような区別をせずに「namas の対象〔を表す語〕の後には第四格接辞が起こると〔サンスクリット文法学では〕説明されるのだ」ということを思った結果、「敬礼」の意味を有する語の対象全てに〔必ず〈目的〉を表す〕第四格接辞が起こると考えて論じるからである。

[211.123]

དེས་ན་སྤྱིར་བཏང་གི་སྒྲུབ་པའི་དབང་གིས། པྲ་ཎ་མྱ་སོགས་ཀྲྀད་རྐྱེན་གཞན་གྱིས་བསྒྲུབས་པ་དང་། ན་མཱ་མི་སོགས་ཏིང་མཐའ་རྣམས་དང་། བྱིངས་གཞན་ལས་བྱུང་བའི་བནྡེ། བ་ནྡ་ནཾ་ལྟ་བུ་རྣམས་ཀྱང་འདུད་ཅིང་ཕྱག་འཚལ་བའི་དོན་ཅན་དུ་མཚུངས་ཀྱང་དེ་དག་གི་ཡུལ་ལ་ནམ་དུའང་གཉིས་པ་ལས་གཞན་པའི་རྣམ་དབྱེ་འཇུག་པ་མ་ཡིན་པ་འདི་ཀུན་གྱིས་ཤེས་པར་བྱའོ། །

従って一般的な語形成によれば、kr̥t 接辞という他の要素によって形成される praṇamya「敬礼してから」などや、定動詞接辞 tiṅ で終わる namāmi「私は敬礼する」などや、別の動詞語根から派生する vanda（< bandi）「崇拝者」や vandana「崇拝」なども「礼拝」「敬礼」という意味を有する点では等しいが、それらの対象を表す語の後には常に第二格接辞以外の格接辞が起こるとは限らない。このことを皆が理解するべきである。

[211.124]

རྒྱུ་མཚན་དེས་ན་བོད་དུ་དེ་ལྟའི་གྲགས་པ་དམིགས་བསལ་མེད་པའི་ཕྱིར་དོན་ཐོབ་གཙོ་བས། བཞི་པའི་སྤྱིར་བཏང་གི་དོན་སྦྱིན་པའི་སྣོད་ལ་སོགས་པ་བྱ་བ་གང་ཡིན་ཡང་བྱ་ཡུལ་དེའམ་དེ་དང་འབྲེལ་བའི་དོན་དུ་སོང་བ་ཞིག་དགོས་པ་ལས། ཡུལ་ཁྱད་པར་ཅན་ལ་ཕྱག་བྱེད་པ་ནི་ཕྱག་བྱེད་པོ་ཉིད་དམ་དེ་དང་འབྲེལ་བའི་དོན་ལས་ཕྱག་ཡུལ་དེའི་ཆེད་དུ་མིན་པ་ནི་གནག་རྗེས་ཀྱང་རྟོགས་པར་སླ་བའི་ཕྱིར་ཕྱག་གི་ཡུལ་ལ་རྣམ་དབྱེ་གཉིས་པ་འཇུག་པ་ལས་འོས་མེད་དོ། །

そうした理由から、チベットではそのような形で知られる例外規則というものは存在しないので、意味的に理解される事柄（don thob）が重要となる。それゆえ、第四格接辞の一般的な意味は、例

[35]KT 2.4.26: namaḥsvastisvāhāsvadhālaṁvaṣaḍyoge caturthī |; Cf. A 2.3.16: namaḥsvastisvāhāsvadhālaṁ-vaṣaḍyogāc ca |（川村 2016: 342:「namas（「敬礼」）、svasti（「幸福」）、svāhā（「スヴァーハー」）、svadhā（「スヴァダー」）、alam（「十分な、適した」）、vaṣaṭ（「ヴァシャット」）と結びつく項目の後に第四格接辞が起こる。」）

えば贈与行為の受益者（snod）などのように、いかなる行為であれその行為の対象もしくはその関係項のためになること（don du song ba）でなければならない。ところが、特別な対象に対する敬礼行為というのは、敬礼者自身のためになされるか、もしくはその関係項のためになされることはあっても、決してその敬礼対象（例えば「三宝」）のためになされるのではない。このことは牧童でさえ容易に理解できる。したがって、敬礼対象を表す語の後には第二格接辞が起こる以外に他の可能性はない。

[211.125]

འོ་ན་གནས་བརྒྱད་འགྲེལ་པ་ལས།

> བཞི་པ་སྦྱིན་པ་དང་ཕྱག་འཚལ་བ་ཞེས་བྱ་བ། ཤིང་གི་ཕྱིར་ཆུ་འདྲེན་པའང་ཤིང་ཉིད་རྒྱས་པ་དང་། སྨིན་པའི་ཕྱིར་སྦྱོར་ཡང་། དོན་གྱིས་ཆུ་འདྲེན་པའི་བྱེད་པ་པོའི་ཆེད་ཡིན་པར་འགྱུར་བ་དང་། མཆོད་རྟེན་ལ་ཕྱག་འཚལ་བའང་། མཆོད་རྟེན་ཉིད་ཕྱག་གི་ཡུལ་ལམ་གནས་སུ་སྦྱར་ཡང་དོན་གྱིས་ཕྱག་འཚལ་བའི་ཆེད་ཡིན་པར་འགྱུར་བས་བཞི་པ་བྱ་བའི་ཆེད་ཀྱི་དོན་དུ་དྲང་ངོ་། །

ཞེས་བསྟན་པ་མ་ཡིན་ནམ་ཞེ་ན། གནས་བརྒྱད་རྩ་འགྲེལ་གྱི་དོན་འགའ་ཞིག་བསྒྲུབ་བྱ་ལས་སྒྲུབ་བྱེད་དུ་མི་འགྲོ་བ་ཡོད་ཅིང་རྣམ་དབྱེ་བཞི་པ་འཇུག་ཚུལ་འདིའང་བརྟག་དགོས་ཏེ། ཆུ་འདྲེན་པའི་བྱེད་པ་པོའི་ཆེད་ཡིན་པའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས་ཤིང་ལ་བཞི་པ་འཇུག་པ་དང་། ཕྱག་འཚལ་བའི་བྱ་བའི་ཆེད་ཡིན་པའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས་མཆོད་རྟེན་ལ་བཞི་པ་འཇུག་པར་འདོད་པ་དེ་ལྟ་ན། ཤན་པས་ཕྱུགས་གསོད། ཚོང་པས་ནོར་སྒྲུབ། ཁ་ཟས་ལ་ལོངས་སྤྱོད། ལྟ་བུ་རྣམས་ལའང་རིམ་པར་གསོད་པ་པོ་དང་སྒྲུབ་པ་པོའི་ཆེད་ཡིན་པས་ཕྱུགས་དང་ནོར་ལ་བཞི་པ་འཇུག་པར་ཐལ་བ་དང་། ལོངས་སྤྱོད་པའི་བྱ་བའི་ཆེད་ཡིན་པས་ཁ་ཟས་ལ་བཞི་པ་འཇུག་པར་ཐལ་བ་སོགས་དང་། སྤྲང་པོ་ལ་ཟན་སྦྱིན་ལྟ་བུར་སྦྱིན་བྱའམ་སྦྱིན་བྱེད་ཀྱི་ཆེད་དུ་མ་ཡིན་པས་སྦྱིན་ཡུལ་ལ་བཞི་པ་མི་འཇུག་པར་ཐལ་བ་སོགས་སྐྱོན་མཐའ་ཡས་ཤིང་། བརྗོད་པའི་བསྟན་བཅོས་ཚད་ལྡན་གང་དུའང་དེ་འདྲའི་རྣམ་གཞག་བཤད་པ་མ་མཐོང་བས་སོ། །

（問：）ならば、『八論点』（*Gnas brgyad*）の註釈[36]に

> 「第四格接辞を伴うསྦྱིན་པ་ sbyin pa「与える」やཕྱག་འཚལ་བ་ phyag ’tshal ba「敬礼する」について。ཤིང་གི་ཕྱིར་ཆུ་འདྲེན་པ་ shing **gi phyir** chu ’dren pa「木のために水をやる」[37]という場合にも「まさしく木の成長と成熟のために」と解釈されるが、〔その行為は〕間接的には水をやる行為主体のためであるはずである。མཆོད་རྟེན་ལ་ཕྱག་འཚལ་བ་ mchod rten **la** phyag ’tshal ba「仏塔に敬礼する」の場合にも、まさに仏塔は敬礼行為の対象あるいは立脚地点として解釈されるが、それは間接的に敬礼行為の目的（ched）となる。それゆえ、第四格接辞は〈目的〉（bya ba’i ched）の意味で解釈される。」[38]

と説かれるのはどうしてか。（答：）『八論点』の本文および註釈のある部分の内容は、証明されるべき事柄ではあるが、何かを証明する根拠にはならず、この第四格接辞の適用方法についても考察の余地がある。その理由は以下の通りである。〔同書によれば〕水をやる行為主体のためであ

---

[36]以下の文章は、デルゲ版テンギュル雑部（sna tshogs）の Co 秩に収録される著者不明の『言語論』（*Śabdaśāstra*, *Sgra’i bstan bcos*, Tohoku no. 4351）からの引用である。シトゥが明言するように、本書は『八大論点本頌』（**Aṣṭamahāpadamūla*, *Gnas brgyad chen po’i rtsa ba*, Tohoku no. 4350）に対する註釈である（cf. Verhagen 1994: 12）。

[37]『八論点』註釈の作者（あるいはその翻訳者）は la don 助詞のみでなく、-’i phyir も第四格接辞とみなしているようである。

[38]ŚŚ D 171a7ff. からの引用。

るからという理由で ཤིང་ shing「木」という語の後に第四格接辞が起こり[39]、敬礼行為の目的となるからという理由で མཆོད་རྟེན་ mchod rten「仏塔」という語の後に第四格接辞が起こると認められる。しかし、もしそうであるとするならば、ཤན་པས་ཕྱུགས་གསོད་ shan pas phyugs gsod「屠殺者は家畜を殺す」や、ཚོང་པས་ནོར་སྒྲུབ་ tshong pas nor sgrub「商人が財をなす」などの事例でも、それぞれ屠殺者や〔財を〕なす者のためであるからという理由で、ཕྱུགས་ phyugs「家畜」と ནོར་ nor「財」という語の後に第四格接辞が起こることになってしまう。また、ཁ་ཟས་ལ་ལོངས་སྤྱོད་ kha zas **la** longs spyod「食物を享受する」という事例では、享受行為のためであるからという理由で、ཁ་ཟས་ kha zas「食物」という語の後に第四格接辞が起こることになってしまう。また、སྤྲང་པོ་ལ་ཟན་སྦྱིན་ sprang po **la** zan sbyin「物乞いに食事を与える」といった場合、〔その行為は〕贈与される相手のためにもならず、贈与者のためにもならない[40]ので、贈与を受ける対象を表す語（སྤྲང་པོ་ sprang po「物乞い」）の後に第四格接辞が起こらないことになってしまう。こうした過失は無数にあり、いかなる権威的な文法学の論書においても以上のような規定を論じているものは見受けられない。

[211.126]

གང་ལ་དང་དེ་ལ་ཞེས་པའི་ལ་དོན་གཉིས་མཐའ་གཅིག་ཏུ་མི་མཚུངས་པར་འཆད་དགོས་པའང་མ་ཡིན་ཏེ། ལེགས་སྦྱར་གྱི་རྣམ་དབྱེ་སྦྱོར་ཚུལ་དང་བསྟུན་ན། གང་ཞེས་པ་སྤྱིའི་སྒྲ། དེ་ཞེས་པ་བྱེ་བྲག་ངེས་གཟུང་གི་སྒྲ་ཡིན་པས། སྤྱིའི་བྱ་བ་བྱེ་བྲག་ལ་ངེས་གཟུང་གིས་སྦྱོར་བ་འདི་འདྲའི་རིགས་ལ་གཉིས་ཀར་རྣམ་དབྱེ་མཚུངས་པར་སྦྱོར་བ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དེ་གཉིས་ཀ་རྣམ་དབྱེ་གཉིས་པའི་དོན་དུ་བྱས་ནའང་རུང་སྟེ། ཕྱག་འཚལ་ལོ། །གང་ལ་ན་ཡོན་ཏན་མཆོག་མངའ་བའི་དཀོན་ཅོག་དེ་ལའོ། །ཞེས་འཆད་པའི་ལུགས་སོ། །

また、གང་ལ་ gang la と དེ་ལ་ de la という二つの表現にある la don〔の機能〕は絶対に異なると言わねばならないこともない。サンスクリットの格接辞の使用法を参考にすれば、次のようなことが言える。まず གང་ gang というのは一般表示語（spyi'i sgra）であり、དེ་ de というのは特殊を特定化する語（bye brag nges gzung gi sgra）である。それゆえ、一般的な指示対象を特殊へと特定化することによって結びつけを行なうこのような〔表現形式〕においては、〔གང་ gang と དེ་ de の〕両方に格接辞が共通の様式で適用されるので、その両方を第二格接辞の意味で理解しても構わない[41]。すなわち、「何に（gang la）敬礼するのかと言えば、およそ何であれ最高の美質を有する宝、それに（de la）敬礼するのである」といった説明の仕方が成立する。

[211.127]

རྣམ་དབྱེ་བཞི་པ་ཆེད་དུ་བྱ་བའི་དོན་ལ་འཇུག་པ་ནི། ལོ་ཏོག་ལ་ཆུ་འདྲེན། ནོར་འཚོང་དུ་འགྲོ། སློང་མོ་བ་ལ་ཟན་སྦྱིན། ལྷ་བུ། ཆུ་འདྲེན་པ་དང་། འགྲོ་བ་དང་། ཟན་སྦྱིན་པ་རྣམས་བྱ་བ་ཡིན་ཞིང་། དེ་གང་གི་དོན་ནམ་ཆེད་དུ་བྱ་བའི་ཡུལ། ལོ་ཏོག །ནོར་འཚོང་། སློང་མོ་བ་རྣམས་ལ་བཞི་པ་དགོས་ཆེད་ཀྱི་རྣམ་དབྱེ་འཇུག་པ་ཡིན་ནོ། །དེས་ན་བྱ་བ་གང་ཞིག་བྱ་བའི་དོན་གྱི་ཡུལ་དེ་ལ་ཕན་གདགས་པའི་ཆེད་དུ་འཇུག་པའི་ལ་དོན་དྲུག་པོ་རྣམས་ནི་རྣམ་དབྱེ་བཞི་པ་ཞེས་བྱ་བ་ཡིན་ལ། དཔེར་ན། ཤའི་ཆེད་དུ་ཕྱུགས་གསོད་པར་བྱེད། ལྷ་བུ་ལ་མཆོད་ན། གསོད་པ་བྱ་བ། ཕྱུགས་ནི་ལས། ཤ་ནི་བྱ་བའི་དོན་གྱི་ཡུལ་ཡིན་པས་གསོད་པའི་བྱ་བས་ཤ་ཐོབ་པ་ལ་ཕན་འདོགས་པར་བྱེད་པ་དང་། སློང་མོ་བར་ཟན

---

[39]先述のように、『八論点』註釈で例文として提示されるのは shing **la** chu 'dren pa ではなく、shing **gi phyir** chu 'dren pa である。

[40]贈与行為は有徳な人（福田）に対してなされてこそ有益な結果を生むという考えがある。ある人が物乞いに食事を与えたとしても、その贈与者がその行為によって大きな徳を積むことはなく、物乞いは一時的に食欲を満たすことはできても徳を積むことはない。

[41]先述の議論（211.121）では、gang la という表現中の la は第七格〈場所〉（rnam dbye bdun pa gnas gzhi）を意味すると述べられていた。したがって、ここでは別解釈が示されていることになる。

སྦྱིན་ཟེར་བ་ལ། སྦྱིན་པ་ནི་བྱ་བ། ཟན་ནི་ལས། སློང་མོ་བ་བྱ་བའི་དོན་གྱི་ཡུལ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་སྦྱིན་པས་སློང་མོ་བར་ཕན་འདོགས་པ་སོགས་གོ་དགོས་ཤིང་། བར་དུ་ལས་ཀྱི་ཚིག་མེད་ཀྱང་ཤའི་ཆེད་དུ་གསོད། སློང་མོ་བར་སྦྱིན་སོགས་ཀྱང་བཞི་པའི་དོན་དེ་ཉིད་ལས་མི་འདའོ། །

第四格接辞が〈目的〉の意味で使用された例として以下のものがある。ལོ་ཏོག་ལ་ཆུ་འདྲེན་ lo tog **la** chu ’dren「作物に水をやる」、ནོར་འཚོང་དུ་འགྲོ་ nor ’tshong **du** ’gro「財を売りに行く」、སློང་མོ་བ་ལ་ཟན་སྦྱིན་ slong mo ba **la** zan sbyin「托鉢僧に食事を与える」。ཆུ་འདྲེན་པ་ chu ’dren pa「水をやること」、འགྲོ་བ་ ’gro ba「行くこと」、ཟན་སྦྱིན་པ་ zan sbyin pa「食事を与えること」は行為であり、それらの〔行為〕が何のためになされるか、すなわちそれらの目的対象（ched du bya ba’i yul）を表すのが ལོ་ཏོག་ lo tog「作物」、ནོར་འཚོང་ nor ’tshong「財の販売」[42]、སློང་མོ་བ་ slong mo ba「托鉢僧」であり、それらの表現の後に〈目的〉を意味する第四格接辞が適用されている。それゆえ、ある行為（bya ba）がその行為の目的対象（bya ba’i don gyi yul）に寄与する〔ということを表示する〕ために適用される六つの la don 助詞（tu, du, ru, su, -r, la）は第四格接辞と呼ばれる。例えば、ཤའི་ཆེད་དུ་ཕྱུགས་གསོད་པར་བྱེད་ sha’i ched **du** phyugs gsod par byed「肉のために家畜を殺す」という例で説明すると、གསོད་པ་ gsod pa「殺すこと」は行為であり、ཕྱུགས་ phyugs「家畜」は行為対象であり、ཤ་ sha「肉」は行為の目的対象であるので、殺害行為が肉の獲得に寄与することが理解されるはずであり、སློང་མོ་བར་ཟན་སྦྱིན་ slong mo ba**r** zan sbyin「托鉢僧に食事を与える」という例においては、སྦྱིན་པ་ sbyin pa「与えること」は行為であり、ཟན་ zan「食事」は行為対象であり、སློང་མོ་བ་ slong mo ba「托鉢僧」は行為の目的対象であるので、与える行為が托鉢僧に寄与するといったことが理解されるはずである。行為対象を表す語が間になくても、ཤའི་ཆེད་དུ་གསོད་ sha’i ched du gsod「肉のために殺す」、སློང་མོ་བར་སྦྱིན་ slong mo bar sbyin「托鉢僧に食事を与える」など〔の表現中にある la don 助詞〕はまさにその第四格接辞に他ならない。

[211.128]

འོ་ན་ལེགས་སྦྱར་ལ་བྱ་བའི་དོན་གྱི་ཡུལ་དེར་ཕན་འདོགས་པ་མ་ཡིན་པར་ཡང་བཞི་པ་འཇུག་པ་མང་དུ་མཐོང་བ་ཅི་སྙམ་ན། ལེགས་སྦྱར་ལའང་སྤྱིར་བཏང་གི་འཇུག་ཡུལ་འདི་དང་མཐུན་ཀྱང་དམིགས་བསལ་མི་མཐུན་པ་ནི། མགོ་བོར་དབྱུག་པས་བསྣུན་པའི་དོན་ལ། མ་སྟ་ཀཱ་ཡ་དཎྜཾ་ད་དཱ་ཏི། མགོ་བོར་དབྱུག་པ་སྦྱིན་ཞེས་དང་། བུམ་པར་ཆུ་བླུགས་པའི་དོན་ལ། གྷ་ཊཱ་ཡ་ཛ་ལཾ་ད་དཱ་ཏི། བུམ་པར་ཆུ་སྦྱིན། ཞེས་པ་ལྟ་བུ་ཡོད་པ་ནི་སྦྱིན་པའི་ཡུལ་ལ་བཞི་པ་འཇུག་པ་སྤྱིར་བཏང་པས་འདིར་བསྣུན་པ་དང་། བླུགས་པ་ལ་སྦྱིན་པའི་སྒྲས་བསྟན་པའི་ཚེ་ཚིག་ཙམ་གཙོ་བོར་བྱས་ནས་དེའི་ཡུལ་ལ་བཞི་པ་སྦྱར་བ་ཡིན་གྱི་སྐབས་དེའི་སྦྱིན་པ་སྦྱིན་པ་དངོས་མ་ཡིན་པ་བཞིན་དུ་དེའི་ཡུལ་གྱི་རྣམ་དབྱེ་བཞི་པའང་བཞི་པ་དངོས་མ་ཡིན་ཏེ། ཐ་མ་གཉིས་པ་དང་ཕྱི་མ་བདུན་པར་དོན་གྱིས་འཐོབ་པ་ལ་བཞི་པ་སྦྱར་བ་ཙམ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

（問：）では、サンスクリット語では、当該の行為の目的対象に寄与しない場合にも第四格接辞の使用が多く見られるのはどうしてか。（答：）サンスクリット語においても一般的な使用範囲はこの〔理論が定めるもの〕と一致するが、特例的な使用範囲はこれと一致しない。これについて〔以下の例を考えてみよう。〕棒で頭を叩くという意味を表示するために mastakāya daṇḍaṁ dadāti「彼は頭に棒を与える」という表現が起こり、壺に水を注ぐという意味を表示するために ghaṭāya jalaṁ dadāti「彼は壺に水を与える」という表現が起こる。ここで叩く行為と注ぐ行為が dadāti という語で表現される時、〔「与える」を意味するその〕語のみを主に考慮した上で、「間接目的語（sbyin pa’i yul）の後に第四格接辞が起こる」という一般規則に従って、その対象〔を表す語すなわち間接目

[42]nor ’tshong **du** ’gro「財を売りに行く」という例のように、la don 助詞（tu, du, ru, su, -r, la）は動詞の直後に置かれて「～するために」を意味する副詞句を形成する。この用法は本来の格助詞としての la don 助詞の転用として理解されるべきものであるが、シトゥは動詞の直後に置かれる la don 助詞も〈目的〉を表す格助詞であると理解している。

的語〕の後に第四格接辞が適用されるが、その場合の dadāti は本来の意味での与える行為〔を意味するもの〕ではない。これと同様に、その〔行為〕の対象（間接目的）を表示する第四格接辞も本来の意味での第四格接辞ではない。なぜならば、意味の上から考えれば、前者は第二格接辞として得られるはずであり、後者は第七格接辞として得られるはずであるが、〔規則に従って〕第四格接辞が適用されるに過ぎないからである。

[211.129]

དེ་བཞིན་དུ་ན་མས་སོགས་ཀྱི་ཡུལ་ལ་བཞི་པ་འཇུག་པའང་དོན་ཐོབ་ཀྱི་བཞི་པའི་འཇུག་ཡུལ་དངོས་མ་ཡིན་ཡང་། འཇིག་རྟེན་པའི་ཉེར་སྤྱོད་ལས་དེ་བཞིན་དུ་འཇུག་པ་སྟེ། སྐབས་འདིར་མ་ཟད་རྣམ་དབྱེ་གཞན་དང་གཞན་ལའང་འདི་འདྲའི་རིགས་མང་དུ་འབྱུང་བ་རྣམས་རྣམ་དབྱེ་དེ་དངོས་ཀྱི་དོན་དུ་མི་འགྱུར་བས་ཙམ་པོ་བ་ཞེས་བྱའོ། །བོད་འདིར་ནི་དམིགས་བསལ་དེ་འདྲ་དབྱེ་བ་ལ་དགོས་པ་མེད་པས་དོན་འཐོབ་ཉིད་ཀྱི་དབང་དུ་བྱེད་དགོས་པ་ཡིན་ནོ། །ཡང་གསོད་པའི་ཕྱིར་དུ་མཚོན་བསྣུན། ཞེས་པ་ལྟ་བུར་མཚོན་བསྣུན་པས་གསད་བྱ་ལ་ཕན་གདགས་ཟེར་བའི་དོན་མ་ཡིན་གྱི། མཚོན་བསྣུན་པའི་བྱ་བས་བྱ་བའི་དོན་གྱི་ཡུལ་གསོད་པ་ལ་ཕན་འདོགས་པར་བྱེད་པ་ཡིན་ནོ། །སྐབས་འདིར་འགའ་ཞིག་གིས་དོན་དང་ཆེད་དང་ཕྱིར་ཞེས་པའི་སྒྲ་རྣམས་རྣམ་དབྱེ་བཞི་པར་བྱས་པ་མི་འཐད་དེ། དེ་རྣམས་རྣམ་དབྱེ་འཇུག་པའི་ཡུལ་གྱི་མིང་ཙམ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཏེ་དེ་དག་ལ་རྣམ་དབྱེ་ཞུགས་པས། དོན་དུ། དོན་གྱི། དོན་གྱིས། ལྟ་བུར་འགྱུར་བའི་ཕྱིར། དཔེར་ན། ལེགས་སྦྱར་ལ་དེའི་ཆེད་དུ་ཞེས་པར། ཏ་དརྠཱ་ཡ། ཞེས་འབྱུང་བའི་ཨ་རྠའི་སྒྲ་དེ་རྣམ་དབྱེ་མ་ཡིན་པ་བཞིན་ནོ། །

それと同様に、namas「敬礼」など〔の語が表示する敬礼行為〕の対象〔を表示する語〕の後に第四格接辞が起こるが、〔その敬礼対象を表示する語は〕意味の上から理解する限りでは第四格接辞の適用領域ではないけれども、世間の慣用に基づいてそのように〔第四格接辞が〕適用されるのである。また、この場合だけではなく、他の様々な格接辞に関しても、このような類のことが多く起こる。それらの格接辞は本来的な意味を有するものではないので、二次的な〔格接辞〕（tsam po ba）と呼ばれる。ここチベットにおいては、そのような特例を区分けすることに必要性はないので、まさに意味の上から理解される内容に従うべきである。また、གསོད་པའི་ཕྱིར་དུ་མཚོན་བསྣུན་ gsod pa'i phyir **du** mtshon bsnun「殺害するために武器を行使する」という例文の場合には、武器の行使が殺害対象に寄与するという意味ではなく、武器を行使するという行為が目標物（標的）の殺害に寄与するということを意味する。この問題に関連して、ある者が དོན་ don、ཆེད་ ched、ཕྱིར་ phyir という三つの語を第四格接辞とみなすのは妥当でない。なぜならば、それらは格接辞の導入対象領域に含まれる単語に過ぎないからである。というのも、それらの後に格接辞が導入されることにより、དོན་དུ་ don du、དོན་གྱི་ don gyi、དོན་གྱིས་ don gyis といった語形になるからである。例えばサンスクリット語で「それのために」という意味で tadarthāya という表現が起こるが、そこでの artha というその語は格接辞ではないのと同じである。

[211.2]

གཉིས་པ་ལ་དངོས་དང་ལོག་རྟོག་སེལ་བ་གཉིས།

第二（マンジュシュリーに対する敬礼）に関して [211.21] 本文と [211.22] 誤解の排除の二点がある。

[211.21]

[211.211]

དང་པོ་ནི།

གང་གིས་སྒྲ་དབྱངས་ཀུན་གསུངས་པའི། །
འཇམ་པའི་དབྱངས་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

ཞེས་པ་སྟེ། གང་ཞིག་གང་གིས་སྒྲ་དབྱངས་བརྗོད་པ་ཐམས་ཅད་མ་ལུས་པར་སྟོན་ཅིང་གསུངས་པས་གསུང་གི་དབང་ཕྱུག་ཆེན་པོར་གྱུར་པ། ཉེས་པའི་རྩུབ་རེག་ཐམས་ཅད་ཡོངས་སུ་སྤངས་པས་འཇམ་པའི་ཡོན་ཏན་དང་ལྡན་པའི་ཕྱིར་འགྲོ་བ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཁམས་དབང་བསམ་པ་རྣམས་དང་མཐུན་པར་རྗེས་སུ་འཇུག་པའི་དབྱངས་ཀྱི་བདག་ཉིད་དེ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། ། ཞེས་པའོ། །

第一（本文）は以下の通りである。

ありとあらゆる音の旋律を発するマンジュシュリー（文殊師利）に敬礼する[43]。**[1cd]**

ありとあらゆる音の旋律（sgra dbyangs）すなわち言葉（brjod pa）を余すところなく発する（ston = gsungs）ので言葉の大自在者であり、あらゆる欠陥のある耳の障りな言葉を捨て去っているので美しさ（'jam pa）という美質を具えるがゆえに、一切衆生の気質や望みに応じて起こる音の旋律（dbyangs）を自在にするお方に（gang zhig = gang gis ... de la）敬礼する。以上が〔詩節の意味〕である。

[211.212]

སྒྲ་དབྱངས་ཇི་ལྟར་གསུངས་པའི་ཚུལ་ཡང་། འཇམ་པའི་དབྱངས་ཞེས་བྱ་བ་ནི་བསྐལ་པ་དཔག་ཏུ་མེད་པའི་གོང་ནས་མངོན་པར་རྫོགས་པའི་བྱང་ཆུབ་བརྙེས་སུ་ཟིན་ཀྱང་། ས་བཅུའི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ལ་སོགས་པའི་ཚུལ་གྱི་སྒྱུ་འཕྲུལ་ཆེན་པོས་འཁོར་བ་སྲིད་དུ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་འཕྲིན་ལས་མཛད་པ་ཞིག་སྟེ། དོན་དམ་པར་ན་སངས་རྒྱས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཐུགས་གཉིས་སུ་མེད་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ངོ་བོ་འཇམ་དཔལ་ཡེ་ཤེས་སེམས་དཔའོ། །དེ་ཉིད་བདེ་བར་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་གསུང་མི་ཟད་པ་རྒྱན་གྱི་འཁོར་ལོའི་རྒྱུར་གྱུར་པ་དང་། དེའི་མཐུས་འཇིག་རྟེན་ཐམས་ཅད་ཀྱི་སྒྲ་དབྱངས་བརྗོད་པ་མ་ལུས་པ་གསལ་བར་བྱེད་པའང་ཡིན་ནོ། །རྒྱུ་མཚན་དེས་འཇམ་པའི་དབྱངས་ཀྱིས་སྒྲ་དབྱངས་གསུངས་པར་བསྟན་པ་སྟེ།

では、〔マンジュシュリーが〕いかにして音の旋律を発するかと言えば、それは次の通りである。マンジュシュリーというのは、実は無数劫も前に正等覚を証得なさっているが、第十地の菩薩などの仮の姿（tshul）という大いなる変幻を手段として、輪廻が続く限りの間、仏陀としての偉業を達成なさるお方であり、究極の真実としては、全ての仏陀の御心と一体のものである智慧を本質とするマンジュシュリー智慧薩埵なのである。まさにそのお方が、全ての善逝の無尽蔵のお言葉という一連の装飾の根源である。また、そのお方は、その〔言葉の根源の〕力によって全世界の人々の音の旋律、すなわち言葉を余すところなく顕在化する者でもある。以上の理由によりマンジュシュリーが音の旋律を発するということを〔トゥミは〕語っているのである。

[211.213]

མཚན་ཡང་དག་པར་བརྗོད་པ་ལས།

> བཅོམ་ལྡན་འདས་ཀྱི་ཡེ་ཤེས་སྐུ། །
> གཙུག་ཏོར་ཆེན་པོ་ཚིག་གི་བདག། །
> ཡེ་ཤེས་སྐུ་སྟེ་རང་བྱུང་བ། །
> འཇམ་དཔལ་ཡེ་ཤེས་སེམས་དཔའ་ཡི། །

ཞེས་གསུངས་ཤིང་དེའི་ཚིག་རྐང་ཐ་མའི་དོན་སྐྱེག་པའི་རྡོ་རྗེའི་འགྲེལ་པར།

> འཇམ་པ་ནི་མཉེན་པ་དང་དཔལ་དང་ལྡན་པ་གང་ཡིན་པ་དེ་ནི་འཇམ་དཔལ་ལོ། །ཡེ་ཤེས་སེམས་དཔའ་ཞེས་བྱ་བ་ནི་དེ་བཞིན་གཤེགས་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཐུགས་ཀ་ན་གནས་པའི་ཕྱིར་རོ། །འཇམ་དཔལ་ཡང་དེ་ཡིན་ལ་ཡེ་ཤེས་སེམས

[43] 稲葉 (1986: 316) は「一切の声音を説き給へる妙音に帰命し奉る」と訳す。

དཔའ་འང་དེ་ཉིད་ཡིན་པས་འཇམ་དཔལ་ཡེ་ཤེས་སེམས་དཔའ་སྟེ། དེ་ས་བཅུའི་དབང་ཕྱུག་གི་བྱང་ཆུབ་སེམས་དཔའ་ནི་མ་ཡིན་ནོ། །དེ་ལྟ་ན་དེ་སུ་ཞིག་ཡིན་ཞེ་ན་གཉིས་སུ་མེད་པའི་ཡེ་ཤེས་ཤེས་རབ་ཀྱི་ཕ་རོལ་ཏུ་ཕྱིན་པ་དེ་ཉིད་འཇམ་དཔལ་ཡེ་ཤེས་སེམས་དཔའ་སྟེ།

ཞེས་དང་།

『文殊菩薩真実名義経』（*Mañjuśrīnāmasaṃgīti*）に

「世尊の智慧の集積であり、大肉髪を有する者であり、言葉の自在者であり、智慧を具現化する者であり、自生者であられる、マンジュシュリー智慧薩埵の〔名の響きを仏世尊が解き明かして下さいますように。〕」[44]

と説かれ、その最後の詩脚の意味はラリタヴァジュラ（Lalitavajra）の註釈に

「mañju-śrī〔という複合語は所有複合語であり〕優美な（’jam pa, *mañju = mnyen pa, *mṛdu）輝き（dpal, *śrī）を有する者を意味する。彼は智慧薩埵である。なぜなら、あらゆる如来の心臓部に存するからである。mañjuśrī-jñānasattva は〔同格限定複合語であり〕マンジュシュリーという智慧薩埵という意味である。彼は十地の自在者たる菩薩ではない。では、もしそうでないとするならば彼は何者か。まさに、かの不二智という智慧の彼岸に達した者がマンジュシュリー智慧薩埵である。」[45]

と説明されている。

[211.214]

རྫོགས་པའི་སངས་རྒྱས་ཨ་ལས་བྱུང་། །
ཨ་ནི་ཡིག་འབྲུ་ཀུན་གྱི་མཆོག །
དོན་ཆེན་ཡི་གེ་དམ་པ་སྟེ། །
ཁོང་ནས་འབྱུང་བ་སྐྱེ་བ་མེད། །
བརྗོད་པ་ཀུན་གྱི་རྒྱུ་ཡི་མཆོག །
ཚིག་ཀུན་རབ་ཏུ་གསལ་བར་བྱེད། །

ཅེས་དང་། འགྲེལ་པར།

དེས་ན་འདི་སྐད་སྟོན་པར་འགྱུར་ཏེ་ཡི་གེ་ཨ་ནི་མ་སྐྱེས་པའི་རྣམ་པས་སངས་རྒྱས་ཐམས་ཅད་ཀྱི་ཡོན་ཏན་རྣམས་ཀྱི་གནས་བྱང་ཆུབ་སེམས་སྔོན་དུ་འགྲོ་བ་རྣམ་པར་མི་རྟོག་པའི་ཡེ་ཤེས་ཀྱི་ངོ་བོ་ཉིད་འཇམ་དཔལ་གྱི་རང་བཞིན་བསྐྱེད་པས་ན་ཆོས་ཀྱི་འཁོར་ལོ་སྐོར་བར་བྱེད་ཅིང་ཚིག་ཐམས་ཅད་རབ་ཏུ་གསལ་བར་བྱེད་པའི་གསུང་གི་འཁོར་ལོའི་རྒྱུར་གྱུར་པའི་ཕྱིར་བརྗོད་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རྒྱུའི་མཆོག་ཡིན་ནོ། །

ཞེས་སོགས་རྒྱས་པར་གསུངས་པ་བཞིན་ནོ། །

さらに〔以上のことは『文殊菩薩真実名義経』に〕

---

[44]NS v. 10 (cf. Davidson 1981: 19): bhagavajjñānakāyasya mahoṣṇīṣasya gīṣpateh | mañjuśrījñānasattvasya jñānamūrteḥ svayambhuvaḥ ||; T1190, vol. 20, 826c14f.: 彼出有壞之智身，是大頂旋言詞主，亦是智身自超出，妙吉祥智勇識者.

[45]NMAA D 32b1f. からの引用。

「〔すなわち、仏世尊であられる〕正等覚者は a 音から生じる。a 音は全ての音の中で最高のものである。それは大いなる意味を有する最高の音素である。実にそれは内から発するものでありながら[46]不生なるものであり、〔発話行為とは無縁のものであり〕[47]、一切の発話の最高原因であり、一切の言葉を明るく照らすものである。」[48]

と説かれ、註釈[49]に

「それゆえ、次のように説明しよう。a 音は不生という様態を持つものであるがゆえに、マンジュシュリーの本質——それはあらゆる仏の美質の拠り所であり、覚りを求める心に基づいて起こるものであり、無分別智そのものである——を生み出す。それゆえ、それは法輪を転じて一切の言葉を明るく照らすもの、すなわち、車輪のような言葉の原因であるので、一切の発話の最高原因である。」[50]

と詳しく説明される通りである。

[211.22]

གཉིས་པ་ནི། སྐབས་འདིར་འགྲེལ་བྱེད་སྔ་མ་རྣམས་ཀྱིས་སྒྲ་དབྱངས་ཞེས་པ་ཨ་ལི་བཅུ་དྲུག་ཁོ་ནར་ངོས་བཟུང་སྟེ་དེ་འཇམ་དཔལ་གྱིས་གསུངས་སོ་ཞེས་བབ་ཅོལ་དུ་སྨྲ་བར་བྱེད་མོད། དེ་དག་གིས་བརྗོད་པ་ཙམ་ལ་བསམས་ན་ནི་སྨྲ་པོ་མཐའ་ཡས་པའི་ཕྱིར་མ་ངེས་ལ། སྔོན་དུ་ཨ་ལི་བཅུ་དྲུག་ཁོ་ན་གསུངས་པའི་ལོ་རྒྱུས་གཏན་ཚིགས་ཡོད་ནའང་བཀོད་རིགས་པ་ལ་མི་སྣང་ཞིང་། འཇམ་དཔལ་ཤེས་རབ་ཀྱི་ལྷ་ཡིན་པས་ཨ་ལི་ཁོ་ན་གསུངས་པ་འཐད་དོ་སྙམ་ནའང་རང་བཟོར་རྟོགས་སླ་བར་མ་ཟད། མདོ་རྒྱུད་རྒྱ་མཚོ་རྣམས་ནས་སྒྲ་དབྱངས་བརྗོད་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་དབང་ཕྱུག་ཏུ་གསུངས་པ་དང་འགལ་ལོ། །

第二（誤解の排除）。この箇所に関して昔の註釈者達は、「音の旋律」（sgra dbyangs）を十六の a 系列音（āli）[51]のみとして同定し、それをマンジュシュリー（文殊師利）が発せられたのだという軽はずみな結論を述べている。しかし、もし彼らが単なる発声行為を意図して〔そのように述べているの〕であれば、〔十六の a 系列音を〕発声した人は無数にいるので〔その発声主体はマンジュシュリーには〕限定されないはずである。また、もし〔無数に存在する他の発声主体に〕先んじて〔マンジュシュリーが〕まさに十六の a 系列音を発したという伝承が根拠としてあるならば、それを提示するべきであるけれども、実際の所そうした伝承は見当たらない。さらに、もし彼らが「マンジュシュリーは智慧を司る尊格であるので、a 系列音のみを発したというのは理にかなっている」[52]というとしても、それが作り話であることは容易に分かるだけではなく、海のように豊富

[46]khong nas ’byung ba「内から発するものでありながら」。サンスクリット原典には mahāprāṇaḥ「強音を有する」とあり、別系統のチベット語訳にこれと対応する srog chen po ste という読みもある。

[47]vāgudāhāravarjitaḥ; tshig tu brjod pa spangs pa ste「発話行為とは無縁のものであり」。シトゥの引用にはこの一詩脚が欠落している。

[48]NS vv. 28–29 (cf. Davidson 1981: 22f.): tad yathā bhagavān buddhaḥ saṃbuddho ’kārasambhavaḥ | akāraḥ sarvavarṇāgryo mahārthaḥ paramākṣaraḥ || mahāprāṇo hy anutpādo vāgudāhāravarjitaḥ | sarvābhilāpahetvagryaḥ sarvavāksuprabhāsvaraḥ ||; T1190, vol. 20, 827a24ff.: 如是正覺出有壞，究竟正覺啞中出，啞者一切字中勝　是大利益微妙字，諸境之內出無生，即此遠離於言說，是諸說中殊勝因，令顯一切諸言說.

[49]マンジュシュリーキールテイ（Mañjuśrīkīrti）の註釈『文殊菩薩真実名義経広釈』（*Mañjuśrīnāmasaṅgītiṭīkā*, Tohoku no. 2534）からの引用である。

[50]NSṬ D 133a4f. からの引用。

[51]サンスクリットの十四の母音（a, ā, i, ī, u, ū, ṛ, ṝ, ḷ, ḹ, e, ai, o, au）、アヌスヴァーラ（aṁ）、ヴィサルガ（aḥ）を合わせて a 系列音（āli）という。

[52]マンジュシュリーが智慧を働かせて、子音を全く使わずに、十四の母音とアヌスヴァーラ（aṁ）とヴィサルガ（aḥ）のみで有意味な言葉を語ったという意味であろうか。

にあるスートラとタントラの中で〔マンジュシュリーが〕「あらゆる音の調べの発声行為の自在者」と言われるのと矛盾する。

[211.3]

གསུམ་པ་ལ་དངོས་དང་ལོག་རྟོག་སེལ་བ་གཉིས།

第三（サダーシヴァに対する敬礼）に関して二点ある。[211.31] 本文、[211.32] 誤解の排除。

[211.31]

[211.311]

དང་པོ་ནི།

> གང་གིས་མིང་གཞི་སྔོན་གསུངས་པ། །རྟག་ཞི་བ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །

ཞེས་པ་སྟེ། གང་གིས་མིང་ཚིག་བརྗོད་པ་ཀུན་གྱི་གཞི་ཡིན་པས་མིང་གཞི་སྟེ་ཡི་གེ་སྔོན་དུ་གསུང་བ་པོར་འཇིག་རྟེན་ན་གྲགས་པ་ལྷའི་དབང་པོ་རྟག་ཏུ་ཞི་བ་ལ་ཕྱག་འཚལ་ལོ། །ཞེས་སོ། །

第一（本文）は以下の通りである。

> 最初に基本音素を発せられたサダーシヴァ[53]に敬礼する[54]。**[2ab]**

基本音素はあらゆる単語と文と文集合の基本であるのでそのように呼ばれる。その基本音素（ming gzhi = yi ge）を最初に発せられた者として世間で広く知られる神々の王者サダーシヴァに敬礼する、という意味である。

[211.312]

དེའང་འཇིག་རྟེན་གྱི་གྲགས་པ་ཙམ་གྱི་རྗེས་སུ་འབྲངས་ནས། བརྡ་ཡང་དག་པར་སྦྱོར་བའི་ཚུལ་འདི་དག་འོག་ནས། བསླབ་པ་ཀུན་གྱི་གཞི་འཛིན་ཅིང་། །སོགས་འཆད་འགྱུར་ལྟར་གྲུབ་མཐར་ཞུགས་མ་ཞུགས་ཕྱི་ནང་ཐམས་ཅད་ཀྱི་བསླབ་བྱར་ཤེས་པའི་ཆེད་དུ་འམ། ཕྱི་རོལ་པ་རྗེས་སུ་གཟུང་བའི་སླད་དུ་ལྷ་ཆེན་པོ་དབང་ཕྱུག་ལ་བསྟོད་ཕྱག་མཛད་པ་ཡིན་ཞིང་། དབང་ཕྱུག་གི་མཚན་དུ་རྟག་ཞི་བ་ཞེས་པ་ནི་ས་དཱ་ཤི་བ་སྟེ་འཕགས་པའི་ཡུལ་དུ་རླུང་ལྟར་གྲགས་པ་ཡིན་ནོ། །

さらにまた、〔作者トゥミは〕世間の一般常識に従って、この後の〔第 3 詩節でも〕「あらゆる学習内容の基盤を理解させるものであり、云々」と説明するように、目下の言語単位（brda）の正しい結合方法というのは、学問に従事する者であれ、そうでない者であれ、仏教徒および非仏教徒の全ての者が学習すべきものであることを〔読者に〕理解させるために、あるいは異教徒に恩恵を授けるために、大自在天シヴァに賞賛と敬礼をなさった。この自在天を名づけて〔チベット語では〕タク・シワ（rtag zhi ba）という。サダーシヴァのことである。〔サダーシヴァがシヴァの別名であることは〕インドでは風のように広く知られている。

[211.32]

[211.321]

---

[53] シトゥによればサダーシヴァ（Sadāśiva「常に吉祥なる者」）はシヴァの別名である。なお、シヴァが有する五つの顔の一つがサダーシヴァであるという説もある。シヴァはパンチャ・アーナナ（pañcānana）すなわち「五つの顔を持つ者」である（菅沼 1985: 271）。

[54] 稲葉 (1986: 317) は「往昔、基字を説き給へる Sadāśiva に歸命し奉る」と訳す。

གཉིས་པ་ནི། དེ་ལྟ་ན་ལྷ་ཆེན་པོས་ཡི་གེ་ཐོག་མར་བཀོད་པའམ་གསུངས་པའི་ལོ་རྒྱུས་བསྙད་དུ་མེད་ཅིང་། སྤྱིར་དཀོན་ཅོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་སོང་ནས་འཇིག་རྟེན་པའི་ལྷ་ལ་ཕྱག་བྱེད་པའང་མི་འབྲེལ་བས་མི་འཐད་དོ། །ཞེ་ན

第二（誤解の排除)。（反論：）もしそうだとしても、〔チベットでは〕大自在天（シヴァ）が最初に音節を創造あるいは発声したという伝承が語られることはなく、また一般論として、三宝に帰依した後で世間天に敬礼することも不整合であるから、以上のことは妥当でない。

[211.322]

ལྷ་ཆེན་པོས་ཡི་གེ་ཐོག་མར་བཀོད་པའི་ལོ་རྒྱུས་དེང་སང་བོད་ཡུལ་འདིར་ཡོངས་གྲགས་སུ་མེད་ཀྱང་སྔོན་དུས་མེད་པར་མ་ངེས་ལ། འཕགས་ཡུལ་དུ་ནི་ཕྱི་རོལ་པ་དག་གིས་དབང་ཕྱུག་འཇིག་རྟེན་གྱི་བྱེད་པོར་ཡང་འདོད་ཅིང་བྲམ་ཟེ་རྣམས་ཀྱི་གཞུང་དུ་བྱེད་པོ་ཉི་ཤུ་རྩ་བཞི་བཤད་པ་ལས་ཡི་གེའི་བྱེད་པོ་དབང་ཕྱུག་ཏུ་གསལ་བར་བསྟན་པ་ཡོད་པར་མ་ཟད། མ་མཐོང་ཕྱིར་ན་མེད་པ་མིན། །ཞེས་པ་ལྟར་ཁྱེད་རང་གིས་མ་མཐོང་བའི་རྟགས་ཀྱིས་མེད་པར་བསྒྲུབ་མི་ནུས་པའི་ཕྱིར་དང་། མཆོག་གསུམ་ལ་སྐྱབས་སུ་སོང་ནས་འཇིག་རྟེན་པའི་ལྷར་ཕྱག་བྱེད་པ་སྤྱིར་མི་འོས་ཀྱང་འདི་དགོས་པ་དང་བཅས་ཤིང་ལྷ་ཆེན་པོ་དེ་འཇིག་རྟེན་དབང་ཕྱུག་གི་རྣམ་རོལ་དུའང་ཟ་མ་ཏོག་ལ་སོགས་པའི་མདོ་སྡེ་རྣམས་སུ་བསྟན་པའི་ཚུལ་ཇི་ལྟ་བར་ཐུགས་སུ་ཆུད་ནས་ཕྱག་མཛད་ཀྱི། འཇིག་རྟེན་རང་རྒྱུད་པར་བཟུང་བའམ། འཇིག་རྟེན་གྱི་བྱེད་པོ་སོགས་སུ་ཞེན་པས་ཕྱག་མ་མཛད་པའི་ཕྱིར་སྐྱོན་མེད་དོ། །

（答：）[1] 確かに「大自在天が最初に音素（yi ge, *varṇa）を創造した」という伝承は、最近のチベットで広く知られるところではないが、それが過去にも知られていなかったいう証拠はない。[2] 聖なる国（インド）で異教徒の人々はシヴァを世界の創造者として認めており、バラモン教学の論書では二十四の創造者が列挙されるが、その内で音素の創造者はシヴァであると明瞭に説かれてある。[3] さらにそれだけでなく、〔師ダルマキールティが〕「知覚されないからといって必ずしも存在しないわけではない」[55]と述べるように、あなた自身がそれを見たことがないからという理由で、それが存在しないことを証明することはできない。[4] 一般論としては、三宝に帰依した後で世間天に敬礼するのは適切ではないが、今のことはしかるべき目的があってのことである。[5] かの大自在天がローケーシュヴァラ（観自在）の化身であることは『宝篋経』(*Ratnakaraṇḍasūtra*) などの経典に説示されているので、〔トゥミは〕その通りにご理解なさって敬礼なさったのであるが、〔大自在天を〕世界の統治者として理解したり、あるいは世界の創造者などと思い込んで敬礼なさっているのではない。以上の [1] から [5] までの理由により過失はない。

[211.323]

དེས་ན་མཁན་པོ་འདིས་ཡི་གེ་དབང་ཕྱུག་གིས་བཀོད་པ་འཕགས་ཡུལ་དུ་བྲམ་ཟེ་རྣམས་ལ་ཡོངས་སུ་གྲགས་པར་དགོངས་ནས་མ་བརྟགས་ཉམས་དགའི་ངོར་འཇིག་རྟེན་གྱི་གྲགས་པ་དང་སྒྲོ་བསྟུན་ཏེ། དགོས་པའི་དབང་གིས་འདི་ལྟར་བསྟན་པ་ལ་ནི་ཉེས་པའི་ཆ་ཕྲ་མོས་ཀྱང་གོས་པ་མ་ཡིན་ནོ། །

それゆえ、この作者〔トゥミ〕はシヴァによる音素創造〔の神話〕がインドでバラモン達の間で広く知られていることを念頭に置いて、考察しない限りで受け入れられるべきものとして、世間の常識に合わせて、目的を顧慮し、上記のように説示したのである。この説示はごく僅かな過失の一部にさえもけがされていない。

[55] PV II 83 (cf. 稲見 2005: 126): tanutvān mūrtam api tu kiñcit kvacid asaktimat | jalavat sūtavat dhemni nādṛṣṭer asad eva vā ||（「あるものは物質的なものであっても、微細であるゆえに、あるものに対して抵触性を持たない。例えば水がそうであるように。金に対する銀がそうであるように。また、それは知覚されないからといって必ずしも存在しないわけではない。」）

[211.323]

འདིར་འགྲེལ་བྱེད་གཞན་དང་གཞན་དག་གིས་རྟག་ཞི་བ་ཞེས་པ་སངས་རྒྱས་དང་། སྤྱན་རས་གཟིགས་དང་། ཚངས་པ་དང་། ཁྱབ་འཇུག་སོགས་སུ་འདོད་པ་ཡོད་ཀྱང་རིམ་བཞིན་འཐད་པར་མ་མཐོང་སྟེ། སངས་རྒྱས་ནི་དཀོན་ཅོག་གསུམ་གྱི་གཙོ་བོ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དེ་ལ་ཐོག་མར་བསྟོད་ཕྱག་མཛད་པས་འདིར་སླར་ཡང་ཁྱད་པར་དུ་བསྟོད་ཕྱག་མཛད་པར་བསྒྲུབ་པ་ལ་དགོས་པ་འཐད་ལྡན་སྨྲ་རྒྱུ་མ་བྱུང་བའི་ཕྱིར་དང་། རྟག་ཞི་བ་སངས་རྒྱས་ཀྱི་མཚན་དུ་གྲགས་ཆུང་བའི་ཕྱིར་དང་། སྤྱན་རས་གཟིགས་དང་ལྷ་ཚངས་པ་དག་གིས་ཀྱང་ཡི་གེ་ཐོག་མར་བཀོད་པའི་ལོ་རྒྱུས་འཐད་ལྡན་སྨྲ་རྒྱུ་མེད་པར་མ་ཟད། དེ་དག་ལའང་རྟག་ཞི་བའི་མིང་ཡོངས་སུ་མ་གྲགས་པའི་ཕྱིར་དང་། ཁྱབ་འཇུག་གིས་ཡི་གེ་བཀོད་པར་བཤད་པའི་གཞུང་དེའང་འཐད་ལྡན་ཡིན་མིན་བརྟག་དགོས་ཤིང་ཁྱབ་འཇུག་ལ་རྟག་ཞི་བར་ཡང་མ་གྲགས་ཏེ་མིང་སྟོང་གིས་ཁྱབ་འཇུག་ལ་བསྟོད་པའི་རྒྱ་དཔེ་ཁོ་བོའི་ལག་ཏུ་སོན་པས་དེའི་ནང་དུའང་རྟག་ཞི་བ་ཞེས་པ་མ་བྱུང་བའི་ཕྱིར་དང་།

これに関連して、他の様々な註釈者達は「サダーシヴァ」という語がブッダを意味すると認めたり、アヴァローキテーシュヴァラ（観自在）を意味すると認めたり、あるいはブラフマン（梵天）やヴィシュヌなどを意味すると認めている[56]。しかし、以下に順に示す理由から、妥当であるとは考えられない。[1] ブッダは三宝の内の主たるものであるという理由で〔トゥミは〕最初に彼に対して称賛と敬礼をなさっているので、ここで再び〔トゥミは〕特別に称賛と敬礼をなさっているのだと論証したいのであれば、理にかなった目的を提示するべきであるが、〔過去の註釈者はそれを提示できて〕いない。また、「サダーシヴァ」はブッダの呼称としてはあまり知られていない。[2] アヴァローキテーシュヴァラやブラフマン神が音素を最初に創造したという正統な伝承を提示するべきであるが、〔過去の註釈者はそれを提示できて〕いない。それだけだけでなく、その二者についても「サダーシヴァ」という呼称は知られていない。[3] ヴィシュヌが音素を創造したと述べているその論書についても、果たしてそれが正統なものであるか否か検討する必要がある。また、ヴィシュヌも「サダーシヴァ」という呼称では知られておらず、幾千もの名前でヴィシュヌを賞賛するインドの文献が私の手元にあるが、その中にも「サダーシヴァ」という名称は現れない。

[211.324]

སོ་སོར་འབྲང་མའི་སྲུང་བའི་སྐབས་སུ།

　　དམངས་རིགས་ཕྱིར་ན་རྟག་ཞི་བ། །ཁྱབ་འཇུག་ལེགས་པར་བྲི་བར་བྱ། །

ཞེས་འབྱུང་བའང་དེ་གཉིས་གཅིག་པར་བསྟན་པ་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཏེ། དམངས་རིགས་ཀྱི་དོན་དུ་དབང་ཕྱུག་གམ་ཁྱབ་འཇུག་གང་རུང་བྲི་བའི་དོན་དུ་མངོན་པའི་ཕྱིར་ཏེ། དེ་མ་ཐག་ཏུ།

　　རྗེའུ་རིགས་ཕྱིར་ནི་རྣམ་ཐོས་བུ། །ལྷ་ཡི་དབང་ཕྱུག་དབང་པོ་བྲི། །

ཞེས་འབྱུང་བའང་རྣམ་ཐོས་བུའམ་དབང་ཕྱུག་གམ་བརྒྱ་བྱིན་གང་རུང་བྲི་བའི་དོན་དུ་གསལ་བའི་ཕྱིར་རོ། །

[4] プラティサラー（大随求）の護陀羅尼[57]の一節に

　　「シュードラのためにサダーシヴァ・ヴィシュヌが正しく筆記を行なうであろう。」

---

[56] ナムリン・パンチェンの説明によると、ここに言及される「サダーシヴァ」について多数の解釈があり、諸註釈においてブッダ、ヴィシュヌ、ブラフマン、アヴァローキテーシュヴァラなど様々な尊格と同一視される（*Legs bshad snang byed* 10a4ff.)。

[57] チベット大蔵経カンギュル・テンギュルにプラティサラー（So sor ’brang ma, Pratisarā）尊母に関連する護陀羅尼（rakṣā）や成就法（sādhana）が数篇あるが、これに一致する文言を見出すことができない。

とあるが、その言葉も二者を同一のものとして述べているのではない。なぜなら、シュードラのためにマヘーシュヴァラ（シヴァ）あるいはヴィシュヌのいずれか一方が筆記を行なうであろうという意味に解されるからである。また、その直接に現れる

「ヴァイシャのためにヴァイシュラヴァナ・デーヴェーンドラが筆記を行なうであろう。」

という言葉も、ヴァイシュラヴァナ、あるいはインドラ——シャクラともいう——のいずれか一方が筆記を行なうであろうという意味であることは明らかだからである。

[211.325]

ཡང་འགྲེལ་བྱེད་ཕྱི་མ་ཞིག་གིས་རྟག་ཞི་བ་དབང་ཕྱུག་ཏུ་འདོད་མཁན་ལ་དགག་པ་བྱེད་པར་བསམམས་ཏེ། དབང་ཕྱུག་དང་དྲག་པོ་སོགས་སྐབས་འདིར་མཆོད་ཡུལ་དུ་བྱེད་པ་ལ་དགོས་པ་མ་མཆིས་ཤིང་ཞེས་སྨྲས་ནས་རང་ལུགས་བཞག་པའི་སྐབས་སུ། གཞན་སྡེའི་ངོར་ཚངས་པ་དང་ཁྱབ་འཇུག་སོགས་ལ་བསྟོད་ཕྱག་མཛད་པར་འགྲེལ་རིགས་ཚུལ་ཟ་མ་ཏོག་གི་ལུང་རྒྱས་པར་དྲངས་ནས་བསྒྲུབས་འདུག་སྟེ་དེ་དག་དངོས་འགལ་དུ་འགྱུར་རམ་མི་འགྱུར། དབང་ཕྱུག་དང་དྲག་པོ་ཞེས་པའང་མིང་གི་རྣམ་གྲངས་ཡིན་གྱི་ལྷའི་ངོ་བོ་སོ་སོ་བ་མ་ཡིན་ལགས་སོ། །

さらに、後世のある註釈者は、「サダーシヴァ」をイーシュヴァラ（自在天、シヴァ）とみなす者に反論しようと考えて、この文脈においてイーシュヴァラやルドラなどを敬礼対象とすることには有用性がないと論じるが、自身の説を立てる段階においては、「〔トゥミは〕異教徒の考えに従ってブラフマンやヴィシュヌなどに対する称賛と敬礼をなさっているのだ」という解釈がどうして合理的であるかということを、『宝篋経』の文言を長く引用して論証しようとしている。だが、それら二つの主張は直接的に矛盾するのではないだろうか。なお、「イーシュヴァラ」と「ルドラ」というのは同義語であって、〔二者は〕別々の神格ではない。

[211.326]

ཡང་འདིར་བསྟན་གྱི་མིང་གཞི་ཞེས་པའང་ཁ་ཅིག་གིས་གསལ་བྱེད་ཁོ་ན་ལ་ངོས་བཟུང་བ་ནི། དེ་བས་གོང་དུ་སྒྲ་དབྱངས་ཨཱ་ལི་ཁོ་ནར་བཤད་པའི་སྟོབས་ཀྱིས། དེ་དང་འབྲེལ་མཚུངས་པའི་སླད་དུ་དེ་ལྟར་མི་འཆད་ཀ་མེད་བྱུང་བ་ལས་རྒྱུ་མཚན་གཞན་མི་སྣང་ངོ་། །མིང་གཞི་ཡི་གེ་ཙམ་ལ་ངོས་འཛིན་པ་ནི་རྒྱུ་མཚན་དང་བཅས་པ་སྟེ། འོག་ཏུ། མིང་ཚིག་བརྗོད་པ་ཀུན་གྱི་གཞི། །ཡི་གེའི། ཞེས་དང་། ཡི་གེ་ཨཱ་ལི་ཀཱ་ལི་གཉིས། །ཞེས་བཤད་པས་མིང་གཞི་ཡི་གེ་ཡིན་པར་གྲུབ་ཅིང་ཡི་གེའང་ཨཱ་ལི་ཀཱ་ལིའི་བདག་ཉིད་དུ་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་རོ། །

また、ここに言及される ming gzhi「基本音素」という語について、ある人は子音（gsal byed）のみを意味すると理解しているが、彼はそれに先立って sgra dbyangs「音の旋律」[v. 1c] という表現が a 系列音（āli）のみを意味すると註釈していたので、それと関連づけて形を揃えるために、そのように説明せざるを得なかったのであり、それ以外に特別な理由は見られない。ming gzhi を「音節」一般の意味で理解することには正当な根拠がある。なぜなら、後の箇所で「全ての単語・文・文集合の基本である文字（yi ge）[58]の…」[v. 3cd]、「音節は a 系列音と ka 系列音の二つである」[v. 4a] と説かれるので、ming gzhi は音節であることが確立し、さらに、音節は a 系列音と ka 系列音を本質とすることが確立しているからである。

[58]yi ge はサンスクリットの akṣara に相当し「音節」を意味するが、『三十頌』ではしばしば「文字」を意味する。「音節」と「文字」という二つの概念の混在は『三十頌』全体に見られる現象である（稲葉 1986: 18–19、班青東周 2020 を参照）。トゥミはあらゆる音素・音節（yi ge）を発する者としてマンジュシュリーを讃え、さらに音素の創造者としてのサダーシヴァに敬礼していた。しかし、論書で主に論じられるのはチベット語を表記する文字（yi ge）の結合法である。第 3 詩節「あらゆる学習内容の基本を理解させるものであり、ヴェーダに関する理論の因子でもあり、全ての単語・文・文集合の基本である文字（yi ge）の結合法をこれから説明しよう」においても yi ge という語は「文字」を意味する。

[211.4]

[211.41]

བཞི་པ་ནི།

སྡེབ་སྦྱོར་ལེགས་མཛད་མཁས་རྣམས་དང་། །བླ་མ་ལ་ཡང་ཕྱག་འཚལ་ནས། །

ཞེས་པ་སྟེ།

第四（報恩を目的とした学者一般および特定の学者に対する敬礼）。

言語使用／美文詩[59]を正しく教示して下さった学者達や我が尊師にも敬礼して…[60]。**[2cd]**

[211.42]

སྒྲ་སྐད་ཀྱི་བརྗོད་པ་དང་དོན་སྡེབ་ལེགས་པར་སྦྱོར་བའི་ཚུལ་སྟོན་པའི་སྒོ་ནས་ཚིག་དོན་གཉིས་ལ་མི་རྨོངས་པའི་ཤེས་རབ་སྐྱེད་པར་བྱེད་ནུས་པའི་གཞུང་རྩོམ་ཞིང་འདོམས་པར་མཛད་པའི་མཁས་པ་སྤྱི་དང་། ཁྱེ་བྲག་ཏུ་མཁན་པོ་ཉིད་ལ་དེ་ལྟའི་བྱ་བ་མཛད་པའི་བྲམ་ཟེ་ལི་པི་ཀ་ར་ལ་སོགས་པའི་བླ་མ་རྣམས་ལའང་ཕྱག་མཛད་པ་སྟེ། ནས་ཀྱི་སྒྲ་ནི་མཚོད་པར་བརྗོད་ཟིན་མ་ཐག་ནས་བཤད་པར་དམ་བཅའ་བའི་ཚིག་འདྲེན་པའི་ཕྱིར་ལྷག་བཅས་ཀྱི་སྒྲའོ། །

音声言語の発声とその表示内容の結合体（sdeb）[61]を正しく構成する（sbyor）方法[62]を説示することによって、言葉とその意味の両者について迷妄しない智慧をもたらすことができる論書を著作して教示なさった学者全般に〔作者は〕敬礼し、特に作者（トゥミ）自身に対してそのような〔教示〕行為をして下さった婆羅門リピカーラ（Lipikāra）などの教師達にも敬礼なさっている。nas という語は、敬礼を述べた直後に著作宣言の言葉を導くためのものであり、未完結接続助詞（lhag bcas kyi sgra）である。

[211.43]

དེས་ན་སྡེབ་སྦྱོར་ཞེས་པ་སྒྲ་སྐད་ཀྱི་འཇུག་པ་བྱིངས་རྐྱེན་རྣམ་འགྱུར་རྣམས་སྡེབ་ལེགས་པར་སྦྱར་བས་ཚིག་དོན་འཁྲུལ་བ་མེད་པར་སྟོན་པའི་ཕྱིར་སྒྲ་རིག་པ་དང་། དེ་ཉིད་ཉན་པོའི་རྣ་བ་དང་ཡིད་དུ་འཇེབས་ཤིང་ངོ་མཚར་བའི་སྐད་དུ་ལྷི་ཡང་གི་ཕྲེང་བ་དང་ཚིག་སྦྱོར་ཚུལ་གྱི་ལུས་རྒྱན་མང་པོ་བསྡེབས་ནས་སྦྱོར་བ་སྡེབ་སྦྱོར་དང་སྙན་ངག་སྟེ་བོད་བརྡའི་དབང་དུ་མཛད་པ་ཡིན་གྱི་ཆ་རྣམས་བསྒྱུར་བའི་སྡེབ་སྦྱོར་དེ་ཚིགས་བཅད་ཁོ་ན་ནི་འདིར་བསྟན་བྱ་མ་ཡིན་ནོ། །

したがって、sdeb sbyor とは言語使用のことであり、すなわち、動詞語根（byings, *dhātu）と接辞（rkyen, *pratyaya）とヴィカラナ（rnam 'gyur, *vikaraṇa）の結合体（sdeb）[63]を正しく構成すること

[59] シトゥによれば sdeb sbyor は「言語使用」もしくは「美文詩」の意味で解釈される。第一解釈は「結合体（sdeb）の構成方法（sbyor）」または「結合体（sdeb）を構成すること（sbyor）」という語源解釈に基づくものであり、その場合の「結合体」（sdeb）とは「言葉と意味の結合体」もしくは「動詞語根と接辞とヴィカラナの結合体」である。第二解釈は「作品の体と装飾要素を結合（sdeb）して構成（sbyor）したもの」という語源解釈に基づく。

[60] 稲葉 (1986: 318) は「音韻の結合を善くなし給へる諸學者とまた師長にも歸命し奉り畢つて」と訳す。

[61] sdeb という動詞は「合わせること」（'grogs pa）、「結びつけること」（sbyor ba / sgrig pa）を意味する（*Tshig mdzod chen mo*, s.v. sdeb pa）。ここでは動詞から派生した名詞で「結合体」（結びつけられたもの）という意味になる。すなわち、sdeb とは「言葉と意味の結合体」である。

[62] sdeb sbyor の第一解釈である。これによると「言葉と意味の結合体（sdeb）の構成方法（sbyor = sbyor ba'i tshul）」という意味になる。

[63] sdeb「結合体」に関する別解釈である。直前の箇所で sdeb は「言葉と意味の結合体」を意味していたが、ここでは「動詞語根と接辞とヴィカラナの結合体」を意味する。

（sbyor ba）である。これによって言葉と意味を誤りなく説示するものが言葉の学問である。また、まさにそれが学習者の耳を喜ばせて心を驚かせるようにするために、一連の長音節（lci, *guru）と短音節（yang, *laghu）を構成し、単語を構成した形式を有する作品の体（lus, *śarīra）と多くの装飾要素（rgyan, *alaṁkāra）を結びつけて構成したものは sdeb sbyor（「作品の体と装飾要素を結びつけて構成したもの」）[64]であり、美文詩（snyan ngag, *kāvya）である。〔ここでは sdeb sbyor という語を〕チベット語の術語として考慮しているのであって、chandas の訳語としての sdeb sbyor「韻文作品」のみが本詩節で語られているのではない。

[212]

གཉིས་པ་རྩོམ་པར་དམ་བཅའ་བ་ལ་དངོས་དང་ཞར་བྱུང་གི་དོན་གོ། །

第二「著作宣言」に関して [212.1] 本文の提示と [212.2] 付随的問題がある。

[212.1]

དང་པོ་ནི།

> བསླབ་པ་ཀུན་གྱི་གཞི་འཛིན་ཅིང་། །རིག་བྱེད་སྨྲ་བ་རྣམས་ཀྱི་རྒྱུ། །
> མིང་ཚིག་བརྗོད་པ་ཀུན་གྱི་གཞི། །ཡི་གེའི་སྦྱོར་བ་བཤད་པར་བྱ། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第一（本文の提示）は以下の通りである。

> あらゆる学習内容の基本を理解させるものであり、ヴェーダに関する理論の因子でもあり、全ての単語・文・文集合の基本である文字の結合を説明しよう[65]。**[3]**

[212.2]

ལྷག་པ་ཚུལ་ཁྲིམས་དང་། སེམས་དང་ཤེས་རབ་ཀྱི་བསླབ་པ་སྟེ་སངས་རྒྱས་པའི་བསླབ་པའི་གཞི་ཐམས་ཅད་ལྟོས་པའི་སྒོ་ནས་འཛིན་པར་བྱེད་ཅིང་། ཕྱི་རོལ་པའི་ངེས་བརྗོད། མཆོད་སྦྱིན། སྙན་ཚིག་སྲིད་སྲུང་སྟེ་རིག་བྱེད་བཞི་ཡན་ལག་དང་བཅས་པ་རྣམས་དང་། བཟོ་གསོ་སྒྲ་ཚད་ལ་སོགས་པ་ཤེས་བྱ་རིག་པའི་གནས་ཀྱི་གཞུང་ལུགས་མཐའ་དག་སྨྲ་བ་རྣམས་ཀྱི་རྒྱུའང་ཡིན་ལ། སྤྱིར་ཡི་གེ་ལས་མིང་མིང་ལས་ཚིག་འབྱུང་བ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་འཇིག་རྟེན་དང་འཇིག་རྟེན་ལས་འདས་པའི་མིང་ཚིག་བརྗོད་པ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་གཞིར་གྱུར་པ་ཡི་གེའི་སྦྱོར་བ་བཤད་པར་བྱའོ། །ཞེས་སོ། །

増上戒学・増上心学・増上慧学という仏教徒の学習内容の全ての基本を依存関係を通じて[66]理解させるものであり、異教徒の『リグ・ヴェーダ』『ヤジュル・ヴェーダ』『サーマ・ヴェーダ』『アタルヴァ・ヴェーダ』という四ヴェーダおよびその補助学や、工芸学（工巧明）、医学（医方明）、言葉の学（声明）、論理学（因明）などの学ばれるべきあらゆる学問体系の理論の因子でもあり、世間および出世間の事柄に関わる全ての単語・文・文集合の基本——一般的に音節／文字（yi ge）[67]

[64]sdeb sbyor の第二解釈である。これによると sdeb は動詞として解釈され、「作品の体と装飾要素を結合（sdeb）して構成（sbyor）したもの」という意味になる。

[65]稲葉 (1986: 319) は「一切の所學の基を把握せしめ、吠陀の書物の因であり、一切の語と句と文との基となる文字の結合を解說しよう」と訳す。

[66]学習内容の基本の理解は「文字の結合」に依存するからこのように言われる。

[67]一般的にインドの学問においては、単語・文・文集合の基本とされるのは音節（akṣara）であるが、トゥミとシトゥは文字（yi ge）をそれらの基本と捉え、なおかつその文字の結合について解説をしようとしている。ここで yi ge という語は曖昧に使われ、「音節」と「文字」の間を行き来しているように見える。

から単語が生まれ単語から文が生まれるので――である文字の結合を説明しよう。以上が〔本文の意味〕である。

[212.2]

[212.21]

གཉིས་པ་ནི།　དེ་ལྟར་ཚིགས་སུ་བཅད་པ་འདིས་ཞར་ལ་བསྟན་བཅོས་ཀྱི་དགོས་སོགས་ཆོས་བཞི་འང་བསྟན་པ་ཡིན་ཏེ། གངས་ཅན་དུ་བདེ་བར་གཤེགས་པའི་གསུང་རབ་ལ་སོགས་པར་འཇུག་པའི་བརྡ་དང་སྐད་ཀྱི་འཇུག་པ་ཕལ་མོ་ཆེ་གསལ་བར་བྱེད་པའི་ཡི་གེའི་སྦྱོར་བ་གང་ཡིན་པ་ནི་རྩ་བ་བརྒྱད་པའི་བསྟན་བཅོས་འདི་རྣམས་ཀྱི་བརྗོད་བྱའོ། །

第二（付随的問題）。以上のことから、本詩節によって付随的に論書の目的などの四項目[68]も示されている。すなわち、チベットでの仏説（善逝の聖言）などへの入門の手段となる言語協約と音声言語の大部分の使用法を明らかにする文字の結合が何であるかというのが、この八章からなる根本論書（rtsa ba brgyad pa’i bstan bcos）の主題（brjod bya, *abhidheya）である。

[212.22]

དེ་ཉིད་འཛིན་ཅིང་རྟོགས་པར་བྱས་པ་ལ་བརྟེན་ནས་མིང་ཚིག་བརྗོད་པ་ཐམས་ཅད་ལ་མི་རྨོངས་པའི་བློ་གྲོས་སྐྱེ་ཞིང་བསླབ་པ་གསུམ་དང་རིག་བྱེད་སོགས་གཙུག་ལག་གཉིས་ཀར་འཇུག་པའི་ལམ་ཡངས་པར་འགྱུར་བ་ནི་དགོས་པའོ། །

まさにその〔文字の結合〕に関する理解と通達によって一切の単語・文・文集合について迷妄しない知が起こり、三学やヴェーダ学などの〔仏教内・仏教外の〕両方の学問体系へと趣入する道が広がることが論書の目的（dgos pa, *prayojana）である。

[212.23]

དེ་ལ་བརྟེན་ནས་བྱང་ཆུབ་ཀྱི་ལམ་ལ་སྤྲོ་བས་འཇུག་ཅིང་མཐར་གྱིས་རྣམ་པ་ཐམས་ཅད་མཁྱེན་པ་ཉིད་མངོན་དུ་བྱེད་པ་ནི་དགོས་པའི་དགོས་པའོ། །

その〔目的〕に依拠して菩提道に喜んで趣入し、段階を経て一切相智を現前にすることが究極の目的（dgos pa’i dgos pa, *prayojanaprayojana）である。

[212.24]

ཉིང་དགོས་དགོས་པར་འབྲེལ།　དགོས་པ་བརྗོད་བྱར་འབྲེལ་ཞིང་།　བརྗོད་བྱའང་ཡན་ལག་ཕྱི་མ་ཕྱི་མ་སྔ་མ་སྔ་མར་འབྲེལ་བ་ནི་འབྲེལ་བའོ། །

究極の目的が目的に関係し、目的が主題に関係し、さらに主題についてもそれぞれの後続者が先行者に関係するということが、論書の関係（’brel ba, *sambandha）である。

[22]

གཉིས་པ་སྐབས་དོན་སུམ་ཅུ་པ་དངོས་ལ།　ཡི་གེའི་སྦྱོར་བ་རྒྱས་པར་བཤད་པ་དང་།　གདམས་ངག་བརྗོད་པས་མཇུག་བསྡུ་བའོ། །

第二「目下の主題である『三十頌』そのもの〔に関する詳説〕」に関して〔二点ある〕。[221] 文字の結合についての詳説、[222] 教誡を述べることによる結論。

---

[68] 論書の主題（brjod bya, abhidheya）、目的（dgos pa, prayojana）、究極目的（nying dgos, prayojanaprayojana）、関係（’brel ba, sambandha）の四項目である。

[221]

དང་པོ་ལ། སྦྱོར་བྱ་ཡི་གེའི་རྣམ་གཞག་དང་། སྦྱོར་ཚུལ་ཚིག་འཕྲད་ཀྱི་འཇུག་པ་བཤད་པ་གཉིས།

第一（文字の結合についての詳説）について二点ある。[221.1] 結合される文字に関する画定、[221.2] 結合手段である助詞の機能に関する説明。

[221.1]

དང་པོ་ལ། བོད་ཡིག་གི་དབྱངས་གསལ་ངོས་གཟུང་བ་དང་། ཁྱད་པར་གྱི་དབྱེ་བ་བསྟན་པ་གཉིས།

第一（結合される文字に関する画定）について二点ある。[221.11] チベット文字の母音記号（dbyangs）[69] と子音等表記文字（gsal）[70] の同定、[221.12] 個別の区分に関する説示。

[221.11]

དང་པོ་ལ་དངོས་དང་མཐའ་དཔྱད་དོ། །

第一（チベット文字の母音記号と子音等表記文字の同定）について二点ある。[221.111] 本文の提示、[221.112] 考察。

[221.111]

[221.111.1]

དང་པོ་ནི།

> ཡི་གེ་ཨཱ་ལི་ཀཱ་ལི་གཉིས། །ཨཱ་ལི་གསལ་བྱེད་ཨི་སོགས་བཞི། །
> ཀཱ་ལི་སུམ་ཅུ་ཐམ་པའོ། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第一（本文の提示）は以下の通りである。

> 音節は **a** 系列音と **ka** 系列音の二つである。**a** 系列音を表記する記号は ི（**-i**）などの四つのものである。**ka** 系列音〔を表記する文字〕は三十ある[71]。**[4abc]**

[221.111.2]

དེའང་ཡི་གེ་ཞེས་བྱ་བ་ལེགས་སྦྱར་གྱི་སྐད་དུ། ཨ་ཀྵ་ར་སྟེ་མིག་ལྟ་བུ་འདྲེན་བྱེད་ལྟ་བྱེད་ལ་སོགས་པ་མིང་དུ་མས་བསྟད་དུ་ཡོད་ལ་ཀ་ལྟ་བུ་ནི་གཞན་གྱིས་མ་ཡིན་པས་འགྱུར་མེད་དང་། བྱཉྫན་སྟེ་མིང་ཚིག་མཐའ་དག་འདྲིས་གསལ་བས་ན་གསལ་

---

[69] dbyangs はサンスクリットの svara に相当する。シトゥは -i、-u、-e、-o の四つの母音記号を dbyangs と呼称する。

[70] gsal あるいは gsal byed はサンスクリットの vyañjana に相当する。シトゥは ཀ་（ka）や ཁ་（kha）などの文字を gsal byed と呼称する。後述するように（221.112.3）シトゥはチベット語で子音/k/と母音/a/を区分することは無意味であると考えているので、厳密に考えると gsal byed の中には子音の要素（/k/）と母音の要素（/a/）が共に含まれることになる。さらにまた、シトゥは母音/a/を表記する ཨ་ a を、ka 系列文字の中の独立群に置いているので、彼が言う gsal byed の中には実は「母音文字」も含まれることになる。以上の問題を考慮するならば、gsal byed を「子音」や「子音文字」と訳すのは適切でなく、むしろ「子音等表記文字」と訳すべきであろう。

[71] 稲葉 (1986: 320) は「文字に母音と子音との二がある。母音を明らかにすれば i などの四つであり、子音を〔明らかにすれば〕三十である」と訳す。

བྱེད་དང་། ཕཛ་སྐེ་དོན་མཐའ་དག་འདིས་བརྗོད་པའི་ཕྱིར་རྗོད་བྱེད་ཀྱང་ཡིན་ཞིང་དེ་ཉིད་ལྷའི་སྐད་ཀྱི་དབང་གིས་དབྱངས་ཡིག་བཅུ་དྲུག་དང་། གསལ་བྱེད་སུམ་ཅུ་རྩ་གསུམ་དུ་བསྡུ་བ་སོགས་སྐད་ཀྱི་བྱེ་བྲག་དང་སྐབས་ཐོབ་ལས་སྣ་ཚོགས་པར་འགྱུར་ནའང་རིགས་མཐུན་ཚོགས་པར་བྱས་པའི་དབྱངས་གསལ་གཉིས་སུ་དབྱེ་བ་ཙམ་གྱི་སྒོ་ནས་ཡི་གེ་མཐའ་དག་བསྡུས་པའི་ཕྱིར་ཨཱ་ལི་སྟེ་ཨ་ཕྲེང་དང་ཀཱ་ལི་སྟེ་ཀ་ཕྲེང་གཉིས་སུ་དབྱེའོ། །

さて、[1] yi ge「音節」はサンスクリットで akṣara という。例えば mig「目」〔という単語〕は’dren byed（*nayana）や lta byed（*dṛṣṭi）などの幾つかの単語によって言い換え可能であるが、/ka/などといった〔音節〕は他要素によっては言い換え不可能であるから、「不壊なるもの」〔という意味で akṣara と言われる〕[72]。また、[2] それはサンスクリットで vyañjana という。これはあらゆる単語や文を顕在化する手段であるから、「顕在化するもの」〔という意味で vyañjana と言われる〕。また、[3] それはサンスクリットで varṇa という。これはあらゆる対象を描写する手段であるから、「描写するもの」〔という意味で varṇa と言われる〕。まさにそれは、神の言葉（サンスクリット）の場合を考慮すれば、十六の母音と三十三の子音にまとめられるというように、言語の種別や文脈（skabs thob）に応じて様々であるが、同類のもの同士でまとめると、母音と子音という二つの区分のみによって全音節が包摂されるから、〔本詩節においても〕a 系列音（āli = a phreng）と ka 系列音（kāli = ka phreng）の二つに区分されている。

[221.111.3]

དེ་ལས་གངས་རིའི་ཁྲོད་འདིར་འཛེབས་པར་བརྗེ་བའི་སྐད་ལ་ཡོངས་སུ་གྲགས་ཤིང་ཉེ་བར་མཁོ་བ་ནི་ཨ་ལིའི་བྱ་བ་གསལ་བར་མཚོན་པར་བྱེད་པའི་ཡི་གེ་ཨི་ཨུ་ཨེ་ཨོ་བཞི་དང་། ཀཱ་ལི་མཚོན་པར་བྱེད་པ། ཀ་ཁ་ག་ང་། ཙ་ཚ་ཛ་ཉ། ཏ་ཐ་ད་ན། པ་ཕ་བ་མ། ཙ་ཚ་ཛ་ཝ། ཞ་ཟ་འ་ཡ། ར་ལ་ཤ་ས། ཧ་ཨ་སྟེ་སུམ་ཅུ་ཐམ་པ་ཡོད་དོ། །

その内、ここなる雪国チベットで聞き心地の良いものとみなされる言語（チベット語）において広く知られ、かつ必須なのは a 系列音の機能を顕在化して表記する ི（-i）、ུ（-u）、ེ（-e）、ོ（-o）の四つ〔の母音記号〕と、ka 系列音を表記する ཀ་ཁ་ག་ང་། ཙ་ཚ་ཛ་ཉ། ཏ་ཐ་ད་ན། པ་ཕ་བ་མ། ཙ་ཚ་ཛ་ཝ། ཞ་ཟ་འ་ཡ། ར་ལ་ཤ་ས། ཧ་ཨ། 〔という文字〕である。〔後者は〕ちょうど三十ある。

[221.112]

[221.112.1]

གཉིས་པ་མཐའ་དཔྱད་ནི། འདི་སྐབས་འགྲེལ་བྱེད་སྔ་མ་ཁ་ཅིག་གིས། ཨ་ཡིག་ཨཱ་ལིར་བགྲངས་པའི་ཨཱ་ལི་ལྔ་དང་ཀཱ་ལི་ཉེར་དགུར་འདོད་པ་བྱུང་མོད་ཀྱི་མཁན་པོའི་དགོངས་པ་མ་རྟོགས་པར་གཟུ་ལུམ་བྱས་པར་སྣང་སྟེ་རྩ་བ་ལས་དངོས་འགལ་དུ་སྨྲས་པའི་ཕྱིར།

第二「考察」。この点について昔のある註釈者は/a/音を a 系列音の一つとして数え、a 系列音は五つあり、ka 系列音は二十九あると主張した[73]。しかし、彼は作者（トゥミ）のお考えを理解しておらず、あまり考えずに論じていると思われる。なぜなら本文と直接矛盾する仕方で語っているからである。

[72] 阪本 (2018: 8, 11, n. 18) によると、もともとインドでは akṣara（「不壊なるもの」「流動しないもの」）という概念は、韻律の構成単位としての「音節」を意味していた。また、akṣara という術語が varṇa「音素」の意味で用いられることもある。

[73] セルトク・ラマによると、サキャ・パンディタの『智者の口飾り』に現れる見解がここで批判対象となっている考えに一致する。*Mkhas pa’i kha rgyan* 217b4 (cf. *Gser tog sum rtags* 32.14ff.; 班青東周 2020): de la dang por dbyangs rnams ni lnga’o || yig bor ba rnams ni ’dir yan lag go ||（「さて、まず母音は五つある。/a/音を除いたものがここでは従属要素である。」）

[221.112.2]

འོ་ན་བརྡ་སྤྲོད་པའི་གཙུག་ལག་རྣམས་ལས་འབྱུང་བ་བཞིན་དུ་འདིར་ཡང་ཡི་གེ་ཚོགས་པ་མཚུངས་པར་སོ་སོར་བསྡུ་བར་མཛད་ན་ཨ་ཡིག་ཁོ་ན་ཚོགས་པ་མི་མཚུངས་པར་བསྐྱལ་བའི་དགོས་པ་ཅི་ཞིག་ཅེས་འདྲི་ན་འདི་ལ་སྔོན་ཆད་མཁས་པའི་གོ་སར་བཞུགས་པ་མང་པོས་རོ་འཛིན་གཡོ་བར་མ་མཛད་ཀྱང་བཤད་པར་བྱ་སྟེ།

（反論：）ならば、諸々の文法学説に従って、本書でも〔トゥミは〕文字（yi ge）を同類群ごとに整理してまとめているが、その時、ཨ་字のみを独立の群に配当した目的は何であるのか。（答：）これについて昔学者の地位についていた多くの人々は口を動かさなかったが〔私は以下のように〕説明しよう。

[221.112.3]

ལེགས་པར་སྦྱར་བའི་སྐད་ལ་གསལ་བྱེད་སྲོག་ཅན་སྲོག་མེད་གཉིས་སུ་དབྱེ་བའི་སྲོག་དེ་ཡིན་ན་དབྱངས་ཡིན་པས་ཁྱབ་པའི་ཕྱིར་ཀ྄་ལྟ་བུ་སྲོག་མེད་རྐྱང་པ་བརྗོད་མི་བཏུབ་པ་ཡིན་ཞིང་། བོད་དུའང་། ལེགས་ཞེར་བ་ལྟ་བུ་ལ྄་ཡིག་ཨེ་ཞུགས་ཀྱི་རྗེས་སུ་ག྄་ས྄་སྲོག་མེད་སྦྱར་བ་སོགས་འགའ་ཞིག་ལ་རིགས་འགྲེ་ནུས་ཀྱང་། མགོ་ཅན། འཕྱུལ་ཅན། འདོགས་ཅན་སོགས་ཀྱི་རྣམ་གཞག་མཛད་པས་མཐའ་གཅིག་ཏུ་སྲོག་ཅན་སྲོག་མེད་ཀྱི་དབྱེ་བ་དེ་བདེ་བའང་མ་ཡིན་ཞིང་འཇུག་པར་དཀའ་བ་དང་། དགོས་པ་ལྷག་པོར་མི་ཆེ་བས་དེ་ལྟའི་རྣམ་གཞག་མ་མཛད་དོ། །

サンスクリットで vyañjana（例：/ka/）[74]は命を有する要素（srog can, 例：/a/）と命を持たない要素（srog med, 例：/k/）の二つに区分されるが、そこでの「命」（srog）というのは必ず母音（dbyangs）のことであるので、命を伴わない単独の/k/などは発声不可能なものであることになる。チベット語においても例えば legs（「良い」）という〔語形〕は、/l/音に/e/を導入した後、命を伴わない/g/と/s/を結合したものであるなどというように、ある部分では同じ論理を適用可能であるが、〔文字に関しては〕有頭字・後置字・有足字などの画定を〔トゥミは〕制定しているのであるから[75]、必ずしも命を有する要素と命を持たない要素に区分するのは有効ではないし、適用困難であり、特に大きな必要性もないので、それと同じような画定を〔トゥミは〕制定しなかった。

[221.112.4]

དེ་བས་ན་བརྗོད་དུ་མེད་པའི་སྲོག་མེད་རྐྱང་པ་འདིར་མི་འདོད་ཅིང་ཨ་ཡིག་དེ་ཀ་ལ་སོགས་པར་ཞུགས་པའི་ཐ་སྙད་བྱར་མེད་པས་དེས་དེ་དག་ལ་ཨཱ་ལིའི་བྱ་བ་གསལ་བར་བྱེད་མ་ནུས་པའི་ཕྱིར་ཀཱ་ལིའི་སྡེ་ཚན་དུ་འདྲེན་པར་མཛད་པ་ཡིན་ནོ། །

そのような理由で、発声不可能な命を持たない単独の〔/k/など〕はここ（チベット語）では認められず、「/ka/などの中に/a/音が入っている」という言説も成り立たないので、その〔ཨ་という文字〕がそれら（/k/など）に対して a 系列音の機能を表示することはできない。それゆえ〔トゥミは ཨ་を〕ka 系列の部類の中に導き入れたのである。

[221.112.5]

འོ་ན་མཁན་པོས་ཡི་གེ་སྲོག་མེད་ཀྱི་རྣམ་གཞག་མ་མཛད་ན། འོག་ཏུ་དེ་ལ་ཨཱ་ལི་བཞི་པ་སྦྱར་སོགས་ཇི་ལྟར་འགྲེལ་ཅེ་ན། དེ་ནི་སྲོག་མེད་ལ་ཨཱ་ལི་ཞུགས་པའི་དོན་མ་ཡིན་གྱི་ཀཱ་ལི་དེ་དག་ཉིད་ལ་ཇ་ཏུ་སོགས་སྦྱར་བའི་དོན་ཡིན་ཏེ། གི་གུ

[74] シトゥは vyañjana を子音そのものとはみなさず、母音/a/を含んだ/ka/などのことであると理解している。

[75] 母音/e/あるいはそれを表記する母音記号 ེ（-e）は、それ自体では発声不可能な子音/l/に「命」（srog）を吹き込む働きを持つのだと言えなくもないが、全ての頭字・足字・後置字・再後置字に関して同じ理論を適用するのは難しい。そのため、チベット語・チベット文字に関しては、子音（例：/k/）と母音（例：/a/）の組み合わせが文字で表記されるといった単純な理論は成り立たないとシトゥは考える。

ཞབས་ཀྱུ། འགྲེང་བུ། ན་རུ་བཞི་ལ་ཨི་ཨུ་ཨེ་ཨོ་བཞིར་བཏགས་པའི་ཕྱིར་དང་དེ་དག་གིས་ཀ་ལྟ་བུའི་སྒྲའི་ངོ་བོ་དེར་ཀི་ཀུ་ཀེ་ཀོ་སོགས་སྒྲའི་ཁྱད་པར་སྐྱེད་ནུས་པས་ཨཱ་ལིའི་བྱ་བ་གསལ་བར་མཛད་ནུས་པ་ཙམ་ལ་དགོངས་ནས་ཨཱ་ལིའི་སྒྲར་ཡང་གསུངས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

（反論：）ならば、作者〔トゥミ〕は命を持たない要素（/k/など）についての画定を作らなかったことになるが、もしそうならば、後に現れる「それに第四の a 系列を結びつけた、云々」[v. 7][76] という文言はどのように解釈されるのか。（答：）それは命を持たない要素（/g/など）に a 系列音（/o/）を導入するという意味ではなく、まさにそれらの ka 系列文字に母音記号ナル（rna ru）（ོ）（-o）などを結びつけるという意味である。なぜなら、キク（gi gu,「湾曲したもの」-i）、シャプキュ（zhabs kyu,「足枷」-u）、デンプ（’greng bu,「立ち上がったもの」-e）、ナル（rna ru、「カモシカの角」-o）という四つ〔の母音記号〕を〔トゥミは〕ཨི、ཨུ、ཨེ、ཨོ と呼称するからであり、それらは例えば/ka/という音節そのものに、/ki/、/ku/、/ke/、/ko/などといった音声の差異化をもたらすことができるので、a 系列音の機能を顕示することができるということだけをお考えになって、〔トゥミは四つの母音記号を〕a 系列〔記号〕という名称でも呼ぶからである。

[221.112.6]

དེས་ན་ཀཱ་ལི་སུམ་ཅུ་པ་ལ་ཨཱ་ལི་དང་པོ་སྦྱར་བས་ཨི་ཡིག་ཏུ་འགྲུབ་པ་སོགས་ཡིན་པས་དེ་དག་གི་ཨ་ཡིག་ནི་བརྗོད་དོན་རྗེས་འབྲེལ་དུ་བྱས་པའི་ཕྱིར་དབྱི་བར་བྱ་བ་ཉིད་དོ། །

したがって、三十番目の ka 系列文字（ཨ་）に一番目の a 系列記号（ ི ）を結びつけることによって〔ཨ་は〕ཨི་ として成立するなどといったことになる。それゆえ、それらの〔ཨི་、ཨུ་、ཨེ་、ཨོ་ に含まれる〕ཨ་ という文字は発声のための指標辞（rjes ’brel, *anubandha）とされたものなので、必ずゼロ化されるべきである[77]。

[221.112.7]

འདིར་ཁ་ཅིག་གི་གུ་ལ་སོགས་པ་ཁོ་ན་འདིར་བསྟན་གྱི་ཨཱ་ལི་ཡིན་ན་དེ་དབྱངས་ཡིག་མ་ཡིན་པར་འགྱུར་ཏེ། དབྱངས་ནི་ང་རོའི་རྣམ་པ་ཅན་ཡིན་ཞིང་དེ་དག་ནི་གསལ་བྱེད་གཞན་ལ་མ་ལྟོས་པར་འདོན་དུ་མེད་པའི་ཕྱིར་ཞེས་དོགས་པ་སྐྱེ་བ་སྲིད་ཀྱང་སྐྱོན་མེད་དེ། དངོས་སུ་འདིར་ཨཱ་ལི་སྲོག་ཞུགས་ཀྱི་རྣམ་གཞག་མ་མཛད་ཀྱང་མཚོན་བྱེད་འདི་ཙམ་ལ་བརྟེན་ནས་དབྱངས་ཀྱི་བྱ་བ་གསལ་བར་མཛད་ནུས་པ་ལ་དགོངས་པའི་ཕྱིར་དང་། དེ་ལྟ་མ་ཡིན་ན་ལེགས་སྦྱར་ལྟར་ཨ་ཨི་འདུས་པས་ཨེ་སོགས་སུ་འགྱུར་བར་ཁས་ལེན་དགོས་པའི་སྐྱོན་ཡང་ཡོད་པའི་ཕྱིར་རོ། །

ここである者には次のような疑問が起こるかもしれない。（疑問：）単独のキク（ ི ）などがここに言及される a 系列に等しいならば、それは母音記号（dbyangs yig）ではないことになる。なぜなら、そもそも母音というものは音声（nga ro, *svara）という形を取るもの[78]であるのに対し、それら（ ི などの記号）は子音等表記文字（gsal byed）という他要素に依拠せずには発声不可能だからである。（答：）過失はない。なぜなら〔トゥミは〕明証的には本書の中で、命が入った a 系列記号（ཨི་ など）に関する規則を定めていないが、今の例によって〔後の箇所でも a 系列記号は〕母音の機能を表記したものであると示すことができるとお考えになっているからである。さもな

[76]完結助詞（slar bsdu ba）の形成に関わる規則である。完結助詞は གོ་、ངོ་、བོ་、མོ་、དོ་、ནོ་、འོ་、རོ་、ལོ་、སོ་ という十のものである。トゥミの説明によれば、これらは後置字として機能する十の文字のそれぞれに、/-o/を表記するための母音記号ナル（もしくはナロともいう）を結びつけたものである。

[77]例えば『三十頌』第 4 詩節に ཨི་ という語が現れる。これは母音記号キク（-i）を表すための代用物であるので、厳密には ཨི་ ではなく ི として理解されるべきである。

[78]音声としての母音（dbyangs）は子音と結合していなくても、それ自体で発声可能なものである。

ければ、サンスクリットの場合と同じように「ཨ་ と ཨི་ の結合によって ཨེ་ になる」[79]などと認めなければならないという過失もあるからである。

[221.112.8]

དེ་ལྟར་གཞུང་འདིའི་སྐབས་སུ་ཡི་གེ་བསྡུ་ཚུལ་ཙམ་དུ་མ་ཟད་གསལ་བྱེད་ཅེས་པ་ལའང་མང་པོས་འབྲུ་གནོན་ལོག་པར་བྱས་འདུག་པས་ཁོ་བོས་ལེགས་པར་བཤད་པ་འདི་ནི་སྣང་བྱེད་ཀྱི་ཉི་མ་ཆེན་པོ་ལྟར་བསྟེན་པར་འོས་སོ། །

以上のことから、本書の当該箇所においては、文字の結合法に関してだけでなく、gsal byed「表記」という言葉に関しても、多くの人々が誤った仕方で語釈を施しているのであるから、明るく照らす偉大な太陽を崇拝するようにして、私のこの正しい解釈を崇拝するが良い。

[221.12]

གཉིས་པ་ཁྱད་པར་གྱི་དབྱེ་བ་བསྟན་པ་ལ།　མདོར་བསྟན་པ་དང་།　རྒྱས་པར་བཤད་པ་གཉིས།

第二「個別の区分に関する説示」について二点ある。[221.121] 概説、[221.122] 詳説。

[221.121]

དང་པོ་ནི།

> དེ་ལ་རྗེས་འཇུག་བཅུ་ཡིན་ཏེ། །
> དེ་ལས་ལྔ་ནི་སྔོན་དུའང་འཇུག　།མི་འཇུག་པ་ནི་ཉི་ཤུའོ། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།　བཤད་མ་ཐག་པའི་ཡི་གེ་ཀཱ་ལི་དེ་དག་ལ་དབྱེ་ན་རྗེས་སུ་འཇུག་པ་བཅུ་དང་།　རྗེས་འཇུག་དེ་ཉིད་ལས་ལྔ་ནི་སྔོན་དུའང་འཇུག་པ་ཡིན་པས་སྔོན་འཇུག་ལྔ་དང་།　སྔོན་རྗེས་གཉིས་ཀར་མི་འཇུག་པའི་ཡི་གེ་ཉི་ཤུ་སྟེ་ཚན་པ་གསུམ་དུ་དབྱེའོ། །

第一（概説）は以下の通りである。

> それらの内、後置字は十ある。その内の五つは〔基字の〕前にも起こる。〔基字の前後のいずれにも〕起こらないものが二十ある[80]。**[4d–5ab]**

直前に説かれたそれらの ka 系列文字を区分すると、後置字が十あり、まさにその十の後置字の中の五つは〔基字の〕前にも起こるものであるので、前置字が五あり、〔基字の〕前後のいずれにも起こらない文字が二十ある。このように三つの部類に区分される。

[221.122]

གཉིས་པ་རྒྱས་བཤད་ལ་དབྱེ་སྒོ་སྤྱིར་བསྟན་པ་དང་།　བྱེ་བྲག་སོ་སོར་བཤད་པ་གཉིས།

第二「詳説」について二つ点ある。[221.122.1] 区分の観点に関する一般的説明、[221.122.2] 各種に関する個別的説明。

[221.122.1]

---

[79] サンスクリットの母音連声（サンディ）の規則によれば、/a/と/i/の結合によって/e/という音が成立する。しかし、チベット文字の ཨ་ と ཨི་ の結合から ཨེ་ という文字は生まれない。シトゥはこの点に注意を喚起することで、『三十頌』の主題が音声論ではなく文字論であることを示そうとしている。

[80] 稲葉 (1986: 321) は「その〔子音文字〕を〔分類すれば、〕添後字は十である。その〔添後字〕中、五は前へ添辞する。添辞しない〔文字〕は二十である」と訳す。

[221.122.11]

དང་པོ་ནི།

ཀཱ་ལི་ཕྱེད་དང་བརྒྱད་སྡེ་ནི། །བཞི་བཞི་དག་ཏུ་ཕྱེ་བ་ལས། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第一（区分の観点に関する一般的説明）は以下の通りである。

半群を含む八群の ka 系列文字は四文字ずつに区分されることから[81]、[5cd]

[221.122.12]

རྗེས་འཇུག་ལ་སོགས་པར་དབྱེ་བའི་ཐོག་མར་སྡེ་པ་སོ་སོར་ངེས་པར་བྱ་དགོས་པས། ཀཱ་ལི་དེ་རྣམས་སྡེ་པ་ཕྱེད་དང་བརྒྱད་དུ་བགོས་པའི་སྡེ་པ་རེ་རེ་ལ་ཡི་གེ་བཞི་བཞིར་དབྱེ་བ་ཡིན་ཞིང་། དེའང་ཀ་ཁ་ག་ང་སྡེ་པ་དང་པོ་སོགས་ནས། ཧ་ཨ་སྡེ་པ་ཕྱེད་པའི་བར་དུ་སོ་སོའི་མིང་ཤེས་པར་བྱའོ། །

後置字などへの区分を行なう前に、文字群をそれぞれ確定せねばならないので、それらの ka 系列文字を、半群を含む八群（ka 群、ca 群、ta 群、pa 群、tsa 群、zha 群、ra 群、ha 群）に分け、各群につき四文字ずつ（ただし最後の半群のみ二文字）に区分し、さらにそれについて ཀ་ཁ་ག་ང་ という第一群をはじめとし、ཧ་ཨ་ という半群までの各群の名称を知るべきである。

[221.122.13]

ལས་ཞེས་པ་ནི། དབྱེ་བ་བྱས་པ་འདི་ལས་འོག་ཏུ་དང་པོ་གསུམ་པ་སོགས་ཀྱི་སྐབས་སུ་སོ་སོའི་ཡི་གེ་རྣམས་དྲན་པར་བྱའོ་ཞེས་པའི་དོན་ཏེ་འབྱུང་ཁུངས་དང་འདྲ་བའི་རྒྱུ་མཚན་གྱི་སྒྲའོ། །

ལས་ las「～から」という語は、〔ka 系列文字の〕区分をしている本詩節に続けて「第一群」や「第三群」などという場合にそれぞれの文字を想起するべきであるという意味であり、〈起点〉に近似するが〈理由〉を表す語である。

[221.122.2]

གཉིས་པ་བྱེ་བྲག་སོ་སོར་བཤད་པ་ལ། རྗེས་འཇུག་བཤད་པ། སྔོན་འཇུག་བཤད་པ། མི་འཇུག་པ་བཤད་པ་གསུམ།

第二「各種に関する個別的説明」について三点ある。[221.122.21] 後置字の説明、[221.122.22] 前置字の説明、[221.122.23] 不置字の説明。

[221.122.21]

[221.122.211]

དང་པོ་ནི།

དང་པོ་གསུམ་པ་བཞི་པ་ཡི། །མས་གཉིས་དྲུག་པའི་གསུམ་པ་དང་། །
བདུན་པ་ལ་ནི་ཤ་མ་གཏོགས། །རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་རུ་འདོད། །

---

[81]稲葉 (1986: 322) は「子音が七群〔に分たれる〕といふことは、各々四〔字〕づつに分たれるといふことであるから」と訳す。

ཅེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第一（後置字の説明）は以下の通りである。

> 第一群・第三群・第四群のそれぞれの後半二つ（ག་ང་ད་ན་བ་མ་）と、第六群の第三番目（འ་）と、第七群の中で ཤ་ 以外のもの（ར་ལ་ས་）が十の後置字として認められる[82]。**[6]**

[221.122.212]

གོང་དུ་རྗེས་འཇུག་བཅུ་ཞེས་བཤད་པ་དེ་གང་ཞེ་ན། སྡེ་པ་དང་པོ་དང་གསུམ་པ་དང་བཞི་པ་རྣམས་ཀྱི་མཐས་ཀྱི་ཡི་གེ་གཉིས་གཉིས་ཏེ། ག་ང་ད་ན་བ་མ་རྣམས་དང་། སྡེ་པ་དྲུག་པའི་གསུམ་པ་འ་དང་། བདུན་པའི་ཤ་མ་གཏོགས་པའི་ལྷག་མ་ར་ལ་ས་གསུམ་མོ། །དེའང་ཡི་གེ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་རྗེས་སུ་འདི་དག་འཇུག་པའི་ཕྱིར་རྗེས་འཇུག་ཅེས་བྱ་ཞིང་ཡི་གེའི་གྲངས་བཅུ་ཉིད་དུ་ངེས་པ་ཡིན་ནོ།

（問：）上に後置字は十あると説かれているが、それらは何であるか。（答：）第一群・第三群・第四群のそれぞれの後半二つの文字、すなわち ག་ -g、ང་ -ng、ད་ -d、ན་ -n、བ་ -b、མ་ -m と、第六群の第三番目である འ་ -’(a) と、第七群の中で ཤ་ -sh 以外のもの、すなわち ར་ -r、ལ་ -l、ས་ -s の三つである。そして、これらは全ての文字の後（rjes）に起こる（’jug）ので「後置字」（rjes ’jug）と呼ばれ、その文字の数はまさに十であることが確定している。

[221.122.22]

[221.122.221]

གཉིས་པ་སྔོན་འཇུག་བཤད་པ་ནི།

> རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་ཉིད་ལས། །དང་པོ་གསུམ་པ་ལྔ་པ་དྲུག །
> བདུན་པ་རྣམས་ནི་སྔོན་དུའང་འཇུག །

ཅེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第二「前置字の説明」は次の通りである。

> まさにその十後置字の中の第一（ག་）、第三（ད་）、第五（བ་）、第六（མ་）、第七（འ་）は〔基字の〕前にも起こる[83]。**[7abc]**

[221.122.222]

གོང་དུ་སྔོན་འཇུག་ཅེས་པ་གང་ཞེ་ན། རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་དེ་ཉིད་ལས། དང་པོ་ག་གསུམ་པ་ད། ལྔ་པ་བ། དྲུག་པ་མ། བདུན་པ་འ་རྣམས་ཡིན་ཞིང་དེ་དག་རྗེས་སུ་འཇུག་པར་མ་ཟད་ཡི་གེ་རྣམས་ཀྱི་སྔོན་དུ་འཇུག་པའང་སྲིད་པས་སྔོན་འཇུག་ཅེས་ཀྱང་བྱ་སྟེ་ཡི་གེའི་གྲངས་ལྔར་ངེས་པ་ཡིན་ནོ། །སྔོན་རྗེས་འདི་དག་གི་འཇུག་ཚུལ་ནི་རྟགས་འཇུག་གིས་རྒྱས་པར་འཆད་པར་འགྱུར་རོ། །

（問：）先に「前置字」と呼ばれていたものは何であるか。（答：）まさにその十後置字の中の第一 ག་ g-、第三 ད་ d-、第五 བ་ b-、第六 མ་ m-、第七 འ་ ’-である。それらは〔基字の〕後に起こるだけで

---

[82]稲葉 (1986: 323) は「第一〔群〕と第三〔群〕と第四〔群〕との後の二（ག, ང, ད, ན; བ, མ）と、第六〔群〕の第三番目（འ）と、第七〔群〕の中で ཤ を除いたもの（ར, ལ, ས）とを、十添後字であると認定する」と訳す。

[83]稲葉 (1986: 323) は「十添後字の中、第一（ག）と、第三（ད）と、第五（བ）と、第六（མ）と、第七（འ）とは前へも添接する」と訳す。

なく、基字の前（sngon）に起こる（’jug）こともあるので、「前置字」（sngon ’jug）とも呼ばれ、その文字の数は五であることが確定している。これらの前置字と後置字の適用方法については『性入法』で詳しく説明するであろう。

[221.122.23]

གསུམ་པ་མི་འཇུག་པ་བཤད་པ་ལ། དངོས་དང་། སྐབས་དོན་གྱི་མིང་གཞི་ཁྱད་པར་དུ་བཤད་པ་གཉིས།

第三「不置字の説明」について二点ある。[221.122.231] 本文の提示、[221.122.232] 関連の主題である基字についての個別的説明。

[221.122.231]

[221.122.231.1]

དང་པོ་ནི།

> མིང་གཞི་གཉིས་སམ་གསུམ་སྦྲེལ་ལམ། །
> དེ་ལ་དབྱངས་ཀྱི་བཞི་ལྡན་ཡང་། །གང་དུའང་འཇུག་མིན་སྦྱོར་བའང་མིན། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏོ།

第一（本文の提示）は以下の通りである。

> 基字としてのみ使用可能な文字を二つ結合したもの、三つ結合したもの、あるいはそこに母音記号を加えて四つ組にしたものは決して使用されず、その結合は理に叶うものでもない[84]。
> **[7d–8ab]**

[221.122.231.2]

སྔོན་འཇུག་དང་རྗེས་འཇུག་བསལ་བའི་ལྷག་མ་མིང་གཞི་ཁོ་ན་ཡིན་པ། ཀ་ཁ། ཅ་ཆ་ཇ་ཉ། ཏ་ཐ། པ་ཕ། ཙ་ཚ་ཛ་ཝ། ཞ་ཟ་ཡ། ཤ། ཧ་ཨ་སྟེ་ཡི་གེ་ཉི་ཤུ་ཐམ་པ་དེ་དག་ནི་ཚེག་བར་གཅིག་ཏུ་གཉིས་སམ་གསུམ་སྦྲེལ་བའམ་དེ་ལ་དབྱངས་ཨི་སོགས་གང་རུང་རེ་སྦྱར་བས་བཞི་ལྡན་དུ་བྱས་པ། ཙཀ། ཚཕཁ། ཐཟིཡ། ལྟ་བུ་གངས་ལྗོངས་སུ་གྲགས་པའི་ཐ་སྙད་གང་ལའང་འཇུག་པ་མིན་པས་འདི་བཞིན་སྦྱོར་བར་རིགས་པའང་མ་ཡིན་ནོ། །

前置字および後置字〔として使用可能な文字〕を除いた残りのものは、基字としてのみ使用可能な文字（ming gzhi kho na yin pa）である。すなわち、ཀ་ ka、ཁ་ kha、ཅ་ ca、ཆ་ cha、ཇ་ ja、ཉ་ nya、ཏ་ ta、ཐ་ tha、པ་ pa、ཕ་ pha、ཙ་ tsa、ཚ་ tsha、ཛ་ dza、ཝ་ wa、ཞ་ zha、ཟ་ za、ཡ་ ya、ཤ་ sha、ཧ་ ha、ཨ་ a という二十の文字である。それらを一つの点字間（tsheg bar）の中で、二つあるいは三つ結合したものや、そこに ི（-i）をはじめとするいずれかの母音記号を結合して四つ組にしたもの、例えば *ཙཀ་、*ཚཕཁ་、*ཐཟིཡ་ といったものは、チベットで知られるいかなる言語表現においても使用されないので、このような結合は理に叶うものでもない。

[221.122.232]

[221.122.232.1]

[84] 稲葉 (1986: 324) は「〔前後字添接する以外のほかの〕基本が二つまたは三つ結合せられ、或はその〔結合せられた〕ものに母音の四を有せしめても〔それは〕如何なる〔言葉〕としても用ひられない〔から〕結合せられることは全く〔正しく〕ない」と訳す。

གཉིས་པ་ནི། སྤྱིར་གཞུང་འདིའི་སྐབས་སུ་སྔོན་རྗེས་མིང་གསུམ་གྱིས་ཕྲལ་ཕྱེ་བའི་མིང་གཞི་ཞེས་བྱ་བ་ནི་སྔོན་རྗེས་ཀྱི་འཇུག་པའི་ཡི་གེ་རྣམས་གང་ལ་འཇུག་པར་འགྱུར་བ་དེ་ལ་དེ་ལྟར་བཏགས་པས་གསལ་བྱེད་སུམ་ཅུ་ཐམས་ཅད་མིང་གཞིར་འགྱུར་མོད་ཀྱི། འོན་ཀྱང་གནས་སྐབས་ཀྱི་དབྱེ་བ་ཡོད་དེ་དཔེར་ན་བསྒྲུབས་ཞེར་བ་ལྟ་བུའི་ཚེ་བརྩེགས་མའི་ས་ག་ར་གསུམ་ནི་སྔོན་འཇུག་བ་དང་། རྗེས་འཇུག་བ་ས་དག་གི་འཇུག་ཡུལ་དུ་གྱུར་པའི་ཕྱིར་མིང་གཞིའི་ཐ་སྙད་ཐོབ་ཅིང་། རབ་ལྟ་བུ་ལ་ར་ཡིག་མིང་གཞི་བ་ཡིག་རྗེས་འཇུག་དང་བར་ལྟ་བུ་དེ་ལས་བཟློག་པའང་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

第二（関連の主題である基字についての個別的説明）。概して本書（『三十頌』）の場合には、前置字・後置字・基字の三つに区分した時の基字（ming gzhi）というのは、およそ何であれ前置字と後置字が導入される先の文字をそのように命名しているのである。それゆえ、全ての三十の子音等表記文字（gsal byed, ཀ་ など）が基字になり得るが、場合に応じた分析が成り立つ〔ので注意せねばならない〕。なぜなら、例えば བསྒྲུབས་ bsgrubs という例では、ས་ s-、ག་ g-、ར་ -r-の三つからなる結合文字（སྒྲ་ sgra）は、前置字 བ་ b-と後置字 བ་ -b および ས་ -s の導入先となっているので「基字」という名称を得ており、རབ་ rab という例の場合には ར་ ra という文字が基字で བ་ -b という文字が後置字であり、それを反転させた བར་ bar という例もそのようになる（བ་ ba が基字で ར་ -r が後置字となる）からである。

[221.122.232.2]

ཡང་བསྒྲུབས་ཞེར་བ་ལྟ་བུའི་ཨུ་ཡིག་སོགས་ཨཱ་ལི་བཞི་པོ་རྣམས་ནི་མིང་གཞིར་འོས་ཀྱང་འདིར་དབྱངས་སྲོག་ཞུགས་ཀྱི་རྣམ་གཞག་མ་མཛད་པའི་ཕྱིར་དེ་འདྲའི་ཐ་སྙད་བྱར་མེད་པས་ཨུ་ཡིག་སོགས་ཀྱི་སྒྲས་གསུངས་པའི་ཞབས་ཀྱུ་ལ་སོགས་པ་དེ་རྣམས་འཕུལ་རྟེན་འཇུག་ཡུལ་གྱི་མིང་གཞིའི་ཡན་ལག་ལས་དངོས་མིན་ཏེ། འདིར་བསྟན་གྱི་ཨཱ་ལི་རྐྱང་པ་ཡིན་ན་འཕུལ་རྟེན་གྱི་བྱ་བ་མི་འཇུག་པས་ཁྱབ་པའི་ཕྱིར་རོ། །

また、བསྒྲུབས་ bsgrubs という例における ◌ུ（-u）という〔母音〕記号のような四つの a 系列記号は、基字となるに値するものではあるが、本書で〔トゥミは〕命を伴う母音記号（dbyangs srog zhugs）についての画定を考えておられないので、そのような〔母音記号についての「基字」という〕表現はなし得ない。それゆえ、ཨུ་ という文字などの記号を用いて〔トゥミが実際に〕表そうとしているそれらシャプキュ（◌ུ）などは前置字と後置字（’phul rten）[85]の導入先となる基字の構成部分であるが、基字の本体ではない。なぜなら、本書で語られる〔子音等表記文字を伴わない〕単独の a 系列記号であれば、そこには決して前置字と後置字の働きが導入されることはないからである[86]。

[221.122.232.3]

དེས་ན་སྔོན་འཇུག་རྗེས་འཇུག་མིང་གཞི་ཅི་རིགས་པར་འགྱུར་བ་སྔོན་འཇུག་ལྔ་། རྗེས་འཇུག་མིང་གཞི་ཅི་རིགས་པར་འགྱུར་བ་རྗེས་འཇུག་བཅུ། མིང་གཞི་ཁོ་ན་ཡིན་པ་ལྷག་མ་མི་འཇུག་པ་ཉི་ཤུ་ཐམ་པ་སྟེ་གསུམ་དུ་དབྱེར་ཡོད་པ་ལས། ཕྱི་བྲག་འདིར་ནི་མི་འཇུག་པ་ཁོ་ན་འཆད་པའི་སྐབས་ཡིན་པའི་ཕྱིར་ཐམ་འདི་ཉིད་བཟུང་ནས་བཤད་ཟིན་ཏོ། །

それゆえ、〔第 7 詩節 abc 句に言及される〕「前置字」とは〔正確には〕前置字と後置字と基字のいずれにもなり得る文字のことであり、それらは五つ（ག་ད་བ་མ་འ་）ある。〔第 6 詩節に言及される〕「後置字」とは〔正確には〕後置字と基字のいずれかになり得る文字のことであり、それらは十のもの（ག་ང་ད་ན་བ་མ་འ་ར་ལ་ས་）がある。基字としてのみ使用可能なそれ以外の文字（ཀ་ཁ། ཅ་ཆ་ཇ་ཉ། ཏ་ཐ། པ་ཕ། ཙ་ཚ་ཛ་ཝ། ཞ་ཟ་ཡ། ཤ། ཧ་ཨ།）が「不置字」であり、それらは二十ある。このよう

[85]’phul とは五つの前置字のことであり、rten とは十の後置字のことである（*Tshig mdzod chen mo*, s.v. ’phul rten）。

[86]シトゥによれば、基字とは前置字や後置字の導入先となる要素のことであるが、母音記号シャプキュにそれらが導入されることはないので、母音記号は基字そのものではなく、基字の構成要素に過ぎない。

に三つに分類される内、特にここでは不置字のみについて説明される。そのような文脈に従って〔私シトゥは〕まさにこの最後のものを取り上げて説明した。

[221.122.232.4]

འདིར་ཁ་ཅིག་གོང་དུ། ཡི་གེ་ཐམས་ཅད་ལ་མིང་གཞིས་ཁྱབ་པར་བསྟན་པ་དང་འགལ་བར་དོགས་པ་སྲིད་ཀྱང་སྐྱོན་མེད་དེ། དེ་དག་ཏུ་ནི་སྤྱིར་ཡི་གེ་ཙམ་ལ་དགོངས་པས་ཡི་གེ་ཡིན་ན། ཡི་གེ་ཨཱ་ལི་ཀ་ལི་གཉིས། །ཞེས་པའི་སྐབས་ནས་བསྟན་པས་ཁྱབ་ཅིང་། དེ་ལས་འཇིག་རྟེན་འདི་ཉིད་ཀྱི་ཡི་གེ་ཡིན་ན་མཆོད་བརྗོད་གསུམ་པའི་སྐབས་ཀྱི་མིང་གཞི་ཡིན་པས་ཁྱབ་པ་དང་། མིང་གཞི་དེ་ནི་མིང་ཚིག་གི་གཞིར་གྱུར་པ་ལ་དགོངས་ཏེ། དཔེར་ན་བོད་ཡུལ་དུ་ཡི་གེ་རྣམས་ལས་འགྲེང་བུ་ཙམ་མེད་པས་ཀྱང་དེས་བརྗོད་པ་ཇི་སྙེད་ཡོད་པ་ཉམས་པར་འགྱུར་བས་ངེས་པར་ཡི་གེ་ཇི་སྙེད་པ་མིང་ཚིག་གི་གཞིར་དགོས་པ་བཞིན་ནོ། །

ここである者は、先程[87]の「全ての yi ge は ming gzhi である」(yi ge thams cad la ming gzhis khyab)[88]という言明と矛盾するのではないか、という疑念[89]を抱くかもしれないが、過失はない。それらの箇所では〔文字ではなく〕音節一般が意図されていたからである。およそ何であれ音節であれば、それは必ず「音節は a 系列音と ka 系列音の二つである」[v. 4a] という箇所に示されるところのものである。それに従うと、およそ何であれまさにこの世界にある音素(yi ge, *varṇa)であれば、それは必ず第三の敬礼文の箇所 [v. 2ab] で言われていたところの「基本音素」(ming gzhi)である。その場合の「基本音素」とは単語と文の基本となるものを意図している。例えばチベットでは、文章の中からデンプ(ེ -e)がなくなっただけでも、およそある限りの言語表現がそれによって壊れてしまうので、必ず全ての文字(yi ge)が単語と文の基本として必須であるのと同様である。

[221.122.232.5]

དེ་ལྟར་སྔོན་འགྲེལ་བྱེད་འགའ་སྟབས་ལེགས་ཀྱིས་སྐབས་འདིའི་མིང་གཞིའི་ངོས་འཛིན་ཙམ་འགྲིག་ཀྱང་དཔྱིས་ཕྱིན་པའི་ལེགས་བཤད་ནི་རུས་སྦལ་གྱི་སྤུ་ལ་འགྲན་ཟླར་སྣང་བའི་ཕྱིར་རང་སྟོབས་ཀྱིས་བཤད་པ་ཡིན་པས་བློ་ལྡན་རྣམས་དགྱེས་པའི་འཛུམ་ཞལ་ངོམ་པར་མཛོད་ཅིག །

以上のように、過去のある註釈者が〔示した〕ここでの基字の識別法のみについて言えば、それらは偶然にして整合性の取れたものとなっているが、究極的に正しい説明というのは亀の毛に等しい〔すなわち無に等しい〕と思われる。そのために〔私シトゥは〕自力で説明したのであるから、知者の皆様にはどうか喜びの笑顔を見せて頂きたい。

[221.2]

གཉིས་པ་སྦྱོར་ཚུལ་ཚིག་ཕྲད་ཀྱི་འཇུག་པ་བཤད་པ་ལ། རྗེས་འཇུག་ལ་ལྟོས་པའི་ཕྲད་རྣམ་དབྱེ་དང་བཅས་པ་དང་། ཕྲད་རང་དབང་ཅན་བཤད་པ་གཉིས།

第二「結合手段である助詞の機能に関する説明」について二点ある。[221.21] 後置字に依存する助詞と格についての説明、[221.22] 独立助詞の説明。

---

[87]第 2 詩節 ab 句に「最初に基本音素(ming gzhi)を発せられたサダーシヴァに敬礼する」と説かれ、註釈(211.311)で ming gzhi と yi ge は同義語であることが示されていた。

[88]全ての yi ge「音素」の領域を ming gzhi「基本音素」の領域が遍充(khyab)していると理解しても良い。音素と基本音素は同義であるので、この二つの概念は同円の関係にある。

[89]本書では yi ge という語が「音素」「音節」「文字」の三つの意味で使用され、ming gzhi という語が「基本音素」「基本文字」「基字」の三つの意味で使用される。ある人(kha cig)はそれらを混同し、yi ge thams cad la ming gzhis khyab という言明を「全ての文字は基字である」という意味で理解するのであろう。

[221.21]

དང་པོ་ལ། སླར་བསྡུ། ལ་དོན། ཨི་ལྡན་གྱི་རྣམ་དབྱེ། རྒྱན་སྡུད། ལྷག་བཅས། འབྱེད་སྡུད། འབྱུང་ཁུངས། བོད་པའི་སྒྲ་བསྟན་པ་སྟེ་བརྒྱད་དོ། །

第一（後置字に依存す る助詞と格についての説明）について八点ある。[221.211] 完結助詞の説明、[221.212] la don 助詞の説明、[221.213] -i を有する格助詞（属格助詞）の説明、[221.214] 累加副助詞の説明、[221.215] 接続助詞の説明、[221.216] 選択詞（区分・集約）の説明、[221.217] 奪格助詞の説明、[221.218] 呼びかけ表現の説明。

[221.211]

དང་པོ་ལ་དངོས་དང་། ལོག་རྟོག་སེལ་བའོ། །

第一（完結助詞の説明）について〔二点ある〕。[221.211.1] 本文の提示、[221.211.2] 誤解の排除。

[221.211.1]

[221.211.11]

དང་པོ་ནི།

> རྗེ་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་ནི། །མིང་གང་གི་ནི་མཐར་སྦྱར་བ། །
> དེ་ལ་ཨཱ་ལི་བཞི་པ་སྦྱར། །སླར་བསྡུ་བར་ནི་ཤེས་པར་བྱ། །

ཞེས་པས་བསྟན་ཏེ།

第一（本文の提示）は次の通りである。

> 十の後置字を任意の語の次に置き、そこに第四の a 系列記号を結合したものが完結助詞であると知るべきである[90]。**[8cd–9ab]**

[221.211.12]

སྔར་བཤད་པའི་རྗེས་འཇུག་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་དེ་རྣམས་ཉིད་མིང་ཚིག་གང་གི་མཐར་སྦྱར་བ་ཡོད་ཀྱང་རུང་། དེ་དག་ལ་ཨཱ་ལི་བཞི་པ་ཨོ་ཡིག་སྟེ་ན་རོ་སྦྱར་བ་ནི། སྐབས་བབ་ཀྱི་བརྗོད་བྱའི་དོན་ནམ་ཚིག་དེ་ཉིད་དེ་ཙམ་གྱིས་བསྡུ་བར་སོང་བས་སླར་བསྡུའི་སྒྲ་ཞེས་སམ་རྫོགས་ཚིག་ཅེས་ཀྱང་བྱའོ། །ཞེས་སོ། །

まさにその上述の十の後置字を、いかなる単語と文であっても構わないが、それらの次に置き、そこに第四の a 系列記号、すなわちナル記号 ˇ（-o）を結合したものが完結助詞（slar bsdu'i sgra）である。なぜなら、主題に適合した表示されるべきまさにその意味や言葉は、それのみによってまとめられている（bsdu bar song ba）からである。また、それはそれは終助詞（rdzogs tshig）とも呼ばれる。以上が詩節の意味である。

[221.211.13]

དེའང་གཞུང་འདིའི་དངོས་བསྟན་གྱི་དབང་དུ་བྱས་ན། གོ་ ངོ། བོ། མོ། དོ། ནོ། འོ། རོ། ལོ། སོ་སྟེ་བཅུ་པོ་ཉིད་ཡིན་ཡང་། ད་དྲག་གི་མཐར་ཏོ་འཐོབ་པས་བཅུ་གཅིག་ཏུ་འགྱུར་རོ། །

---

[90] 稲葉 (1986: 325) は「十添後字がいづれの語の末尾に結合せられる〔ときにも〕それに母語の第四（o）が結合せられたもの、〔それは〕「再摂」であると知るべきである」と訳す。

ただし、それは本書が直接語っている事柄に即して言えば、གོ་ go、ངོ་ ngo、བོ་ bo、མོ་ mo、དོ་ do、ནོ་ no、འོ་ ’o、རོ་ ro、ལོ་ lo、སོ་ so の十のみであることになるが、再後置字 ད་ -d で終わる項目（da drag）の次には ཏོ་ to が得られる[91]ので計十一となる。

[221.211.14]

འོ་ན་འདིར་ཏོའི་སྒྲ་མ་བསྟན་པ་ཅི་ཞེ་ན། གཞུང་འདི་གའི་ག་ཤམ་དུ། རྗེས་འཇུག་བཅུ་ཡི་དོན་ཤེས་ན། །ཞེས་དང་། རྗེས་འཇུག་སྦྱོར་བ་མཁས་པ་ན། །ཞེས་སོགས་ཀྱི་སྐབས་སུ་འཆད་པར་འགྱུར་བ་བཞིན་གཞུང་འདིས་གཙོ་བོར་རྗེས་འཇུག་གི་བྱ་བ་འཆད་པ་ཡིན་པའི་ཕྱིར། མིང་གཞི་རྐྱང་པའི་སྒྲ་གཙོ་བོར་གྱུར་པའི་ཕྲད་བདག་སྒྲ་ཙམ་ལས་གཞན་འདིར་མ་གསུངས་པ་ཡིན་ནོ། །

（問：）ならば、本詩節で ཏོ་ to の文字を示していないのはなぜか。（答：）本書の終結部の「十の後置字の意義を知るならば」[v. 25d]、「後置字の用法に熟練すれば」[v. 27c] などの箇所で説明されるように、本書は主に後置字の機能を説明するものであるから、基字としてのみ使用可能な文字を主とする助詞[92]については、本書では所有接尾辞（bdag sgra, པ་ および པོ་）にしか触れていないのである。

[221.211.15]

རྒྱུ་མཚན་དེས་སྐབས་འདིའི་ཏོའི་སྒྲ་གཅིག་པུར་མ་ཟད། ལྷག་བཅས་ཀྱི་ཏེ་དང་། འི་ལྡན་གྱི་ཡི་ཡིས། རྒྱན་སྡུད་ཀྱི་ཡང་། འབྱེད་སྡུད་ཀྱི་ཏམ། ལ་དོན་གྱི་ཏུ། རྣམས་ཀྱང་འདིར་མ་བསྟན་པའི་གནད་ཀ་ཤེས་པར་བྱ་ཞིང་། ཀྱི་ཀྱིས་ཀྱང་སྟེ་རྣམས་ནི་འཇུག་པའི་ཡི་གེ་དང་ལྷན་ཅིག་པའི་སྒྲ་གཙོ་བོར་གྱུར་པའི་ཕྱིར་འདིར་ཡང་གསུངས་པ་ཉིད་དོ། །

そうした理由から、今の論題と関係する ཏོ་ to という文字だけでなく、接続助詞 ཏེ་ te、-i を有する助詞（属格助詞）ཡི་ yi および ཡིས་ yis、累加副助詞 ཡང་ yang、選択詞 ཏམ་ tam、la don 助詞 ཏུ་ tu も本書で言及されないのだという重要な点を理解しなければならない。ただし、ཀྱི་ kyi、ཀྱིས་ kyis、ཀྱང་ kyang、སྟེ་ ste については[93]、導入される文字と共に起こる文字〔すなわち後置字〕[94]が主要素となっているので、本書でも必ず説かれるのである。

[221.211.16]

དེ་ལྟ་ན་ཁྱེད་རང་གིས་སྔར་འཇུག་པའི་ཡི་གེ་རྣམས་ཀྱང་འཕུལ་རྟེན་གྱི་ཡུལ་དུ་སྦྱོར་ཚེ་མིང་གཞི་ཉིད་དུ་ཁས་བླངས་པའི་ཕྱིར་འཕྲད་འདི་རྣམས་ལའང་མཐའ་རྟེན་འཇུག་པའི་རྒྱུ་མཚན་གྱིས་མིང་གཞི་ཉིད་དུ་ཐལ་བས་རྗེས་འཇུག་གི་བྱ་བར་མི་འགྱུར་རོ། །སྙམ་ན་སྐྱོན་མེད་དེ། རྗེས་འཇུག་གི་བྱ་བ་ཞེས་པ་ནི་རྗེས་འཇུག་གི་ཡི་གེ་བཅུ་པོ་དེ་ལ་བྱ་བ་འབྱུང་བ་ཙམ་གྱི་ཆ་ནས་ཡིན་གྱི། ཕྲད་སོགས་སུ་གྲུབ་ཟིན་ནས་མིང་གཞི་དང་རྗེས་འཇུག་གང་ཡིན་དཔྱད་པའི་ཆ་ནས་མ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་རོ། །

（反論：）ならば、あなたは先程、前置字や後置字として使用可能な文字（’jug pa’i yi ge）も前置字や後置字の導入先（’phul rten gyi yul) として使用される時には必ず基字となる[95]と認めているか

---

[91]例えば ཀྱུརད་（言語改訂法の制定後は ཀྱུར་ と表記）の後に置かれる完結助詞は ཏོ་ である（ཀྱུརད་ཏོ་ もしくは ཀྱུར་ཏོ་）。

[92]完結助詞 ཏོ་ を構成する ཏ་ という文字は、前置字・後置字・再後置字として使用されず、基字としてのみ使用可能な文字の一つである。

[93]ཀ་ もまた、ཏ་ と同じく、基字としてのみ使用可能な文字である。

[94]例えば属格助詞 ཀྱི་ は後置字 ད།　བ།　ས། の後に起こる。シトゥによれば、これらの後置字こそが適用される助詞を決定づける主要素（gtso bo）となる。

[95]例えば བ་ は前置字や後置字として使用可能な文字であるが、བང་ や བོད་ などにおいては བ་ が基字とし

ら、これらの助詞にも後置字（mtha' rten）が使用されているという理由により必ず基字であることになる[96]。それゆえ〔トゥミが説明しているのは〕後置字の機能ではないはずである。（答：）過失はない。なぜなら、後置字の機能というのは、それらの後置字となり得る十の文字に〔他の文字・母音記号との結合という形式的機能や、累加・接続・関係・選択などの意味的〕機能が起こるというだけの点から成り立つのであって、助詞などとして成立した後に基字と後置字のいずれであるかを考察する観点から成り立つのではないからである。

[221.211.17]

ད་དྲག་ཅན་གྱི་མཐར་ཏོ་ལ་སོགས་པ་འཐོབ་པའི་དོན་ནི། རྟགས་འཇུག་ཏུ། དེ་ཉིད་རང་གི་སྒྲ་མཐུན་པའི། །ཞེས་པའི་སྐབས་སུ་འཆད་པར་འགྱུར་བ་བཞིན་ཕྱིར་བཏང་རྗེས་འཇུག་ལ་ལྟོས་པའི་རྣམ་དབྱེ་དང་ཕྲད་རྣམས་ལ། སྦྱོར་ཡུལ་མིང་ཚིག་གི་མཐའ་དེ་དང་སྦྱར་བས་བརྗོད་པ་བདེ་ཞིང་སྒྲ་མཐུན་པ་ཡོད་ན་རྟགས་མཚུངས་ཉིད་སྦྱར་བར་བྱ་ཞིང་། དེ་ལྟ་བུ་མེད་ནའམ་ཡོད་ཀྱང་བརྗོད་མི་བདེ་ན་བརྗོད་བདེ་བ་གང་ཡིན་སྦྱར་བར་བྱ་བ་ཡིན་པ་དང་། དེ་དག་ཀྱང་འཇིག་རྟེན་གྱི་གྲགས་པའི་རྗེས་སུ་འབྲང་དགོས་པས་རྗེས་འཇུག་གཞན་རྣམས་རང་རང་ལ་ན་རོ་སོགས་སྦྱར་བར་རྟགས་མཚུངས་མིན་ཅི་རིགས་ཡོད་ཀྱང་བརྗོད་བདེ་བ་དང་གྲགས་ཤིང་གྲུབ་པའི་ཕྱིར་འོས་པ་ཡིན་ལ།

再後置字 ད་ -d を有する項目の後に ཏོ་ to などが起こる[97]とはいかなることかと言えば、その意味は次の通りである。『性入法』の「まさにその〔文字〕自身の音と一致する〔音を表す文字が導入される〕」[98]という箇所で説明されるように、一般的に後置字に依存する格助詞と〔非格〕助詞の場合には、導入先の単語や文の末尾と結合することによって発音しやすくなり、かつ同類音表記字（sgra mthun pa）が存在するという二つの条件を満たすならば、同性文字（rtags mtshungs）のみを結合するべきであるが、そのような〔同性文字〕が存在しない、もしくは〔同性文字が〕存在していても〔それを用いると〕発音しにくくなるという二つの条件のいずれかを満たすならば、任意の発音しやすい〔音を表記する文字〕を結合するべきである。さらに、それらについても世間一般の慣習には従うべきであるので、それ以外の後置字のそれぞれにナル記号 ོ（-o）などを結合すると性が一致するものと一致しないものが共にあるが、発音しやすいものであり、かつ流布しており確立しているのであれば、〔それらの使用は〕適切である。

[221.211.18]

ད་དྲག་ཅན། བསྟནད། གྱུརད། སྩལད། ལྟ་བུ་རྣམས་ལ་ཀློག་དག་པའི་དབང་གིས། རྗེས་འཇུག་གཉིས་ལས་ན་ར་ལ་རྣམས་ཀྱི་སྒྲ་ཤུགས་ཆེ་ཙམ་དང་དའི་སྒྲ་འབྱུང་བར་ཆ་བ་ཙམ་ལས་མི་གསལ་བའི་ཕྱིར། བསྟན་དོ། །བྱུར་དོ། །སྩལ་དོ། །བསྟནད་དམ། གྱུརད་དམ། ཚིགད་དམ། ལྟ་བུ་ནི་བརྗོད་བདེ་བའང་མ་ཡིན་ཞིང་ཡོངས་སུ་མ་གྲགས་པས་བརྗོད་བདེ་རྟགས་མཚུངས་གཉིས་ཀའི་སྒོ་ནས་སྒྲ་མཐུན་པ་ནི་ཏོ་དང་ཏམ་སོགས་ཁོ་ནར་ངེས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

བསྟནད་ bstand、གྱུརད་ gyurd、སྩལད་ stsald のような再後置字 ད་ -d を有する項目の場合には、正規の発音（klog dag pa）に従うと、後置される二つの文字（後置字と再後置字）の内、ན་ na、ར་ ra、ལ་ la という〔文字で表記される〕音（/n/, /r/, /l/）の力はやや強いが、/d/音が生じるとそれらは僅かにしか聞き取れなくなる。それゆえ、*བསྟན་དོ་ bstan do、*བྱུར་དོ་ byur do、*སྩལ་དོ་ stsal do、*བསྟནད་དམ་ bstand dam、*གྱུརད་དམ་ gyurd dam、*ཚིགད་དམ་ tshigd dam といったものは発音しにくく、広く流

て使用されている。

96 例えば選択詞 ཏམ་ には後置字 མ་ が使用されている。そこでは、後置字 མ་ の導入先となる ཏ་ が基字として機能している。

97 連声規則に従えば、再後置字 ད་ -d の後に完結助詞 དོ་ do が結合するべきではないかという疑問が起こり得る。

98 稲葉 (1986: 379) は「それら自らの〔性を一致し、或は音便によって〕連聲する」と訳す。

布した形でもないので〔適切でなく〕、発音のしやすさと性の一致という二つの観点から、同類音表記字は ཏོ་ to や ཏམ་ tam などのみに限定される。

[221.211.19]

སླར་བསྡུའི་ཕྲད་དེ་རྣམས་ཀྱི་དཔེར་བརྗོད་པའང་། རྟག་གོ །བཟང་ངོ་། །ཡོད་དོ། །ཡིན་ནོ། །སྒྲུབ་བོ། །བསམ་མོ། །བྱའོ། །འགྱུར་རོ། །སེལ་ལོ། །བྱས་སོ། །ཞེས་སོགས་འབྱམས་ཀླས་པ་ཉེ་གོ་བར་སླ་ཞིང་། ད་དྲག་ཅན་གྱི་མཐར་ཡང་། བསྟནད་ཏོ། །གྱུརད་ཏོ། །སྩལད་ཏོ། །ཕྱིནད་ཏོ། །འཛིནད་ཏོ། །ཞེས་སོགས་མང་དུ་འབྱུང་བ་རྣམས་སོ། །

そして、その完結助詞の具体例は རྟག་གོ་ rtag go、བཟང་ངོ་ bzang ngo、ཡོད་དོ་ yod do、ཡིན་ནོ་ yin no、སྒྲུབ་བོ་ sgrub bo、བསམ་མོ་ bsam mo、བྱའོ་ bya'o、འགྱུར་རོ་ 'gyur ro、སེལ་ལོ་ sel lo、བྱས་སོ་ byas so などであり、大抵は理解しやすい。さらに、再後置字 ད་ -d を有する項目の後に བསྟནད་ཏོ་ bstand to、གྱུརད་ཏོ་ gyurd to、སྩལད་ཏོ་ stsald to、ཕྱིནད་ཏོ་ phyind to、འཛིནད་ཏོ་ 'dzind to のように多くの所に現れる〔ཏོ་ to も完結助詞の具体例〕である。

[221.211.2]

[221.211.21]

གཉིས་པ་ནི། སྐབས་འདིར་འགྲེལ་བྱེད་སྔ་མ་ཁ་ཅིག་གིས་དེར་ཕྱིན་ཏོ་ལྟ་བུ་སླར་བསྡུ་དངོས་ཡིན་ཞིང་རྫོགས་ཚིག་ཀྱང་ཡིན་པ་དང་། རྟག་གོ་ལྟ་བུ་སླར་བསྡུ་ཙམ་པོ་བ་དང་། བྱའོ་སྙམ་ནས་བྱེད་དོ་ལྟ་བུ་ཙམ་པོ་བའི་ཁོངས་སུ་གཏོགས་ཙམ་ལས་དོན་དུ་དེའང་མིན་པར་འདོད་པ་ཞིག་འདུག་པ། དེ་ལ་འདི་འདྲི་བར་བྱ་སྟེ། བྱའོ་ཞེས་པའི་འོ་སྒྲ་བརྗོད་པའི་ཚེ་འོ་སྒྲ་དེས་གང་ཞིག་སྡུད་དགོས་པའི་དོན་དེ་བསྡུས་པར་སོང་ངམ་མ་སོང་། སོང་ན་སླར་བསྡུ་དང་རྫོགས་ཚིག་དངོས་མིན་ཞེས་བསྟད་པའི་རྒྱུ་མཚན་ཅི་ཞིག

第二（誤解の排除）。この箇所に関して昔の註釈者で次のように主張する者がいる。

> དེར་ཕྱིན་ཏོ་ der phyin to「そこに到達した」という〔例における ཏོ་ to 〕は一次的な完結助詞でありかつ終助詞であるが、རྟག་གོ་ rtag go「恒常的である」という〔という例における གོ་ go〕は二次的な完結助詞であり、他方、བྱའོ་སྙམ་ནས་བྱེད་དོ་ bya'o snyam nas byed do「実行しようと考えて実行する」という〔例における འོ་ 'o〕は二次的な完結助詞の部類の中に仮に含まれるのみであって、実質的にはそれですらない。

彼に次のことを問わねばならない。བྱའོ་ bya'o という〔文字列における འོ་ 'o が表す〕/o/ 音が発音された時、その/o/音によって完結されるべきその表示内容は完結しているのだろうか、それとも完結していないのだろうか。もし完結しているならば、〔འོ་が〕一次的な完結助詞と終助詞のいずれでもないという理由は何であるのか。

[221.211.22]

དེ་ལ་ལྟོས་ཤིང་འབྲེལ་བའི་ཚིག་དེ་མ་ཐག་ཏུ་འབྱུང་བས་སོ་ཞེ་ན། འོ་ན་ཁྱེད་ཀྱིས་སླར་བསྡུ་དངོས་ཀྱི་མཚན་གཞི་མཐའ་རྟེན་གྱི་རྫོགས་སོ་ལྟ་བུ་ལས་མང་དུ་མི་རྙེད་པར་འགྱུར་ཏེ། ཁྱེད་རང་གིས་རྫོགས་ཚིག་དངོས་སུ་ཁས་བླངས་པའི་དེར་ཕྱིན་ཏོ་ལྟ་བུ་ལའང་ཕྱིན་ནས་ཀྱང་ལྟ་བུའི་ཚིག་གཞན་སྦྲེལ་བའི་ཚེ་དེ་དངོས་མ་ཡིན་པར་འགྱུར་བ་སོགས་གཞུང་འདིར་བསྟན་གྱི་སླར་བསྡུའི་སྒྲའི་འཇུག་པ་ཕལ་མོ་ཆེ་སླར་བསྡུ་དངོས་མ་ཡིན་པར་འགྱུར་བའི་ཕྱིར་རོ། །ཡང་མ་སོང་ཟེར་ན་འོ་སྒྲ་ལ་ནུས་པ་མེད་པར་ཐལ་བའི་སྐྱོན་ཡོད་དོ། །

（反論：）それ（འོ་もしくは/o/）に依存し関係する表現（སྙམ་ནས་བྱེད་དོ་ snyam nas byed do）が直後に

起こるからである。（答：）ならば、あなたは一次的な完結助詞の具体例を 、終結部[99]を拠り所とする རྫོགས་སོ་ rdzogs so といった例の他にはあまり多く見出すことがないであろう。なぜなら、あなた自身が一次的な完結助詞として認める དེར་ཕྱིན་ཏོ་ der phyin to「そこに到達した」という例においても、ཕྱིན་ནས་ཀྱང་ phyin nas kyang「到達した後にも」といった後続の表現を接続する場合には、それは一次的な完結助詞ではないことになる、というようにして本書で語られる完結助詞のほとんどの使用例が一次的な完結助詞〔の例〕ではないことになるからである。また、もし〔/o/音によって表示内容は〕完結していないと言うならば、/o/音には〔文を完結させる〕能力がないことになってしまうという過失がある。

[221.211.23]

ཁོ་བོ་ནི་གཞུང་འདིར་བསྟན་གྱི་སླར་བསྡུ་སྨྲ་སྒོ་ནས་བཤད་པའི་ཟླ་སྡུད་དེང་སང་རྫོགས་ཚིག་ཏུ་གྲགས་པ་རྣམས་དོན་གཅིག་ཅིང་། བྱའོ་སྙམ་ནས་བྱེད་དོ་ལྟ་བུའི་འོ་སྒྲས་ཀྱང་སྙམ་རྒྱུའི་དོན་དེ་བསྡུས་ཤིང་རྫོགས་པར་གོ་ནུས་པས་སླར་བསྡུ་དངོས་ཡིན་ཏེ། དཔེར་ན་བརྡ་སྤྲོད་པའི་གཞུང་དུ།

གྲངས་ལས་རྫོགས་པ་ལ་ཌ་མ་དག་གོ །

ཞེས་པའི་རྐྱེན་གྱི་རྗེས་བིང་ཤ་ཏི་མ： ཞེས་པར་ཚིག་གྲོགས་ཨི་ཏི་བཱ་ཙྱཾ་ཞེས་པ་སྦྱར་བས་རྫོགས་ཚིག་དངོས་མིན་པར་མི་འགྱུར་བ་བཞིན་དང་། ཀ་རོ་མཱི་ཏི་ཙིནྟེ་ན་ཀྲི་ཡ་ཏེ། ཞེས་པར་ཡང་བྱ་ཚིག་སྔ་ཕྱི་དག་ཏིང་མཐའ་དངོས་ཡིན་པར་མཚུངས་པ་ལྟ་བུའོ། །ཞེས་འཆད་པར་བྱེད་དོ། །

私自身は以下のように説明しようと思う。本書で言及される slar bsdu「完結助詞（再起を［防いで］まとめる要素）」と、『言語の門』に説かれる zla sdud「完結助詞（同類項目をまとめる要素）」と、最近 rdzogs tshig「終助詞」として広く知られるものは同義である。བྱའོ་སྙམ་ནས་བྱེད་དོ་ bya'o snyam nas byed do「実行しようと考えて実行する」といった場合の/o/音によってもまた〔聞き手は〕その思考内容の終結を理解することができるので、〔その/o/音もしくはそれを表記する འོ་ という文字は〕一次的な完結助詞である。例えば文法学の論書（『カータントラ』）に

「数詞の後に序数の意味でḍa 接辞と ma 接辞が起こる。」[100]

という〔ように規定される ma〕接辞で終わる項目の後に、例えば viṁśatimaḥ「二十番目の」という〔語の後に〕、それと共起する表現 iti vācyam「〜と語られるべきである」を結びつけても、〔ma 接辞で終わる項目が〕一次的な序数表現（rdzogs tshig, *pūraṇa）でなくなるということはないのと同様である。karomīti cintayitvā karomi「私は実行しようと考えて実行する」（< karomīti cintena kriyate）[101]という表現においても、前後の二つの定動詞が共に本来的な定動詞接辞 tiṅ で終わる語形であるのと同じである。

[221.211.24]

ཡང་ཁ་ཅིག་གིས། རྗེས་འཇུག་བ་ཡིག་གི་རྗེས་སུ་པོ་དང་། ད་ས་དག་གི་རྗེས་སུ་ཏོ་སྦྱར་བར་འདོད་པ་དང་། ཁ་ཅིག་གིས། བ་ཡིག་འདས་ཚིག་དངོས་ཡིན་པའི་རྗེས་སུ་པོ་སྦྱར་བར་བཤད་མོད། སྔ་མས་ཞེན་དོན་རྟགས་མཚུངས་སྦྱར་ཡུལ་དུ་འདུག་ཀྱང་གོང་སློས་ལྟར་རྟགས་འཇུག་གི་དོན་དཔྱིས་ཕྱིན་པར་མ་རྟོགས་པས་རིགས་འགྲེ་ཐལ་ཆེས་པའི་སྐྱོན་དང་།

[99] チベット語で書かれた作品の終結部にしばしば རྫོགས་སོ་ 「終わり」という表現が現れる。

[100] KT 2.6.27: sāmkhyāyāḥ pūrane ḍamau |

[101] シトゥが提示するサンスクリット表現は文法的に破格である。ここではチベット語の bya'o snyam nas byed do「実行しようと考えて実行する」に合わせて、当該のサンスクリット文を karomīti cintayitvā karomi と訂正した上で理解した。

བྱས་ཏོ་ལྟ་བུ་ཤིན་ཏུ་བརྗོད་མི་བདེ་བ་ཚོགས་ཀྱིས་སྦྱར་བ་དོན་མེད་ཅིང་གྲགས་པ་ལས་ཧ་ཅང་བརྒལ་བའི་སྐྱོན་ཡང་ཡོད་དོ། །

さらにまた、ある者は「後置字 བ་ -b の後に པོ་ po が適用され、後置字 ད་ -d と ས་ -s の後に ཏོ་ to が適用される」と説明し、別のある者は「བ་ b- という文字〔で始まる〕一次的過去形（’das tshig dngos）の後に པོ་ po が適用される」と説明する。しかし、前者の意見は、同性の文字同士が結びつけられるということを意図したつもりかもしれないが、先述のような仕方で『性入法』の意味を完全には理解していないがために、同種の論理を過大に適用してしまうという過失に陥っている。བྱས་ཏོ་ byas to「実行した」というような非常に発音しにくい〔文字〕の強引な結合は無意味であるし、一般的慣習から甚だしく逸脱するという過失もある。

[221.211.25]

འདོད་པ་ཕྱི་མ་དེའང་རིགས་པ་མ་ཡིན་ཏེ། བ་ཡིག་གི་མཐའ་འདས་ཚིག་ཡིན་དུ་ཟིན་ཀྱང་དེ་ཉིད་དང་སྦྱར་བས་བརྗོད་བདེ་ཞིང་སྒྲ་མཐུན་པ་བ་ཡིག་ཨོ་ལྡན་ཉིད་ཡོད་བཞིན་དུ་གཞན་འཚོལ་བ་ལ་དགོས་པ་མེད་པའི་ཕྱིར། འདས་ཚིག་ཡིན་པ་ཤེས་པའི་ཆེད་དུའོ་སྙམ་ནའང་མི་འཐད་དེ། དེ་ལྟ་ན། རྡོ་བཅག་གོ ལྟ་བུ་ལའང་། བཅག་ཀོ ཞེས་སྦྱར་དགོས་པར་འགྱུར་བས་ཧ་ཅང་ཐལ་ལོ། །

後者の主張も合理的でない。なぜなら、བ་ b-という文字で始まる語形は過去形であるかもしれないが、まさにそれとの結合によって発音が容易となりかつ同類音〔の/ph/音を表記する〕བ་ ba という文字に ོ -o をつけたもの〔བོ་ bo〕があるにも関わらず、他のものを探し求めることには意味がないからである。「過去形であることを示すためである」というのも正しくない。もしそうであるならば、རྡོ་བཅག་གོ་ rdo bcag go「石を割った」という例についても、*བཅག་ཀོ་ bcag ko というように〔བཅག་ の後に ཀོ་ を〕結びつけねばならないことになるので、過大適用の過失となる。

[221.211.26]

ཡང་འགྲེལ་བྱེད་ཕལ་ཆེར་གྱིས། སླར་བསྡུའི་སྒྲ་འདི་རྣམ་དབྱེ་དང་པོའི་དོན་དུ་བཤད་ཀྱང་ཤིན་ཏུ་འཐད་པར་མ་མཐོང་སྟེ། རྣམ་དབྱེ་དང་པོའི་གཅིག་ཚིག་གིས་ནི་དོན་གྱི་ངོ་བོ་ཙམ་ལས་གཞན་མི་སྟོན་ལ། འདི་ནི་སྡུད་པའི་སྒྲ་ཡིན་པའི་ཕྱིར་དོན་གྱི་ལྡོག་པ་སྟོན་བྱེད་དུ་འགྱུར་བས་ཀྱང་ཁྱད་པར་ཆེ་ཞིང་། ཁྱོད་ལའོ། །འདི་ཡིས་སོ། །སློང་མོ་བར་རོ། །འབྱུང་ཁུངས་ནས་སོ། །བདག་གིའོ། །ཤིང་ལའོ། །རྟག་ཏུའོ། །ལྟ་བུ་གཉིས་པ་ལ་སོགས་པའི་རྣམ་དབྱེ་ཐམས་ཅད་ཀྱི་མཐར་ཡང་སླར་བསྡུ་སྦྱར་བ་ཡོད་པས། ཁྱོད་ལྟར་ན་དེ་རྣམས་ཀྱང་རྣམ་དབྱེ་དང་པོའི་དོན་ཅན་དུ་འདོད་དགོས་པའི་ཕྱིར་རོ། །

さらにまた、ほとんどの註釈者はこの完結助詞を第一格接辞（rnam dbye dang po）の意味を持つものとして説明するが、決して合理的であるとは思われない。理由は以下の通りである。第一格・単数形は事象そのもの（don gyi ngo bo tsam）を表示するのみで、それ以外のものを表示しないが、それに対してこれは〔単語や文を〕閉じる言葉（sdud pa’i sgra）であるので、事象の停止を表示する手段となる点でも大きな違いがある。また、ཁྱོད་ལའོ་ khyod la’o「あなたにである」、འདི་ཡིས་སོ་ ’di yis so「これによってである」、སློང་མོ་བར་རོ་ slong mo bar ro「托鉢僧にである」、འབྱུང་ཁུངས་ནས་སོ་ ’byung khungs nas so「源泉からである」、བདག་གིའོ་ bdag gi’o「私のである」、ཤིང་ལའོ་ shing la’o「木にである」、རྟག་ཏུའོ་ rtag tu’o「常にである」のように第二格接辞などの〔他の〕全ての格接辞の後にも完結助詞が適用されることがあるので、あなたの考えによるならば、それらも第一格接辞の意味を有するものとして認めねばならなくなる。

[221.211.27]

སྨྲས་པ།

ལེགས་ལེགས་ལྟར་སྣང་རྨོངས་བློའི་རྣམ་འགྱུར་གྱིས། །བདེན་བདེན་བཅོས་པའི་ཚིག་ཕྲེང་གསེར་འོད་ཅན། །
གསལ་གསལ་རིགས་པའི་ཞུགས་ཆེན་འདིས་རེག་ཚེ། །ངེས་ངེས་པི་ཏྟ་ལ་ཡི་རང་ཚུལ་བཟུང་། །
གཞན་ཟེར་མཆིང་བུའི་དུམ་བུ་མང་བསྡུས་ནས། །འཁྲིག་འཁྲིག་ཚིག་གི་སྲད་བུར་བརྒྱུས་ན་ཡང་། །
འཁྲུལ་མེད་རྣམ་དཔྱོད་ཟོང་གིས་ཉེར་བའི་བསྒྲུབས་པའི། །ལེགས་བཤད་དོ་ཤལ་འདི་དང་བསྡུན་དུ་ཅི། །
བློ་ནོར་གྱིས་ཕོངས་བླུན་རྒན་མུ་ཏོ་བའི། །ཚོགས་སུ་གང་ཞིག་བྲིམ་པ་མ་འཚལ་ཀྱང་། །
གཟུར་གནས་མཁས་པ་གནས་པའི་མདུན་ས་དེར། །རིགས་པའི་སྲང་གིས་ཡོན་ཏན་ལྗིད་ཤེས་འགྱུར། །

以下のことが述べられる。

とても優れた知に似て非なる[102]愚昧な知[103]の変容によって最高の真実として捏造された黄金の光を放つ一連の言葉は、とても明晰な論理[104]というこの強力な火に触れるならば、まさに必ず真鍮（pittala）という本来の姿を取る。

他人の話の受け売り（gzhan zer）という多くの贋作の宝石のかけらを収集し、実にもっともらしい表現という紐でつないでも、無謬の分析という財物で作り上げたこの妙説という首飾りとは比べようもない。

智慧という財産に乏しい老いた愚者という物乞い達の集会の中で何が施されたかは知らないが、公明正大な学者達がいるその集会に行けば、論理という秤によって美質の重さを知ることになるであろう。

略号と文献

(1) 一次資料

(1-1) インド撰述文献

A *Aṣṭādhyāyī* (Pāṇini): see Cardona 1997.

UT *Mahāyānottaratantraśāstra*: E. H. Johnston ed. *The Ratnagotravibhāga Mahāyānottaratantra-śāstra*. Patna: The Bihar Research Society. 1950.

KĀ III *Kāvyādarśa* Chapter 3 (Daṇḍin): see Dimitrov 2011.

KT *Kātantra* (Śarvavarman): J. Eggeling ed. *The Kātantra with the Commentary of Durgasiṃha*. Calcutta: Stephen Austin and Sons. 1874.

TS *Tattvasaṁgraha* (Śāntarakṣita): S. D. Sastri ed. *The Tattvasaṅgraha of Ācārya Śāntarakṣita with the Pañjikā Commentary of Ācārya Kamalaśīla*. Varanasi: Bauddha Bharati. 1997.

TS D *Tattvasaṁgraha* (Śāntarakṣita): Tibetan Sde dge ed. *Tshad ma* Ze. Tohoku No. 4266.

NMAA *Nāmamantrārthāvalokinī* (Lalitavajra): Tibetan Sde dge ed. *Rgyud* Khu. Tohoku No. 2553.

NS *Mañjuśrīnāmasaṁgīti*: see Davidson 1981.

NSṬ *Āryamañjuśrīnāmasaṁgītiṭīkā* (Mañjuśrīkīrti): Tibetan Sde dge ed. *Rgyud* Khu. Tohoku No. 2534.

---

[102]legs legs ltar snang「とても優れた知に似て非なる」。同音節反復（zung ldan, yamaka）の技法が用いられている。最初の四詩脚の冒頭全てに同音節反復が現れる。

[103]シトゥ以前の註釈者達の劣った知性を「とても優れた知に似て非なる愚昧な知」と表現している。

[104]gsal gsal rigs pa「とても明晰な論理」。本書『三十頌註』に展開される論理のことを指す。

PV *Pramāṇavārttika* (Dharmakīrti): Yūsho Miyasaka ed. “*Pramāṇavārttika-kārikā* (Sanskrit and Tibetan).” *Acta Indologica* 2: 1–206. 1971–72.

MMK *Mañjuśrīmūlakalpa*: T. Gaṇapati Sāstrī ed. *The Āryamañjuśrīmūlakalpa*. Trivandrum: The Superintendent Govt. Press. 1920.

MMK D *Mañjuśrīmūlakalpa*: Tibetan Sde dge ed. *Rgyud ’bum* Na. Tohoku No. 543.

ŚŚ *Śabdaśāstra*: Tibetan Sde dge ed. *Sna tshogs* Co. Tohoku No. 4351.

SDV *Satyadvayavibhaṅgakārikā* (Jñānagarbha): see Eckel 1987.

(1-2) チベット撰述文献

Mkhas pa’i kha rgyan *Bstan bcos mkhas pa’i kha rgyan* (Sa skya paṇḍita kun dga’ rgyal mtshan): *Dpal ldan sa skya pa’i bka’ ’bum (The Collected Works of the Founding Masters of Sa-skya)*, vol. 12 (na).

Gab pa mngon phyung *Dag yig rig pa’i gab pa mngon phyung* (Dpa’ ris sangs rgyas). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 1999.

’Grel chen *Sum cu pa dang rtags kyi ’jug pa’i gzhung gi rgyas ’grel mkhas pa’i mgul rgyan mu tig phreng mdzes* (Si tu paṇ chen chos kyi ’byung gnas). Xining: Mtsho sngon mi rigs dpe skrun khang. 2001.

Rgyal rab gsal ba’i me long *Rgyal rab gsal ba’i me long* (Bla ma dam pa bsod nams rgyal mtshan). Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 2002.

Tshig mdzod chen mo *Bod rgya tshig mdzod chen mo*: Krang dbyi sun ed. Beijing: Mi rigs dpe skrun khang. 1993.

Legs bshad snang byed *Lung du ston pa sum cu pa dang rtags kyi ’jug pa’i rnam ’grel legs bshad snang byed nor bu* (Rnam gling paṇ chen dkon mchog chos grags). Gangtok: Palace Monastery.

Gser tog sum rtags *Bod kyi brda’ sprod pa sum cu pa dang rtags kyi ’jug pa’i mchan ’grel mdor bsdus te brjod pa ngo mtshar ’phrul gyi lde mig* (Gser tog blo bzang tshul khrims rgya mtsho). In *Gser tog sum rtags* (pp. 14–204). Lanzhou: Kan su’u mi dmangs dpe skrun khang. 1981.

(2) 二次資料

(2-1) 欧文資料

Bacot, Jacques
1928 *Une grammaire tibétaine du tibétain classique: Les ślokas grammaticaux de Thonmi Sambhoṭa, avec leurs commentaires, traduits du tibétain et annotés*. Paris: Librairie Orientaliste Paul Geuthner.

Cardona, George
1997 *Pāṇini: His Work and Its Traditions. Vol. 1: Background and Introduction*. Second Edition. Revised and Enlarged. Delhi: Motilal Banarsidass.

Davidson, Ronald M.
1981 “The Litany of Names of Mañjuśrī: Text and Translation of the *Mañjuśrīnāmasaṃgīti*.” In *Tantric and Taoist Studies in Honour of R. A. Stein*, ed. M. Strickmann (pp. 1–69). Bruxelles: Institut Belge des Hautes Études Chinoises.

Dimitrov, Dragomir
2011 *Śabdālaṃkāradoṣavibhāga: Die Unterscheidung der Lautfiguren und der Fehler, kritische Ausgabe des dritten Kapitels von Daṇḍins Poetik Kāvyādarśa und der tibetischen Übertragung Sñan ṅag me loṅ samt dem Sanskrit-Kommentar des Ratnaśrījñāna, dem tibetischen Kommentar des Dpaṅ Blo gros brtan pa und einer deutschen Übersetzung des Sanskrit-Grundtextes*. Band 2. Wiesbaden: Harrasowitz Verlag.

Eckel, Malcolm David
1987 *Jñānagarbha's Commentary on the Distinction Between the Two Truths: An Eighth Century Handbook of Madhyamaka Philosophy*. Albany: SUNY Press.

Graf, Alexander
2019 "Tibetan Grammar: Si tu Paṇchen and the Tibetan adoption of linguistic knowledge from India." Inauguraldissertation zur Erlangung der Doktorwürde der Philosophischen Fakultätder Universität Heidelberg.

Miller, Roy Andrew
1976 *Studies in the Grammatical Tradition in Tibet*. Amsterdam: John Benjamins B. V.

Smith, E. Gene
2001 *Among Tibetan Texts, History & Literature of the Himalayan Plateau*. Boston: Wisdom Publications.

Tillemans, Tom J.F.
1999 *Scripture, Logic, Language: Essays on Dharmakīrti and His Tibetan Successors*. Boston: Wisdom Publications.

Verhagen, Pieter C.
1994 *A History of Sanskrit Grammatical Literature in Tibet*. Leiden–New York–Köln: E. J. Brill.

(2-2) 和文資料

稲葉 正就
1986 『チベット語古典文法学』法藏館

稲見 正浩
2005 「『プラマーナ・ヴァールティカ』プラマーナシッディ章の研究 (11)」『東京学芸大学紀要 第 2 部門　人文科学』56: 125–140.

今枝 由郎（監訳）
2015 『チベット仏教王伝：ソンツェン・ガンポ物語』岩波文庫

川村 悠人
2017 『バッティの美文詩研究：サンスクリット宮廷文学とパーニニ文法学』法藏館
2021 「『言語学大辞典』所収 「インドの言語学」に対する覚書」『ニダバ』50: 50–63.

キャット・アダム　アルバー、川村悠人
2022 「古代インド言語科学へのいざない (1)—パーニニ文典訳注（規則 1.1.1–1.1.75）—」『東京大学言語学論集』44: 174–231.

阪本（後藤）純子
2018 「音節とマートラー：インド韻律の基礎概念—韻律学、音韻学、文法学からの検証—」『アジア言語文化』9: 1–55.

菅沼 晃
1985 『インド神話伝説辞典』東京堂出版

高崎 直道
1989 『インド古典叢書　宝性論』講談社

班青東周
2020 「チベット語文法学における yi ge の概念」『哲学』72: 31–48.
2021 「チベット語文法学略史」『比較論理学研究』18: 113–133.

（パンチェン・トンドゥプ、広島大学大学院修了［インド哲学］・ねもと　ひろし、広島大学［インド哲学］）

Si tu's Commentary on the *Sum cu pa*: Tibetan Writing System

PAṆ CHEN DON GRUB, NEMOTO Hiroshi

The purpose of this study is to reveal the Tibetans' own understanding of the Tibetan script (*yi ge*) based on a reading of Si tu's commentary on the *Sum cu pa*, entitled *Mkhas pa'i mgul rgyan mu tig phreng mdzes*, one of the leading treatises in classical Tibetan grammar.

Si tu uses the term *yi ge* (Skt. *akṣara*) in two senses: "syllable" (e.g., /a/, /i/, /ka/, /kha/, etc.) and "script" (e.g., ཀ་ ཁ་ etc.). In reading Si tu's commentary, one must always be aware of the ambiguity of *yi ge*.

Then, *yi ge* is divided into two categories: *āli* ("a-series") and *kāli* ("ka-series"). In Si tu's understanding, Thon mi discusses only four *āli*s: /i/, /u/, /e/, and /o/. This means that, according to Si tu, *āli* does not include /a/. The four vowel signs for -i, -u, -e, and -o are also called *āli*.

The thirty syllables from /ka/ to /a/ are called *kāli*. Also, the thirty basic letters (*ming gzhi*) from ཀ་ to ཨ་, which represent these syllables, are called *kāli*. It should be noted that the Tibetan *kāli* is not necessarily an element containing a consonant; for within the thirty *kāli*s is included /a/, which is represented by either འ་ or ཨ་.

The present article contains an annotated Japanese translation of the beginning section of Si tu's commentary. What a close reading of the text reveals is Si tu's unique idea of the ambiguity of *yi ge*, which emerges as he goes back and forth between discussions about written language and spoken language.

The Annals of the Research Project Center for the Comparative Study of Logic 20 (2023): 77–124.
email: 1760838295@qq.com, nemoto@hiroshima-u.ac.jp